佐々木信綱編

竹柏園集

第壹編

博文館藏版

竹柏園集 第二篇 佐々木信綱編

佐々木信綱編

竹柏園集

第壹編

博文館藏版

竹柏園集　第壹編　佐々木信綱編

竹柏園集

第一編

16

佐々木信綱編

竹柏園集 第一編

東京 博文館藏版

高ノ

心の強き人、弱き人、美しき人、清き人、笑ひ易き人、泣き易き人、さまゞの人相集まりて、竹柏會といふ詩文の會は組立てられぬ。會員の短歌新体詩日記紀行文スケッチの類など取集めたるもの、名づけて竹柏園集といふ。こたびのは其第一集にて、つぎ〳〵のも亦年に一度あるは二度、世に公にせむとす。

會員の中には、都にありて文學にのみ志すあり。詩歌には緣とほき病理學を專問とするあり。熱病患者の苦しみの聲耳につきて、ねられぬ夜半の筆のすさびに、悲哀の日記かきつくる看護婦の情ふかきあり。政海の荒波にもまれもまるゝが却つて面白しと思へるあり。畫工あり。ピアノ彈く人あり。工場のせはしき日は暮れて、父母の家に歸らんとする道すがら、小さき胸におのづから浮びいづる其事かの驛物に記して、老後の思出草にせんとする工女の小說ずきなる

あり。何ともいはずして田舍の古寺に引籠りたるあり。名高き山水の忘れ難さに、いつも〳〵おのれの家にはあらで、旅より旅に暮せるあり。廣やかなる林檎畑の主人として、みちのくに住ひするあり。信濃の山奥に潜み居て、をり〳〵の消息文中に涙の文字書さもらすあり。安房の國の鏡が浦に宿りゐて、永き病の根絶やしせんとするあり。都にて交際上手なりし夫人の、今は那智山の麓に住家うつして、質朴なる山里人の樂しき群に入り交れるあり。嵐の夜半あらき海邊の燈臺に、獨ねず番するあり。貧しき村の女教師あり。村長あり。因幡沼のほとりにありて、かつ耕しかつ歌よまんとする農夫あり。黄海の戰にも逢ひて、敵にむかひては獅子の如く猛き水夫の、我等と物語などする折は、小羊の如くすなほにはた愛らしきあり。大磯の美しき別莊に居のこりて、さびしき餘命をおくる未亡人あり。

都に出て歌の道學ばんと思へど、家に資産なければ、雜誌など見てえばしの間せめてもの心なぐさめにする可憐の里少女あり。北海道の深林近くに移り住みて、バイブルをおのが一生の友とせるものあり。新らしき南の島に假住ひして、椰子橄欖などの木の間の月に本國の事思ひいづる者あり。

かゝる人相集まりて月毎の研究會年毎の大會、若しくは春秋の野遊びに、心おさなく詩文の物語などするは、豈無上の娯樂ならずや。道遠くしてつどひより難き人々には、消息文のやりとり、歌の贈答などするも亦快樂中の快樂ならずや。されど我等は娯樂の爲に歌よみ文かゝむとするものにはあらざるなり。詩文の爲に詩文を作らんと思ふものなり。さはいへ我等が今の詩文は、眞の詩文にはあらざるべし。いよ〳〵研究して、眞の詩眞の文の作り出さるべき時に到

着せんこそ、我等が終局の目的なれ。その目的に到着せん事、おぼつかなからんと冷評する人は冷評せよ。我等は失敗を厭はざるものなり。文學の爲に失敗して、文學の爲に戰死せんは、むしろ我等の希望なり。明治三十三年十二月一日會員の一人なる某しるす。

竹柏園集 第一編

目次

星（新體詩）……小花清泉……一
老樹（同）……二
地球（同）……三
冷熱（同）……四
不幸の詩人（同）……四
疑問（同）……五
我名さへ（同）……五
憂（同）……六
姫百合（同）……六
古時計（同）……七
古戰場（同）……八

歴史（同）……九
君が面影（同）……一〇
今はの母（同）……一一
畫工と詩人（同）……一二
みなそこ（美文）……大塚楠緒子……一四
ゆふやみ（同）……三三
春のなげき（同）……四
水仙の香（同）……五九
第二竹柏會記（同）……六六
暗夜（新體詩）……七八
さゆり花（同）……九八
神のさゝやき（同）……九九
露と星（同）……一〇一
はつ戀（同）……一〇二

小さき夢（同）……一〇三
戀を（同）……一〇四
秋を悲しと（同）……一〇五
折にふれては（短歌）……一〇六
紫薇花（短歌）……川田順……一〇八
二つの道（美文）……片山廣子……一二一
むしばし（同）……一二八
我樂しび（同）……一三〇
冬の夜がたり（同）……一三四
七人の友（同）……一四九
神の家（同）……一五八
一日の家刀自（同）……一六四
雪の日（同）……一六九
故郷（同）……一七五

第一竹柏會記（同）……一九二
研究會（同）……二〇五
つゆくさ（短歌）……二一二
行餘集（短歌）……三浦守治……二一六
畫師（美文）……石樽千亦……二二四
筆（同）……二三二
浪（同）……二三六
豐珠集（短歌）……二三八
艦中雜詠（短歌）……吉田又七……二四六
朝顏の花（美文）……長壽吉……二五六
花を葬むる詞（同）……二六一
古河の城趾（同）……二六二
岩門島（同）……二六四
白玉橋（同）……二六六

入間の溪（同）……二六八
高角山（同）……二七〇
古城の梅（同）……二七二
霧降瀧（同）……二七四
妙義の秋（同）……二七六
安房の浦づと（短歌）……印東昌綱……二七九
鷄肋集（短歌）……清水寅治……二八九
いさゝ小笹（短歌）……いさゝ會同人……二九六
川にのぞみて（新体詩）……阿部貞二……三〇八
鶴（同）……三一四
さとぶり（俚歌）……三一六
若くさ（短歌）……三一八
空だのめ（美文）……峰ゆり子……三二一
雨もよひ（同）……三二五

軒づたひ（同）……三二七
手ぐるま（同）……三二八
朝つゆ（同）……三二九
さゆり葉（短歌）……三三五
筑波まうで（美文）……大橋文之……三三七
松かげ集（短歌）……井關照子……三五八
かしこき御かげ（美文）……橘糸重子……三六三
花つみ（同）……三六六
古きピアノ（同）……三六八
故翁追悼會記（同）……三七〇
水のゆくへ（新体詩）……三八〇
ある時（同）……三八〇
ちひさき花（短歌）……三八二
よるの雨（美文）……山崎と和子……三八四

河原（同）……三八六
河舟（同）……三八八
夏の夜（同）……三九三
苗うり（同）……三九五
名なしぐさ（短歌）……三九七
磯菜集（短歌）……大磯會同人……四〇一
二葉三葉（短歌）……竹柏會同人……四一二
椰のほつ枝（短歌）……四三六
水のおと（短歌）……佐々木信綱……五〇一

竹柏園集第壹編目次　終

竹柏園集

第一編

星

小花清泉

消えぬ光を命にて
み空の星と我ならば
過去幾億の人の爲
おくつき處見まもりて
冷たき苔の露の上に
おのが涙もおきそへむ

老樹

社の庭の楠の木は
その幹ふるく苦むして
千枝八千枝すき間なく
しげれる上にしげりあふ
村の小供のあをむきて
見れども見えぬ上つ枝に
今年も雛や巣立ちけむ
わかき小鳥の聲すなり
遠き昔の親鳥も

おなじ梢に巣立ちつゝ
大きくなりて年老いて
こゝの土とはなりにけむ

地球

めぐる地球のゆり床に
しばしの間心地よく
ゆられて遊ぶ塵の子よ
月日は消えて地は失せて
渾沌の世のかへり來て
底なき闇の底ふかく
葬らるべき汝等の
回向は誰のするならむ

冷熱

氷の如く火の如く
燃えては冷えて又燃えて
燃えや果つらむ我が思
冷えや果つらむ我が心

不幸の詩人

戀しき妻にわかれつる
詩人の身こそ悲しけれ
戀しき妻にのこされて
筆の力の進みつゝ
ほまれも高くなりぬれど
ほまれ無くして貧しくて

共に泣きつゝ語らひし
昔の夜半こそ戀しけれ

疑問

何處に今は住むならむ
いかなる家に住むならむ
いかなる妻となりつらむ
いかなる母となりつらむ

我名さへ

泣くをみな子の我ありと
知らでや君のおはすらむ
我が住家さへ我が名さへ
知らでや君のおはすらむ

憂

花の如くに打笑みて
　胸の悲しさつゝめども
君が面輪のいづこかに
　憂の影の絶えぬかな
眉に笑まひの見ゆる時
　口に憂はひそみけり
口に笑まひの見ゆる時
　眉に憂はひそみけり

姫百合

手折らんとせし姫百合の
　花のあまりに清ければ
貴ささへも添はりつゝ
　指だにふれん由もなや
清き少女に近づかば
　神の御前の心地して
くされ果てたる浮れ男の
　胸のけがれも消え失せゝ

古時計

いかなる里の誰が家の
柱に永く掛けられて

時計の斯くは古びけむ
セコンドの針ティクタクと
樂しき時や數へけむ
悲しき時や數へけむ

古戰場

袂の兜かうぶりつ
木の實の矢丸たくはへつ
かなたの岡を根城にて
こなたの坂を關所にて
をさなき友と戰ひし
此處も一つの古戰場
兄よりも亦父よりも

猶恐ろしき大將の
進め〳〵といふまゝに
疾く進みゆく行列の
列におくれてしかられて
弱蟲とのみ笑はれて
泣き出したる我が面輪
老の目にまだ見ゆるかな

歷史

國の歷史はその國の
文字に書かれて殘るらむ
村の歷史は村人の
胸より胸に傳はらむ

君が面影

君の如くに美しく
君の如くにけがれなく
君の如くになつかしき
をみな子の身に宿かりて
君の如くになつかしく
君の如くにけがれなく
君の如くに美しき
をみな子と又生れいでて
後の世までもとこしへに
君が面影のこさまし

今はの母

あがらぬ枕そのまゝに
今はの母は何事か
をさなき我にの給ひぬ
の給ひたりし御言葉の
細く悲しき聲のみは
猶我耳に殘れども
その言の葉の御こゝろは
何とも更に分かざりき
あまりに我は小さくて

畫工と詩人

あはれ畫工はかくいひぬ
『筆の運びの障りなく
　思ふがまゝに昨夜のみは
畫がかれたりし少女子の
　美しき顔疾く見むと
今朝起きいでて眺むれば
　美しき色なかりけり』
あはれ詩人もかくいひぬ
『一昨日かきし我歌の
　美しかりし美しさ
何處ともなく消え失せて
　これも反古とは成にけり』

みなそこ

大塚楠緒子

おなじ世に出づる榮もつ身なりせば、なぜて男には生れざりつる。歴史多き大陸の貴とき土を、うひ〳〵しき靴の踵に踏み馴らしゝまも、思へば夢のたゞ十七の春秋なりしよ。うら若草のわか〳〵と露にも堪へぬかよわき姿を、人はさいなみ世は苦しめて、あはれや逃るゝ方も無み、熱き情を胸の内にたゝみこめて去りしは何處、人の犠とらん事の喜ばしきか、さゞ波立つる恐ろしの水の底をば慕ひつゝ、今も浮藻に黒髪や亂れてかゝるらむ。溺れてうせし其くやしさを誰にか泣きて語るべき。ゆくりなく我寫眞の君が手に入りにしも、生れつる國こそ異なれ、宿世の縁の淺からずありてならんを、珍ら

しとたゞ興がりてのみながめ給ふな。在りし面影の其儘に猶殘りゐるも、また今更の怨みにて、語らば長き身の上がたり、聽きて給はれそも我を何處の誰とおぼす。榮えし國も衰へては過ぎし世界史かたばかり飾るといふも徒に空しき譽にて、紙くゝ虫もあるものを、文字の香もいつまで書の中にとゞまり侍らむ。雨に風に霜にくづれゆく壯嚴の美の殘んの跡も、思へば今幾年の命を大理石の苔の上に繋ぐらんかと、歎きはつきぬ伊太利亞の片ほとり、ディアナの神の鏡と呼ばれつるテミの湖水のかたはらに、果物商なゝ者の娘と生れしものに侍り。祖先は昔戰の疵うけてみまかりしと聽きつれど、其血つたへしとも覺えぬ我父は、劍握る人の物語かたるも憂しとて語らず。母はと人にとはるゝもつらし。それを我身の悲しき事の始めにて、柩の前に燈しつる蠟燭の火の形に似て、濃き綠色の深きな

げきをこめたる、彼の檜の下蔭に、朝は我がもてゆく花に飾られ、夕べはモンテカァヴォーの峯出づる星の光に護られて、猶美しう若やげる身をも惜しまで、疾くまつらはれたる永久の眠の床に入りにしは、我十二の年にて侍りき。清らかなる額に艶よく縮れてかゝりし髪の毛も、頑固なる父を始めて數多の人をよく懷けて情深く美しかりし眼も、明けゆく空のあか星のやうに消え果てつ。母の生れしは佛蘭西にて、父母の顏しらぬほど、ナポリの富みたる家にもらはれて育ちしを、故ありて又斯かる處にはさすらひこしと、靜なる夜がたりに語りきかされしも誠に由緒ありげにて、如何にして斯かる美しき人の我父の如き人にそふらんかとは、幼き心にも屢思ひぬ。ひとゝせ此地に遊びに來けるさる貴族の、そゞろありきに我家の前を通ひ馴れたるが、ふと我母欲しとうち亂るゝよし聽えたるに、父は

怒り母は咽び泣き、我は父の腕に縋り母の膝に伏しまろびて、いかばかり小さき胸を痛めけん。誠にさる事もあり侍りしよ。能く物識り居し人にて、殊に古きもの好む性なりければ、天の樂園などには往きもせで、地の中に猶埋もるゝ前の世の伊太利亞の光さぐりてやあるらんと、其時父の言ひつ。疾く背高くなれよ、十七にもなりなば、好き若者見出して許嫁してん。都人にと思へど詮なし。せめては都に親族にても持てる、餘りに鄙めかぬ人に嫁がせんなどいひて、膝の上に抱きあげられつゝ、柔かき唇の頰に觸るゝに、赤くなりし我面見られん事の耻かしと、後ざまに辷りおりて背を向くれば、桃色のきれ髪の毛に結ひつけて、いざ今日も葡萄の實とりて來、父にいひて、來ん年の祭の衣は、惜しまずよき品を撰ばんとて、寵我手にうちかけられし優しき聲も懷しき面わも、此國の榮の再び此處

にかへり來ん日のありとも、また人には見せじ聽かせじとのやうに失せ侍りき。わが其時の悲しみを思ひやり給へ。さらぬだに深き痛みは何所にも滿ちわたりて、蝙蝠飛びめぐる崩れし寺院の柱、菫の種こぼれそめたる祭檀のきざはし、さては昔は露も滴らん乳色や爲し、黑み青み、時てふものゝ踏み荒らしたる其が中より、技術の光明のあきらかにうち仰がるゝ石像の上などに、世の興廢をほゝゑみて、華やかに日の光はさし添へどいはん方なく暗く淋しき影の、離れがたなげにひそみて附きまとふがいと侘しきに、飽くまでも憎き疫病のマラリヤの手は、强ひて人を黃泉の國へと誘ふなりけり。我母も始めは其熱よりにて終に誘はれてぞゆき侍りし。母みまかりてより暫時してなり。ひとりの兄は絹商人になればとて、遠きナポリへ旅立ちにしが、行迹をばたゞ其儘になして、去年はペルジアにて逢

ひぬ、今年はローマにてとさへさる人のいひつれど、己が家へは更に音づれもせず。そを語り出せば、父は僂麻質斯に惱める膝痛げに動かして、眉根よするのみ。兄は母の連れ子なりき。我は父と母との誠の子なりけれど、兄が爲には父の繼しきに、母の在らずなりしより、此家をいぶせく思ひての故とは思へど、かばかりに親しみ睦ぶ妹をうち捨てゝいかで遠きわたりに行ましゝぞ。今までは怖ろしき夢をみて寢られぬ夜など、眠ぶしといふを强ひて呼びさましては、兄の育ちつるナポリの賑はしき祭の話などきゝつゝ、いつのまにか寢入りて知らず。あけの朝たはぶれに腹立つ兄に叱らるゝも、猶はらからの心おかぬ樂しさなりしを、今は嵐の夜も雨の夜も、いとゞしく物いはずなりし父の側に、あたり寂しく思はれて、手業なき折は戸口に立ちて的もなき空ながむる事屢わりき。煩はしきは兄の

友なる彼のグリエルモよ。氣にくはぬ男なりとて、兄もさのみえた
しうせざりしを、兄の居らずなりし後も、何かと事ありげに出で入
りしては、父に媚び我が顏色うかゞひつ。友と共にアルバノの山深
く分け入りてかゝる花をとりて來ぬ、此色の美しき事よ、此匂のよ
き事よ、此わたりには見ぬ花ぞ、一束は汝が母の墓の前に捧げき
ぬ、一束は汝がほとりにおけかし、我が心とめて折りつるものぞと
て。名もしらぬ赤き花を窓よりさし出して、氣味わるきえみを洩し
ゆく。誰が傍におくものぞとて、たゞちに其花ちらし捨てつるに、
又二日ばかりたちて來つ。彼の花は如何にせしと問ふ。瓶の水のな
くなりぬしを心づかざりしまに枯れぬ。惜しきことしてけりといへ
ば、心にやかなひつる、又折りもて來んと、例の胸わろき眼遣ひし
て歸りゆく後姿の、いかに醜くかりしよ。なぞてバオロの君にくら

べん。バオロとは、をかしとて笑ひ給ふな。身の上かたり始めてはか
ゝる事をもいはではかなはぬこそ恥かしけれ。男らしく美しき其姿
かたちに我が初戀の燃えそめて、深くも胸に刻みつけしとこしへの
名にこそ侍れ。ある時互に心明しあひて、思はず寄り添ひて近づけ
し唇の、いかばかり熱き血燃えて、命もいらじと叫やき交はし侍りけ
ん。ともしらで附き纏ふ彼のグリエルモの終にはあからさまに恥ぢ
もせで許婚の約を爲せ、我家にはえか〳〵のたからありこがねあ
り、身の飾などにも金は惜まじとて、やう〳〵迫る事の繁うなりゆ
くこそ疎ましけれ。かてゝ加へてまた憂き事の出で來侍りき。ある
日バオロのふと音づれ來つ。われはゆくりなく訪はれし嬉しさに、
編み居し靴下の糸の裾にからまるをも、解くま遲しと切り捨てゝ、
走り出で迎へしに、彼はいつになく頸うなだれつゝ、いたくうちし

をれゐたり。何事の起りてかと忙がしく問へば、さればよと我顔を眺めて、俄にさりがたき事の出で來てシチリアへゆく事になりぬ。一二年が程は歸られじと、はや別のつらさの思はれて胸せまり物もいはれずなれる我背を撫でつ。マドナの前に祈りて契りつる我等ぞ、すこやかに待てかし、別るゝまの思ひ出に寫眞とりかはさん程に、新らしく寫しにやゆかん、さな泣きそと、男心の思ひさだめのよきも怨めしきやうにて、いつ旅だち給ふぞととへば、カーチバルの祭典の果の日にと云ふ。其日はたゞわりなき涙にのみくれて、次の日寫しにゆきし寫眞のやがて鮮に出來上りきぬるを取りかはし、別るゝまでの眞心もて、必ず肌にそへんと約しつ。わけもなき悲しさの胸に滿ちて、手業もなさで起き伏しする程、廿日ばかりは走るやうに過ぎて、カーチバルの日は來りぬ。いつもは待ちかねし其日

も、此度はパオロ追ひたてん祭のやうにて忌はしきを、それのみかは誠に忘れもやらぬは其日よ。

酒を呑み肉をほふり、顔を塗り姿を更へて、踊りうたひ狂ひ喜びつゝ、おしなべて人は短き齡をも延ばすべき其日を、我はわが最後の日になして、戀をも此世をも夜半の寢覺の夢よりはかなく見捨てにしこそ口をしけれ。祭の中の日の夕つ方、今宵は心緩やかに何所へか行きてパオロと名殘の物語せましと、共にうたはんといひ踊らんといふ煩さき人目をさけ〳〵て、昨日着し新らしき赤き衣をもわざと着けず、夕暮の色にまぎれてそと戀人の窓を音づれぬれば、とく待てありけり。町の方はマンドリヲ彈く音、ヴィオリヲ摩る音、タンボリンの鈴の音絶間もなく響きて、タランテラ踊るにか、彼所此處とよめきわたるに、人に見られなば強ひて彼方へいざなはれなん、

今宵隱るゝには墓場ならでは外によき處もわらじ、母君の奥つきのほとりにて二人が行末の事をも語らはんと、そなたへ歩み〳〵、バオロの君よ、まこと我を思ひ給ふならば、如何なる障碍にもうち勝ちて、たゞ樂しき行末を待ち給ひてよ、許婚の事今いひ出しゝとて、かたくなる父の諸なひげにもなければといへば、そを今更とふ事かは、汝さへ心かへで誓ひつる詞を忘れずばといふ。などて我が忘るべきたゞ別るゝがつらくてと、うち泣きつゝもひたと二人、歩みにくき迄より添ひて、清き戀のなさけ胸に溢れ、後は物もいはで歩む時、靴音の俄に近づき來しうしろより、抓みかゝらんばかりの聲にて、バオロか、わがいひなづけの女何所へ奪ひゆく、我手にかへさずば辛き目見せんと、酒臭き息吐きて前に立ちふさがりぬるは、疎てや彼のグリエルモよ。如何にして斯ばかり執念く附きまと

ふらんと、腹だたしさにおのづから眉も逆立ちて、我は君といひなづけの約しつる事もなきを、餘りに禮なきことといひ給ふな、今宵バオロの君と母の墓にまうづる道よ、とく立ち去り給へと、バオロを後にかこひつれど、いつもには似もやらぬ荒々しさにて、痛く酒をか呑みたる、足元も危ふげに、わが肩を掴み、バオロが方へ拳を振りあげて、否といはゞ荒くれ男のある程の力してうたんと身構へたり。さては如何になりゆくらんと胸もうちふるへ、勇氣あるバオロには、此男などの勝つべしとも覺えねど、かゝる醉どれを敵手にて、もし疵などの顏につきたらんには、旅だちの前にいまはしからむ。よしいさゝかの疵にても、知らぬところの人に、我がバオロを指ざし笑はせむは堪へがたき事と、われながら賢こくとみに心さだめて、ふりあげたる拳に縋りつきつ。よしなき疑うけつるこそ口惜

しけれ、さらば疑の晴れんやうに君とゆかまし、何處へなりとも伴へといひて、そとバオロに、惡しき酒呑みの何せんやも量り難きを、今宵はわれ欺きてよきやうになせば、君はとく立ち去りて給はれ、あすの夜あすの夜と耳元にさゝやきつれど、醉どれは心づきもせぬげにて、わが腕をしかと取り、去れ〳〵と足踏みして、バオロが暗き並木の中へ立ち去りゆくを、睨みすかしつ。折しも月さし出でて、見えみ見えずみ其後姿の消えも遣らぬを、あな殘り惜しやと追ひゆきて、とりすがりたきやうに慕はるれど、痛きばかりにとらへられぬる腕の振り離たれぬ口をしさよ。町の方へゆきて踊の群に入らばやといへば、否とよ、踊らんとて汝が跡をつけて來しと思ふか、我を嫌ひてバオロ慕ふ憎さよ、こよひは二つのうちの答を必ず一つ聽かではやまじ、否といはゞふるまはんやうこそあれと聲だ

かにいふ。悲しやわれは魔神などに魅入られしやうにて、果は恐ろしうなりつ。よき程に欺むかんとは思へど、もし見すかされなばいかなる憂目にかあはされんと身も震ひ〳〵、われ知らず從ひ來ぬるは湖水の上の崖のほとりなりき。月は清らかに水の上に光を落して、繁りたるオリーヴェの葉の上にてりかへして銀のやうにかゞやけり。果園にはチトローチ、オランジェの今年はみのりやよき、枝ぶりの豐けさ。遠き向ひの方はゼンツァノーよ。白き城の壁の月あかりに薄く見えて、其處にも燈火の繁きは人の打ぞめくにや。此あたりに桂の樹やある。香ばしき香の袖にしむやうにて、斯かる夜やディアナの神の下り來まして、水鏡見つゝ化粧やつくり給ふと、驚かされたる胸のとゞろくまも、猶あまりに、清らかなる景色に見とれをれば、なぞて答をなさぬ、なさずばするやうこそあれと、一き

は聲をはりあげぬるは、さきの程よりくど〳〵と我をさいなみゐたるなるべし。何を答ふるにかと恐る〳〵其面を見れば、いつまでそしらぬ顔して見する、嫌ふ我にかく迄思はれぬるも美しく生れて汝が作れる罪の報ぞ、妻にせずば如何にしてもやまじと、抱きよする力の飽くまで強きも飽くまで疎ましくて、我は出來得る限り胸を据ゑつ。今宵さへ此うはゞみのやうなる手より逃れなば、又なす由もあらんを、とかうして欺くに如かじと、氣味わるさにふるふ聲を、態と嬉しげにつくりて、ゆるし給へ、今迄は君を試みて見しなりき、今は僞とも覺えねば、喜びて君がみ心の儘になり侍らん、あまりに強くとり給ひぬれば、腕のしびれて痛くなりぬるを、放ち給はぬかと、疎ましさを忍びて甘えて見すれば、愚なる彼は忽ちに面を柔らげて、まことかと酒臭き息を近う吐きかけつ。まことならでや

と再び腕にすがりて、この崖を下りて水のほとりにゆきて見まさずや、あまりに景色の清ければと、たくむとにもあらで思はず知らず誘ひぬるも、われから我身を死の淵にいざなひしに外ならず侍りけり。下りぬればあたりは物凄きまで靜かにて、浮草漂ふ水の面は青みわたりつゝ、底は何所までとも知られず。あなたこなたの崖に圍まれて月影の屆かぬあたりは、そよ〳〵と風の木の葉動かす音も、一死神などのつぶやく聲音などのやうにて、つと身にしみて恐ろしう、餘りに思ひしよりも心わろきまで寂しきに、とく歸らましと側をかへりみれば、グリエルモは酒氣もやゝ失せて、眠くやなりし、すべらば一足にて飢ゑたる水に呑まれなん、土もいさゝかくえたる所に足たゆげに立ちてあり。われはふとあとさきもなく、パオロの戀しさ胸に滿ちわたり、遠く別るゝ悲しびも、今宵の物語にいさゝかは

慰めばやと、バオロもわれも思ひゐけるを、あくまでもつきまとひ妨ぐるグリエルモの憎さの、いやがうへに憎うなりて、盲になれる戀の暗には何物も見えず。此男のなくば〳〵と、せめては醉ひ痴れし足の滑りて水の中へ入れかし、這ひ上らんさを逃げのびて、バオロ慕ひてやゆかまし、溺れぬ程にわれつき落さんか、されど〳〵溺れなば如何にすべき、溺れて死しなば如何にすべき、あな恐ろしき事思ふ我かなと、さと吹き來たる風の襟元に冷たくて、あなやと身を縮むるはづみ、いかにかしたりけん小石につまづきて、身をさゝへかねつゝ男の背へ手の觸れたるに、あやしや胸の動悸俄に烈しく、我しらず力を込めて、其大きやかなる体を水の面へと突き飛ばしけるも夢か現か。あはやすさまじき音して沈み入りしと思ひしはおろか、さすが男の賢しく踏みとゞまりて、此方を睨まへたるまなざ

し、あはれ思ひ出でても恐ろしうこそ侍れ。我は今更に惡しき事仕出しつと、悔ゆるも何の甲斐かあらん。憎き女の仕業かなと飛びかゝりくる男の片手に、月の光の凄しくかゞやきしは、恐ろしや、よく砥ぎたる小刀をもちたるなりき。さては始めよりかゝるもの持ちゐけるよと、今は恐ろしさに身もすくみて、うち叫びながらも、のがれん程はと彼方へ走り此方へくゞれど、誰のかゝる夜かゝる所へ救ひに來はべるべき、父も兄も、さてはバオロに今一目の逢瀬さへかなはぬ口惜しさをも思ひ悲しむひまなく、終にははたと追ひつめられ、今は彼奴の手に殺されむよりはと、辛うじて身をうちかはし水の面の月を亂し、怨をのみつゝ底深く沈み入りぬ。口惜しき我執着の殘りては、生き存らふるグリエルモによき事はあらせじ、たゞ戀しきはバオロよ、とこしへに戀ひ渡る苦しさを思ひわはれ　み給

へ。さて我寫眞は羅典人種の風姿の美しうあらはれをれば、よさモデルよとて、君のみ國のさる畫師の君が買ひ取り給ひしを、又しも君が夫君の手にゆづられて、行李の底深くをさめ入れられしかば、何處へもてゆかるゝにかと、心安からず思ひしを、山水の美のまた秀でたる日本の港に上りて、やがて君が机のほとりにおかれ侍りき。あはれかゝる悲しき身の上がたりのありぞとも知らで、あるは髪の結樣衣の着ざま、額つき口つきよしと惡しとさま〴〵に評し弄ばるゝ我寫眞こそ、猶しも憂世へ心殘りの一つに侍れ。つれ〴〵にやおはせし。我身の上がたりは、かばかりよと、語り盡して聲は我机の上の寫眞よりぬけいでつゝ、何處へか消え去りしと思ひしは夢か現か。不思議やエヌスの神にさも似たる美しきまなこのほとりに、露か涙か玉のやうなる雫の。

ゆふやみ

西北の空にさつと金泥の刷毛をかけて、屏風を立て廻はしたかのやうになつて見えてゐるのは赤城と榛名で、薄紫の山々を背に負うて、白妙の雪の條をひいたまゝ、そつと其うしろからさしのぞいて居るのは越後の山である。此邊の春はまだ淺いので、雪おろしの風が、折々ひやり〳〵とこたへる故か、麥は寒そうに穗はまだ縮めて居れど、流石に青々とよく延び揃うてゐて、艶々しいエメラルド色の波をうつては、幾町も〳〵霞の中へ流れ込むだやうになつて、めもはるかに續いてゐる具合は、これに金枠をはめたらば、とんと活動した繪であらう。此間まで北風がびゆう〳〵と口笛を吹きならしてゐた林の中も何時のまにか小鳥の音樂場と變つて、松の若葉と散り殘

りの楢の朽葉とが、美しい紋散らしの幕を張り廻はしてゐると、下には椚の切株がぽく〳〵と首をもたげてそれを眺めてゐる。蓮華や菫や、地の胸にかぢり付いたやうになつて、其處此處に眞紅を染めてゐる檀子の花は、氣むづかしい姫神が、念入りに造らした花輪をすねてこはしてまき散らしたのが、活々と又下界に根をつけて咲いて居るかとも思はれるに、黄色の箔をたゝいて蝶はひら〳〵と其うへを舞うてゐる。

林の中のうね〳〵とした道を、折々ぽつり〳〵と、赤城山へ樹を伐りに往つた馬子が歸つて來る。道のきれた上は土手で瀘車の線路の少し高い勾配が續いてゐる。明日は何神樣の何の日とかいふ吉例なので、餅でも搗かうといふのか、いひ合はしたやうに此邊に餅草摘ひ兒が這ひつくばうてゐる。何處を見ても眼をさへぎるものはない。

鎭守樣の杜のぽつんと黑い外は、縹色の空と綠色の田圃とが對き合うて、何か長話でも始めてゐるやうで、自分を中心にして造化の大コンパスで圓の輪廓がとられてゐるやうに、地平線は遠く薄くかすむで見えてゐる。時間の柏子木が今なつたので、村の學校の運動場は靜まつてしまつた。一調子に遠くからきこえて來る水車の音は、心地好くうたはれる兒守歌のやうで眠氣ざしても來る。長く悠々とうたふ鷄の聲をきいても、日の長い然も田舍の氣樂さは思はれるので、おもしろさうに雲雀の鳴いてゐる天上と、桑畑に出で尺蠖をとりながら、女房達が歌をうたうてゐる地の上との間には、長閑な穩かな、平和な、圓滿な、少しも虛飾氣のない空氣が滿々としてゐるらしい。

今此うら〳〵とした日光を受けながら、うねりくねりしてゐる畔

を拾うて、靜かに此方へ近寄つて來る娘がある。遠見にも近見にも恐らく此村に此娘を知らぬものがあらうか。それは貧しい活計も輝やくばかりに娘のお歌が美しい故であつた。見るから何の見榮もしない手織木綿を着て色の褪めた唐縮緬の帶を、たゞ名ばかりにきりつと結むでゐる。なに風姿に品飾らうぞ、媚をつくらうぞ。けれども無雜作に銀杏返しに束ねてある髮の毛は、ふさ〳〵と漆のやうに日の光に照り添うて、ふた側眼の瞼ぱつちりと愛らしく、ぢつと物を見詰める時のまなざしは、得もいへぬ處女の情に濕んでゐる。袂をくはへてうつぶいて來たが線路に近づいたので、ふつと顏を上げて土手の際に足を留めて、頻に村の停車場の方を見詰めてゐるのを、餅草を摘むでゐた一人の兒は早くも見つけて、

『うたちやん』

娘は答へぬ。知らぬか、ふりかへりもせぬ。

『うたちやん』

他の一人が又呼んだけれど、まだ知らぬ。いつか三人ばかりも驅け寄つて來て、歌ちやん、歌ちやんと袖をひつ張たので、驚いてふりむかうとするとたん、今發車するのか、ピイーと吹いた車長の合圖に流車はじり〳〵と此方へ向けて進行して來る。娘は大急ぎで對き直つて、眼もはなたずに見詰めてゐると、兒供らも茫然とこれも線路へめをむけた。瞬時〳〵に近づいて來るので、お歌は土手へ手を懸けて出來る丈背をのばして見て居る。その間に見る〳〵列車は衝いて來て、はや前へ來た。一つづゝ見のがさぬやうに眼を送つてゆく內、最終より三番目の客車の窓に、ついと此方向いて立つて居る壯年があつた。すると娘は急に頰を赤うして眼に無量の意をこめて、

名殘惜しそうに甲斐なさそうにぢつと其方を見上げた。けれど窓に半身を顯はしてゐる壯年は切に眼を榛名の頂上へ送つて、思ひの其邊を遙ふてゐるので、人が居るか、我を見てゐるか、女か男か、況してお歌といふ娘が己に別を惜むでゐやうとい夢さら知らぬらしく、一向に冷かに、餘念もなく遠き眺望に耽つてゐる。それも瞬間直ちに瀛車は速力を早めて引つさらふやうに其姿を乘せて往つてしまつた。止まれといつて止まらうか。待てといつて待たうか。黑烟を吐いて地響をさして知らぬ顏して走り行く列車の後影を、お歌はなさけなさそうに術なさそうに、眼に泪を一ぱい溜めて見送つた。見送つたけれど、見送つたけれど、やがて松原の内に隱れてしまつて、音も聽えなくなつてしまつて、烟のみ所在なさそうに漂ふてゐたのが、それさへ何時か消え果てゝしまつて、青旗をまいてぽつ

〳〵と踏切から彼方へ歸つて行く驛夫のうしろ影が幽かに見えてゐる。お歌は溜息をついて、倒ふれるやうに芝の上に坐つて、側に咲いてゐる罪もないたんぽの花を、摘むではむしり散らしては捨てゝ膝の上には涙をぽろ〳〵と落してゐる。

歌ちやん歌ちやんと機嫌とつて見たれど、一向にとり合はれぬので、何が何やら譯がわからぬ兒供らは、一人ちり二人ちり、三人とも散つてしまつて、又餅草を摘み爭ふては、きやつ〳〵と笑ふて居る。お歌はじつと坐り込むで、此儘日が暮れやうが夜が明けやうが、いつかな立つまいといふやうな動靜で又立てそうもないやうな樣子で氣の拔けた力無ささうな風をして、うつぶき込むでゐる。昔馴染がどうあつて、どう手を取り合うて、鎭守樣のお神樂を見に往つた事があらうとも、どうせ今は寄り附かれもしないやうな隔てが出來て

しまつてゐる物を。狭い此村ひと村限の外には、耳もない眼もない、然も貧しい此様な身が、いくら慕へばとてずん〳〵と出世する彼の人をどうする事が出來やう。とは知つてゐるけれども、これが譯もなくあきらめられてしまはれるものならば、何も世の中の人は苦しむには及ばぬ筈、此なまぬるい風の心地惡さ。いつそ北から氷の様なのが一度吹いて來て、私の胸の炎を消しては呉れまいか。鳥は枝に何をそら〳〵しう囀つてゐるのであらう。空を飛ぶ事の叶はぬやうに、人の戀は自由にはならぬものを、私をあざ笑ふてゐるのではあるまいか。ゑゝ、なにひとつ私の思を汲んでくれるものはありはせぬ。此間他所でついあの興作づらの話が出て、お歌はたゞもういやや〳〵といふて居りまするとと叔父さんがいはれた時、側に居合した彼の人が、それは果報の降つて來たといふもの、其様な縁が又とあら

うか、どうなりと勸めて遣れと、彼の人の口からまあ言はれたそうな。ゑゝ、悲しいと、それ聽いた時は私はどの様に泣いたらう。お腹が痛うてと母様に返事をした時、思はず唇を嚙むで血さへにじむでゐた。一念は屈くなどと誰れがその様な僞をつき始めたのであらう。昨日不圖田甫を擦れ違ふた時も、はつと思ふて顔から火の出るやうになつたれど、なんの知らぬ顔して行き過ぎてしまうた彼の人の擧動の遣瀬なさ。どの様にか私をさげすむでゐるのであらう。さげすまれてもそれは仕方のない。みんな自分の果敢ない運命とはあきらめてはゐるものゝ、彼の人が故郷へ歸つて來てはまた東京へ出て行く毎、何時もかうして私が泣いて見送つて居る事さへ、毛ほども知られずにしまうのであると思ふと、ほんに世の中の人も物も厭になつてしまう。あの仲好のお兼様にさへ此事ばかりは言はずにおいて

あるを、誰れが察して泣いてくれやう。どうせ自分は一生絲を繰つたり機を織つたり、賃仕事に母様を養ふて行くばかりが能、芥の中に人に口もきかないで暮して仕舞はう。あゝさうしてゐたら淋しい事であらう悲しい事であらう。母様は大層に心配して、けふは東京から美しい姿をして花嫁様が來るといふ。ちよつと其處まで見に行かぬかと慰められて、責められて抱くやうにせらるゝ事があつても、誰が連れてゆかれて見るものか。其様な時は、あゝ今に其様な時はきつと來るに違ひない。其時ばかりはまあ私はどうしてゐたらよからう。どうして居られるであらう、大かた息が絶えて死ぬのでゞもあらうか。お歌は胸の内で此様な事を思ふて、絶望の行末を夢のやうに果敢なむでゐるのである。歌ちやん歌ちやんお前の智には誰がなると、向ふから戯れ合ふて來た若者が、つと紙玉を投げつけて往

つたのを、口惜しそうに見送つたが、鐵橋を越えるのか、又一しきり瀛車の音が轟々と聞えたので、お歌は手を顔にあてゝさめ〴〵と泣出した。鬢のほつれ毛は、のぼせてゐる桃色の頰の上にぶる〳〵と震へて、風は靜かに額を撫てゐる。ひと時、ふた時、いくら時がたつてもお歌は立ちそうにもせぬ。身動きもせぬ。氣の長い春の日さへ、もはや飽んだか暮れさうになつて來たものを。

赤城山はいつか靄に隱れてしまつて、榛名の頂上のみけふの日を惜むで、さらば〳〵といつてゞも居るかのやうに猶薄々と顯はれてゐる。夕日はさま〴〵の形に、さながら宇宙の現象をかたどつてゞもゐるかと思はれるやうな、意味ありげな雲の隙から、めざましい光線を射出すと共に、鎭守様のいちばん高い杉の樹は、まぶしそうに照し返してゐる。田甫の人は散つたので雲雀の聲も止むでしまつた。

大かた麥生の塒に歸つて巣ごもりの妻子に天上の秘密でも囁いてゐるのであらう。水車の音も止むで里川の流のみちよろ〳〵と何か愚痴でもこぼすやうにきこえてゐる。林の中の蓮華や菫は蝴蝶に今宵の宿を貸し爭うてゐるであらう。地平線は何時か搔き消されてしまつて眼界はだん〳〵と狹く黑く、何ものをも呑み盡さん勢に押しせまつて來たが、坐り込んでゐるお歌の姿は、猶土手際に依然としてぽつんと薄黑く見えてゐる。終には暗が包むで仕舞うであらうに。あゝ明星は照らすであらうか。

春のなげき

春を守る姫神の優しき涙と覺えて、終日しめやかに降りける雨も拭へるが如く晴渡りて、花やかにさしかゝりける夕日に一層艶なる粧

を添ふれば、わつか其處此處に殘るにはたづみの中に、白く散り浮ぶ花を文になして、動きゆく薄鈍色の雲の影、木の間を洩れて面白う移り變りぬ。

塒に歸る烏の聲彼方の空の霞に消え、土含みて飛びかひし燕かすめ去りて姿隱しつ。人の顏たれかれと見わかぬばかりに暮れぬれど、雪をもれる花の岡、匂へる色の光をなして、若ものと少女と佇める二人の姿の、薄絹かけたらむ彫象ほどになりて透きて見えぬ。まづいひ出でぬる若ものゝ聲、

『君を促がして此處まで誘なひまゐらせける我心づかひの如何ばかりなりしかを思ひ見給へ。なぞさは安からぬ面色したまふ。此處は人も來ぬ所なるを』斯くいひて美しき顏ながめたるを、少女はうち背きて勝れて咲き滿ちたる櫻のもとによりゐていひぬ。

『胸安からでやは。君の我を誘なひ給ふ事の餘りにいぶかしきを。語り給ふ事のあらば疾く語り給へ。語り合ひし事も未だ少なき君と二人、人氣なき處に斯くて居たらむを、もし人の見たらむには。』安からぬ恐怖滿ちたる聲音して少女のいひけるを、其を聽くや若ものは、つと添ひて立ちつ。若き色の如何に耀くらむかと覺ゆる面は、鈍き夕暮の氣に包まれて見え分かねど、聲に際立てる譽あるは、眞の力を深くこめたればなるべし。

『促し給はずともいはでは忍ばれぬ事なり。されど君よ、其優しき胸を暫時虛しうなして我言を聽き給へ。世の譽友の上の事など絶間なく思居ひ給ひては、上の空走るらむやうにて口惜う思ひ侍らむ。我いはむとする事は我眞心もていひ出づる事なるを、願はくは君も眞心もて迎へ給へ。

とは餘りに理なき願なれど、此處に誘なひ參らせしさへはや無禮なる擧動なりしを』と若ものは微笑みていひ添へつ。轟くらむ胸を强ひて靜めむとするが如く、いと緩かに語り出でぬ。

『おのが君を始めて見しは、去年の彼の演奏會の折なりき。君がヴイオリヲの始めての演奏の、得難き天才を神の此世に紹介せ給ひしものと、人のとよめる聲の暫時都に絶えざりける程の事なり。我友の二人三人は狂せむばかりになりて君に讃美の文を呈しつ。願はくは譽ある友垣の交を結び給へと、幾度もいひ送りしは君もよく知り給ふらむ。されど君はさる事煩がりて好み給はねば、一度の返言も無かりしを、友ゝ皆望を失ひつとて口惜しがりつれど、程經ては早忘れし樣に見ゆるを、われのみは今も猶愈えむやうもなき深き疵になやめるが如くに、苦しみ侍るぞかし。君が玉の腕に放たれし四

の緒の妙じき響空に消え果て、我身ハ夢より醒されしが如く覺えし後も、猶消えでつき纏へるは糸の調のそれのみならず、君が前髪にかゝりけるリボンの色、曲に熱して濃く染みし頰の艶、ニムフの浪の上に躍るらむ樣なりし袖の動き、即ちいみじう奏して立ち給へる君が姿の幻にてぞありける。夜も日もあたりを離れず。好みて誦するバイロンの卷の上、ハイネの文字の上、エルテルの紙の上には、ひと際濃く面影の立ち添ひて、書かい抱きて、われ狂せるに非ずやと危ぶみし事さへありき。其を何故とは我語る迄もなく侍らむ。君は虫の音風の音にも鋭どくも耳側立て給ふべき天才の質受けて生れ給へば、そを聽きわけ給はぬ事はよもあらじ。斯かる思ひは昔より詩人の慣なれば、拙き作をも假そめの情つくり出して、飾り試みむとてのわれ知らぬわだし心にはあらずやと、幾度も我身を責めつれど

絶えて甲斐なきはさる類にはあらず。終には餘りに思ひ佗びて、人にも疑はるゝまで殆病める身の如くになり侍りしかば、今は君に逢ひて、直接に此思を告げむと燃ゆるが如くに思ひしは、幾度なりけむ。

されど猶さやかなる空隈なき月に對ひては心に卑怯出でたゆたはれ、且は時に通ふ夢の内に、君は清き天衣の袖に守られて、人には授けじと神の嚴に宣る聲聽ゆるが如く覺えては、猶更に近づかれで今日迄は兎角して忍びつ。此霞深き春の夕べ、色香夢の如き花の木蔭を便りて、斯くは慓きもせでいひ出で侍り。されど此は我思の半にだも至らぬよしを思し給へ。全からぬ人の辭は、限なき人の思を語り盡しうるものに侍らねば』重荷下したらむが如くに息つける若者は、猶胸躍らして答をまてり。少女は邊近く垂れ下れる花の枝

をまさぐり居しが、此時つと放したるにゆれし梢より花ははら〳〵と散り出でて、前髪に降りかゝりたるを、打拂ふらむやうにてそと涙をぬぐひつ。

『やう〳〵に此日頃少しく安らかになりゐけるかよわき胸を、又もや君のゆくりなく騒がし給ふかな。さらでもつらき世の中に、君が其御詞聽かねばならぬやうに、なぞ我身は生れ侍りけむ。聽かせ給ひし君を怨まむか、聽きたる身を今更にかこち侍らむか』とてなやましげにうつぶきつゝ獨言のやうにいふ。

『さては痛く腹立ち給へるにか』と驚きて問ひ返せば、

『なぞ。そを腹立ち侍らば、身は地獄の底に如何なる惡魔にさいなまれ侍らむ。あまりに君の御詞の泪こぼるゝばかりなるに、只例の我身はかなく思ひしまでに侍るを』

『さらば我思をよく汲み分け給へるにか』

『いとよう、されぞ』と少女は聲震へていひ續けかねたるを、若もものは聽かむとて默しぬ。

『されぞ思ひみたまへ、されぞ』脆き有明の燈火なぞの今しも消むかのやうに途切るゝを、若ものはさまたげじと猶默せり。

『あはれ斯く言はゞ、女の身にはいとも憎き生賢(なまがしこ)き詞よと譏り給はめぞ。先思ひ見給へ。人の戀てふ者は火花の如く一度は激しう散りて、さて灰の樣に白う消ゆるものには侍らずや。何者をも打捨てゝ一度は若き身の誰しもそれに泥(なづ)み果つる事あれぞ、果敢なき夜半の夢と醒め果てたらむ曉には、今更に取捨てしものゝ如何に惜しからむとは思ひ量り給はずや』

『あな聖(ひじり)人なぞの口まねし給ふよ』と若者は支(さへ)ぎり怨まむとす。

『否、悪しうなとり給ひそ、先聽き給へ。君が如き詩人のいかに高き心持ち給へるかは、我如き者に量り知らるゝ事にも侍らねど、彼畫がく人に模型の欠くべからざると均しく、詩作る人にも必ずそれに似たる者ありて、傳記の幾枚かを飾る者とぞ聽き侍る。さらば猶更に果敢なきものには侍らずや』

『そはさならぬ由を前にもいひ侍りしを』

つくろひてにか、心よりにてか、少女の詞の似氣もなく餘りに乾けるに、若ものは一向に悶えて、

『世にありふれたる思と一つには思ひ給ふな。君を我作の尊像に弄ばむなどの浮きたる事ならぬは愚、われはたとへ此儘君ゆゑに才も失せ、いさゝかの我血我熱ふり絞りける描き作の少しばかりさへ、燒き捨てむと人にいはるとも、何とも思ひ侍らじ。君故ならば我身はお

ろか、何ものをも、』

いひ終りて長き息を洩しつ。少女は今はつれなくよそほふ事だに得せで、袖を顏に押しあてぬ。

『さは許嫁の君などの在してにか』若ものゝ斯くいひたるを、少女はあわたゞしく、『などて』といひ消しつ。

『さらばなど憐める由の一言だに聽かせ給はぬ。餘りにゆくりなく斯かる事いひ出でし我れをさげすみ給ふにや。さなり。我友などの君が如き少女と、夕暮斯かる木蔭に佇めるを見出でしならば、昨日迄のわれは如何に禮を亂せるものと罵り侍りけむ。かく我ながら驚るゝ計なる所業しはべるも、怪しき力の擒となれるよしを憐み給へ』

打わぶる聲音は、理性備へたる男の强さならで、情の淵よりわき出る清水の悲しげにせゝらぎ出でたるが如し。猶わかもの、

『君は、去年の冬出だしゝわが集を讀み給ひしや、』

『あはれ、そはわが幾度繰りかへしゝものに侍りけむ。』

『最後の最も長き詩は、我月頃の苦しさを書き續けゝるものに侍るぞや。されば日をも時をも費さでさながらわさ出づる樣にて書き續けゝる文字は、たゞ君に訴へむとてのみの作なりけるを、世の批評家は何くれとのゝしりあへりき。君の繰返し給ひしと聽くこそ嬉しけれ。如何にくりかへし給ひし。』若ものは高き梢の方ながむるやうにて、そと少女の方を見つ。少女はふるへて、

『あな許し給へ。とても短かかるべき命の、まして此夕べほど我心のかき亂れたる事は侍らぬを、今よりは猶更に縮まり侍らむ』とて聲いと低し。

『あやしくなさけなき事のたまふかな。われには唯言に托せてわれ

を紛らはし給ふと外は聽れず、』

『君の前にのたまひし言をかり侍らむ。人の詞は全からぬものなれば、いひとき侍らむも益なし。如何にともおぼし給へ。今より我を憎み給ふと聞くとも、われは唯身の運命を歎き侍らむのみ』

少女の聲はいとも〳〵悲しげなりき。若ものは我知らず其肩に手をかけつ。

『御詞の端の飽くまでも冷かには聽えぬを、なぞさはよそにのみまぎらはし給ふ。さては乾きたる鉢の中の菫を可憐とは見給ひながら、水遣り給はぬに均し。そはたゞちに枯れむのみ、』

少女は默していはぬを、また、

『君は戀故にその妙じき才の荒まむ事を恐れ給へるにはあらずや。さならずや。否、さなるべし。されどそは君の思ひあやまりにては

在さずや、そは』

とて猶いひ續けむとするを、少女はさへぎりて袖を顏よりはなち、て、胸のほとりに眞白き手を組みつ。思ひ定めたらむが如くに、聲をもいさゝか强くなしつ。

『女の身にさる驕の似つかはしからぬことは知り侍り。あはれかにかくと責めさいなみ給ふな。われはあけくれ此身の土に塗れぬまに淸らに消ゆる彼の泡雪の如く消えよかしと念じをり侍るを、ヴイオリヲの絃に心寄するほどは、われ知らず强うなり侍れど、それさしおきては影の如き身なり。戀せむには餘りに物に勝たれ易きかよわき身には侍らずや。憂世の犧に生れて己が儘にはふるまはれぬ悲しきわれなるよしを思しわきてあはれみ給へ。されど御詞のふしのいとも怪しく胸に徹りて、』

と少女は堪へ得でや、露しげき側の芝生の上に身を投げ伏しつ。泪もて磨き出でたる言の葉は情もてる人の腸かきむしるやうにて、

『まこと人の上に力ありて此世總ぶる神てふものゝ在さば、あはれ我ねぎごと今叶へさせ給へ。拙なき身に浴せらるゝなまじひなる讃美の聲は、人の群遠く離れて淋しき所に追ひ上げらるゝ呪咀の聲かと聽え侍る物を、月の桂をらましとばかり空をのみ仰ぎて、露も二心持たでたどりゆく事の、いかに不具に似て苦しきかをおぼし給へ。時あり自ら震へ出づる胸の底のあやしき響には、よく合せたるヴイオリヲの調さへかき亂さるゝ事のあるは、僞はるとも僞はりがたき惑にまどはされ侍るなり。此世にも戀しきものあり、懷しきものあり。誘はるゝ水に散りゆく花の心根を優しとは何時より忍び侍るらむ。さては夢に現に守らるゝ、あはれわれは神のみ心に背くらむ

身かと、われから我を責めねばならぬ苦しさよ。前の世よりの何に契られし契にか。いざや忌まはしき心の汚れのかよわき此身汚さぬ程に、とく永き眠をあたへ給へ。綿の如き鳥の羽根はつかに動かし得らるゝばかりなる此息、止めむに何程の神のみ力要し給ふことかは、地の上に立てりといふもかばかりに小さなる此身、地の下に横たへむに何程の御思慮費やし給ふべきかは。いざや、いざや、疾く我魂を奪ひもてゆき給へ。』

叫び出でたる少女が聲は、若もの〻戀を貫きて雲の上にやさまよふらむ。聽きゐける若ものは眼閉ぢておごそかに默して立ちつ。

人來ぬあたり、物の響もなき岡に、花咲く蔭の興は他に、若き歎の滿ち渡りて、靜なる空をまよひ、花のみは切りに散れり。少女は伏して身動きも爲さず。まことに神ありて願事叶へ其魂うばひもてゆ

きたらむ如くに、夕風かよひて前髪のリボン動けり。ほのめき出ぬ星もひとつ。

水仙の香

大つごもりの夜、家の例とて菊の枝火鉢にくべて、薄くうづまきたつ、それや齡を延ぶらむ烟を吸ひて、おほ福茶のめよとて呼び集へらるゝ祖母君のもとに、母君と弟と、弟は凧の糸のこれにては短かくて足らぬを、一繰り二くり猶添へ給はれと請ふ傍に、我はあくれば歌がるたとらむ人數いくたりよなど、餘念もなくかぞへつ。忙がはしき家の中に、不足といふ事を知らでのどやかなる暮を送り、又ひとしほのどやかなる新年をも迎へける。嗚呼そは幾年の昔とはなりけむ。祖母君も世を去り、弟も僅に十六の春を數へて亡き人の數に入

りぬ。今わが境遇もいたく變りぬ。初々しき事は樂しうもあらずなりて、悲哀といふ聲の胸の奥に疵つき易うなりけるぞ苦しき。六人の同胞のうちわれのみひとり生き殘りけるも、何に深く守られたるならむと、新らしき年の始にはいつも思ふ。

嫁げるものは尙更、未だ嫁がぬ友どちもあはひ遠ざかりては、かつ〳〵に年始の御慶めでたきよしのはがき、假初に遣りとりするのみなるが、今年はわれ試みにさしひかへて見むと、先づ彼方よりのを待てば果して來るは少なかりけり。さればたとへ折々にゆくりなく逢ふことのあるも、互に物語のふしも合はずなりて、彼の暑中休暇の終りし學校の始業の日の朝、待ちかねて嬉しげに手をとり交しつる日のなからひは夢よりも果敢なく消え去りしこそ疎てけれ。嫁ぎては猶更人にとられしやうに、俄に遠慮も生じ、親しさの薄らぐ

も、とかくは女の身の果敢なさなり。女丈夫めかしき獨身の我を張るにあらねば、同情の涙もとむべき友は得がたく、されど女はよくそれにて滿足しあへるなり。

或る詩集を讀みゐて、切りに一句二句の胸深く浸みわたり、さては己がこもれる部屋の、かりに深山の奥に移されたるが如く思ひなさるゝ事あり。障子あくれば山あり谷あり、暗くはびこれる梢の隙より遠き瀧つ瀬の白く見えすき、苦むす岩根に人跡もつかぬ所など思ひ畫きて、折から庭の欅に鳴る風の音は、不意になく鳥の聲に靜けさを添へて、日の影も冷たかるべしなど空想のはびこる頃、玄關の方に人音して客間に高く父の聲の聽えいでたるなど、秘密の興をそがれたるが如く覺ゆるもをかし。

又ふとわが終焉の夕を思ひやることあり。何時何處如何なる所にて、

小さき此身死の手に抱きとらるらむか。二度とはなき死なり。豫めはいひぬ、われは親しき友どちの枕邊をとり圍みて讃美歌うたふが中に果てたしと。われは信仰もなければさる事も思はず。おのが胸のかきくもりたるほどは、空も曇りてあれと思ふ。聽きし事見し事ひとつ〳〵おのが心にはふさはで、同情なきさびしさに涙もめのうちに溜りて、ひとり日當りの椽端に立てれば、日の影あまりはなやかにさして、いよ〳〵物悲しさぞまさる。小さき心の身勝手といふものなるべし。

わが師ともなるべきすべてめうへの人の話を聽くは、その益あるは更にもいはず、まことに心地すが〳〵しくさはやかになるものなれど、青年の人のおのが希望を語り續けたるも又おもしろし。されど

逆境に若き心を驚かされし人の無下に落膽したるは、ともに涙もながさるゝものなりかし。

夕餐果てゝ庭に出で、木立重なれる隙より遠くはなやかなる夕陽を臨めば、思ふこと限もなく沸き出づるが常なり。寒菊の香、枯れながら殘る花畑の、霜柱の末路吾と共に崩さるゝ小道を、みじかき程なれどかなたこなたへゆきかへりしをれば、さらに時のたつを知らず。いつしか日は入りて、坐敷のかたの何處の雨戸も閉されぬるに、われは人なき奥庭の片隅に、いひしらぬ感おこりて、冷たき風に吹かれつゝ飽かぬ時、隣のピヤノの音かすかに響く、ソナタの曲なぞの聽え來なばなぞ思ふ。程經て、燈のもとに入りゆけば、何處にかわりしと母ののたまふ。

學あり才ある人どもの妻娶らむとて容貌をのみ撰り好むが多きこそ

心得ぬ。妻はホームの裝飾品にはあらじ。美を愛するは人の性なれど、さて獅子に乘りたる美の神は常に走りて止まぬものとぞ聽く。影をのみとらへむとせば、影は直ちに消ゆるものなるを。

男女老いたると若きと何れに限らず、避暑などにゆく滊車の内、或は旅宿などにて假初に逢ひて、僅に面影のみを覺えし人、夕暮夜半時ならず思ひうかべて、何處如何なる人にて、今何をか爲せるなど思ふことあり。

名のみ知る人にて、去年音樂會にて見し二人の君、妻なる君は上流の姿に天の美もそはりて優しかりけるが、此頃鴛鴦の夢わかれ〳〵になりけるよし。そを聽きし日はなにとなく思ひしみて、めをとなどいふその解釋を限もなくこゝろみたりき。

ことし五つになれる兒の、坐敷の隅に遊びゐけるが、表のかたに太

鼓の音するとて走り出でけるあとを見るこそおもしろけれ。千代がみあり。あねさまあり。南京だま、おてだま、風月堂の菓子折に添ひける紙を、祖父君にもらひけるピンヘッドの空箱の中へ丁寧にたゝみこみてあるは、大切なるものゝ心ならむか。われも昔は斯かる事したりけん。されど此兒また大きうなりなば、われも昔はかゝる事したりけんとまた思ふ時あらむ。

理屈と感情の調和はいとむづかしきものなるべし。熱血のなきはいかに姿よき歌なりとも讀むに物憂く、さればとてあまりに不自然に狂せるは亦同情の寄せられぬものなり。されど何れかといへば感情に激せるかたには詩趣多きものとわれは思ふ。をり〳〵は心理、道德、哲學、などいふ書とりいづる事あれど、さるには歌など一句も考へいづる事能はず。心ざまの正しううつりゆくのみにて、人も物

も更に懐かしうもなくなるものなり。さる時嘗て作りかけたる戀の歌など見出せば、怪しうて直に破り捨てつ。再び後に反古の切れを眺めて、辛うじて綴りたる句なりけるをと惜しとのみ歎く。歳暮の忙がはしきに、われも縫ものにいそしみつ。衣類のとり合せ帶の仕立にあくがる。その程のみぞ罪なき境には迷ふ。ものより歸りて我部屋に入れば、床の間に活けたる水仙の香の迎へ顔にいみじく匂ふ、心地清めらるゝが如く覺ゆ。萎れたれど猶其香の惜しさに、いまだ取り捨てずしてぞさしおく。

第二竹柏會の記

雨と竹柏會とは、何のかちなみのあるものゝ如し。去年の此日も降りみ降らずみ空定めなかりしを、今年もまた然り。梅を待ち桃を待

ち櫻を待つと共に、春の物の一つとして待ちわび居ける會もはや今日になりぬるよと嬉しく起いでんとする枕上に、まづ口をしう聽えぬるはゑと〳〵としたゝる玉水の音なりけり。さてもあやにくの事よと思へど詮なし。よし天地の美をうたはんとする詩人らのつどふ竹柏會は、雨の爲にぬるゝものならず朽つるものならず。降らばふれ、異なる興の添はんのみと思ひつゝ、九時過る頃日本橋倶樂部にいたれば、はや師の君をはじめ委員の君たち集ひゐ給ひて、何くれといそがしげに働き給へり。例の如くにこやかにゑみ給へる奥村夫人のかたはらにゆきて、あやにくのと空ながめて口惜しがるほど、西刀自日下夫人も來ます。

さて闔引にしてわかつべき扇を、廣間の長押にかけならべんとて、人々と持いだす。やがて富士の大軸の前に、山吹と紫木蘭とをめざ

ましく活けたる廣間の長押の上には、美しき扇面展覽會ぞなれりける。藤あり、牡丹あり、山あり、水あり、今やうの少女あり、いにしへの武將あり。江亭、素明、桂舟、華洲の君たちが、とり〴〵に輕妙に墨を走らしゝ筆つき、小林ぬしが水彩の嶄新なる、いづれをいづれとかいはん。峯の君のは、君みづから美しきが如く美し。淺井の君のもまた君の姿に似たりや。繪を學び給ふとも知らざり〻を、奥ゆかしき業をつゝみ居給ひしかな。獨はづかしきはわれのなり。畫かずば白扇の儘の價はあるべきを、畫きては反古の中の最も價なき反古とはなり終りけん。かしこの椿の目だつ事よと、某の君の指ざす方を見れば、實にも暗き片隅に、己が畫ぞかゝりたる。引物の菓子にこそ似たりけれと獨うち笑ふも、我畫を我詈るなれば、いと心安し。後にきけば、そは峯の君のえ給ひけるよし、あやにくにあたりける

物かな。我生涯の心がかりの一つよ。

程なく椽側の邊に、酒店麥酒店、田樂店文字燒の店をんこ細工の店しつらはれ、最はづれには、寒山の君もの靜に涼爐を据ゑます。櫻餅澁茶甘酒ばかなたの離れて奥まりたるかたなり。雨ふらずば彼所の築山のもと、泉水のほとり、青桐の蔭などに、幾ばくの興を深からしめけんと思へど甲斐なし。人々のさるつぶやきの、何程の力を空にあたふらんものか、雨はたゞ降りにふれり。石燈籠しよんぼりと苔の衣をぬらし、楓の若き芽くれなゐの露をたゝへたり。晴れ居たらんには、此所に麥酒店をと思ひける屋臺の上には簀の子雨にたゝかれてあはれに捨られたる、時に逢はずば人も此の如きものよと思へば、一片の簀子にして猶よく人生を示せり。

雪子の君昌綱ぬしを始めて、幹事委員の君たち皆打そろひぬ。奥村

夫人八代子の君ら、我等は接待の役よとて立ちあがり給へば、小幡の君百合の君、各おのが擔當の店にかゝり給はんとする程、はや客人たち續々車をよせさす。胸に桃色のゑるしつけながら、あるに甲斐なきわれは、ピアノの君と共に彼方此方をさまよふのみ。

春の使に立ちぬる蝶の翅の如く舞ひ出でける案内狀は、近きは上總相摸、遠きは三河尾張の果までも走りゆきければ、今日の樂しさを得べき限、ひとしなみに分たんとし給ひける師の君の御心むなしからで、此雨にはと皆人眉ひそめけるにも似ず、入口ひしめきて應接いとなげなり。來給ふ客人には、竹柏會誌と扇の圖とをまゐらせて、さて二階の會場に導きまゐらす。

會場にはテーブルを置き、梛の鉢を飾り、黄金色したる額の枠の中には、師の君の父母君、ありしに變らぬおもゝちし給ひてかゝりゐ

給ふ。あまりに世を早うし給ひて、此所に喜び給ふべき御聲のきかれえぬこそ、今更の悲しさなれや。

まづ柳原伯の祝辭もて始まれり。師の君の謝辭、洋服二人の君の報告、次に昌綱君父之君の今日の兼題野遊の披講あり。とり〳〵なる歌のおもしろさよ。自轉車をゑばしわづけてと歌ひ給ひし君、外國人に菫つませんと思ひ給ふ君、鬼ごつこ兒を捉ろ兒捕ろと歌ひいで給ひしは彼の一人の洋服の君なり。毛糸あみながら幼兒遊ばせ給ふ君は、其儘を畫になさまほしくぞ思ふ。をはりに師の君の御歌、

春の日のかげ猶高しいざともに
はてなき野邊のはてをきはめん

と、のどかに歌ひ出で給ひける、歌の道をもとおぼすらむ。人々によりてさま〴〵の方よりさま〴〵の詩趣はとらへられぬ。さては神代

より傳へて、日本の歌人の否世界の詩人（うたびと）らの、うけつぎひきつぎ歌ひ續けて、なほ言泉かれず想泉つきざる所、ひとり長詩にのみ限らんや。一句一節なほよく宇宙を解き、人の胸底を貫きえられんものなるを、國粹の和歌は、殊に短詩形にして、能く調のとゝのひたるものにはあらずや。とく大成せる明治の歌あれなど、ひとり思ひつゞけつ。

今や廣間は、いかめしう美しう、されど樂しげに睦ましげに人滿ちわたりぬ。うしろの方には毛氈を敷きて、華洲の君人々の望のまゝに何なりともと、色紙短冊を畫き居給へり。我も白百合をと請ひまゐらすれば、見るまに葉生じ花さきいでぬ。糸重の君かたはらにゐ給ひて、我は先ほど達磨樣をとこひまゐらせて、出來上りしを、人に取られしよとて口惜しがり給ふ。

櫻痴氏の演說は始まれり。輕らかにおもしろう巧に表象の妙を得給へる、などてか我筆にあらはされえむ。拍手に迎へられ拍手に送られて退き給へるに代りて、露伴氏の物がたり始まりぬ。まめやかに詩歌の妙をとき、多作をいましめ給へるわたりは、殊に身にしみてきゝぬ。さきのは大空をふく春風の如く、これは深淵をなづる秋風の如しといはんか。かにかくと書かんはいと愚なる事ならんかし。嬉しさよ、雨は晴れたり。皆人の興とみにまさりて、語らふ聲笑ふ聲いと賑はゝし。男の君たち寫眞撮影ありとて會場より出でます。築山のもと泉水のほとりに立ちつどひ給ふを、こなたより見る、さすがによくうつし給はんとおぼすにか頻に鬚ひねり給ふ君もいませり。うつし終れば次は女の番なり。ふり袖の君たち前側に並びたれば、松の枝竹の雪、蝶鳥のちらし模樣など、一きは美しうて、よそよ

り見なばいかにめざましかりけん。重なりたり、すきたりとて、たやすくは形よくならざりしを、とかくしてはてつ。人々動き出でける程、ゆくりなく池の眞中(たゞなか)より噴水ふきいでて人々を驚かしぬ。霧のやうなる中を花やかなる袖袂のゆきかふ、かなたよりは五色の虹の如くや見えけん。雨後の雲の黄金色して水に映る池のほとりを、褄濡らさじとたゞりて坐敷に歸る。

これよりは餘興を始むと石樽君つげ給ふ程、琴尺八もち出されて三曲の小督ひき出されぬれど、はやうビールの店に、コップ泡立たしむる君も多かりけり。續きては狂言手品、いく度見れども猶おもしろく、時の間なりとも人の心を奪ふ技藝の妙、おのが歌の一度なりとも人の心動かし、事やはあると、今更にはづかしきは才持たぬ身なりや。

いづれの店の前も賑はしくなりぬ。片隅のえんこやの翁がところは、去年の如く女の君達つどひ給ふ。家に待ち給ふ愛子(まなこ)はらからなどへの土産にとおぼし給ふらん。柿を、梨を、金魚をと左右より責められて、翁手のみいそがしをり。リボンの君たちかなた此方にゆきかひて、まめやかに客人をもてなし給ふ。かなたには八重の君百合の君まち受けて、鮎よ櫻餅よと運び出し給ふさまの木立のひまより見えすくは、恰も活きたる錦繪の如し。文字燒の店またいそがはし。隣の田樂店には、洋服の君も紋服の君も舌鼓うちて味ひ給ふ。女の君たち、日頃は手馴れ給ふとも覺えぬ煮込の串もちあつかひて困じぬるもあり。

餘興全く果てし頃は、泡白きビールのコップいと繁く其處此處にゆき通ふ。讀書の君さへ、ライブラリーに背をまろめて書に向ひ給ふ

おもゝちには似もやらで、頻りに世めき給へり。長ぬし、いざ君にもまゐらせんと、コップさし出し給ふ。味ひし事あらねばと、試にうけて見れば。滿々とつぎ給へり。そと口のほとりにもてゆきしに、にがしともにがしや。よし死に瀕すともかゝる藥はのまじ。あはれ我は叙情詩に醉はん哉と、さとこぼち捨てけるを、あなさる事し給ふよと、長ぬし笑ひ居給ふ。

みやびかなりけるは、寒山氏の燒物の店なりけり。人々たちよりて小さき盃に思ふまゝをかきては燒かす。糸重のきみ、羅典語獨逸語などかき給ふを、我も聽きかじりの二つ三つかきちらす。制服の君たち數多つどひ來まして、互に書く。寒山の君、ひとり燒くにいとなげなり。

長押の扇は取のけられて、闥のまゝに客人にわかちぬ。彼所に此所に

見せ交しあひて、君のがよし、取りかへてよ、それ給へなどひしめく。早かへり給ふ君も多くなりゆくを、師の君雪子の君玄關に出て、ねもごろに送り給ふ。

人も散りし頃と、再び二階にあがりて窓のもとに立ちよれば、夕日美しうさしいでて、隅田川の流靜かに流れたり。去年の記をかき給ひし廣子の君、今年はえさらぬさはりありて來まさねば、鋭き御筆のさきにかゝる憂もなしと、心安くながむ。

下に來て見し頃は、客人は全く歸り給へり。今日の一日を樂しく暮しゝ君たちも、歸り給ふやがて書ひろげ給ふもあるべく、ぬひさしゝきぬ縫ひつゞけ給ふもあるべく、夜瀛車にのり給ふ君、寄宿舍に歸り給ふ君など、とり〴〵なるべし。

西刀自とならびて、此會にもともちなみ深き竹屋の君の、今日は來

まさゞりしこそ口惜しかりしが。故郷へ旅し給へるとか。今日の今何を思ひ居給ふにかなど思ふ。

會は終れり。いと樂しく終れり。去年よりはひとしほ準備のよくゆき屆きたるも、彼の洋服二人の君の力はた少なからざらむ。天地の美をうたひてうたひ盡せざる如く、去年生れいでしばかりなる此會よ、あはれとこしへに命長かれ。（明治三十三年四月二十二日）

暗夜

「イヴの仕業をかへり見よ
アダムのけがれ悟らずや
人間こそ慾の器にて

息ある土塊の變化なれ
時あり腐るみにくさは
時あり腐るみにくさは
其あざむきの笠奪ひ
僞の衣剝ぎ剝がば
畫け眼窩は草の宿
野に塵すゑむ髑髏
されば汝等の汚し住む
地を淨めんと善き神は
花を與へて花あらせ
實をむすばせて實あらせ
惡は我等の務にて

罪は我等の榮なり
我王魔王の鞭こそは
妬の矢をぞ射たりける
優しき顔に針をうゑ
うたはせつるは鬼薊
美しき身に毒そゝぎ
嫌はせつるは蛇いちご
薔薇にきせし刺衣
にくみは同じ紅菌
それ十惡の王となり
時ある限つきまどひ
隙ある限わだかまる

怒は熱きくろがねの
性は執念き硫黄の火
善美を街ふ世をすべて
醜きものに爲しなさん
くはだて遠き叛逆の
とゞろく脈は打ちせまり
炎にうめく罪惡の
叫びは擧ぐる合の下
我等眷屬でをどりす
こよひ月なし恐ろしき
天の眼の星もなし
いざや魔王のゆるし受け

その威を借りて遊ばなん
おもしろき夜の慰みは
人間界にいたらばや
來れ我友たはぶれに
彼等が胸をうちたゝき
彼等がほこりあざ笑ひ
彼等が心たぶらかし
思のまゝに踏み荒さなむ

何所ともなくうめきたつ
のゝしり聲の近づけば
地獄の底に沸く雲の

暗より黑く投げられし
鞠にも似たる中央割れて
群れて出で來る小鬼ども
魔王のほとりのがれてし
自由なる一夜よろこびて
くつがへるものの轉ぶもの
躍るものはた跳ぬるもの
泣くか笑ふかひしめきて
かなづる樂のあやしさよ
むかし聽手にうとまれて
怨みて死にし樂人の
腕の筋もてよりし絃

餌を嚙み敵に倒されし
蝮の皮の紋　太鼓
撥は冷えたる赤兒の手
なる音（ね）暗をもつむざきて
あらゆる魔どもこれきかば
吸ひよせられて寄りくらん
小鬼このみて振りたつる
いともすぐれし鈴（りん）こそは
森の小鳥を獲なれたる
彼の梟の眼なりけれ
背を延べ縮め角ふりて
をどり狂へる足拍子

凄き響にあひ合ひて
暗の階段（きざはし）ふみさくる
行列長く進み出でけり

たとへあめつち
うちくづれ
大海こぞり
よせくとも
のろひの炎
きゆべしや
のろひの炎
きえぬまは

惡魔のくには
とこしへよ
われら小鬼も
とこしへよ
ねたため
のろへ
わらへ
き、き、き、

たとへ時てくふ
ものつきて
おとろへんとも

そは善の
すなはちよわき
をはりにて
さかえの勝は
惡にあり

惡魔の王は
とこしへよ
われら小鬼も
とこしへよ
ねたため
のろへ

わらへ
き、き、き、

惡魔の王は
とこしへよ
われら小鬼も
とこしへよ
ねため
のろへ
わらへ
き、き、き、

小鬼の興はたけなはに
マーチの曲の近づきし
所は人のうき世にて
悲鳴をあぐるさよ嵐
何事か地の忌はしき
しらせ齎らし呼ぶに似て
家ごと軒を音づれつ
譽と飢のたゝかひも
しばし休みの息つぎて
夜の黑布の落されし
中に散りけり小鬼ども

ひとつの鬼はつとゆきて
谷の木蔭にゆきくれて
つかれ眠れる旅人の
耳をつまみて走り去りけり

ひとつの鬼はつとゆきて
誰の使にわぶらんか
泉の水を汲まんとて
おそろしき暗ふみてゆく

少女の袖を引きて馳せけり
ひとつの鬼はつとゆきて
重きみ國のまつりごと
思ひわづらひ夢ながら

頭なやますすらをの
額蹴散らし馳けて去りけり

ひとつの鬼はつとゆきて
鴛鴦（をし）の羽（はぶり）の思ひ羽の
なさけも深き妹と脊の
ましろき胸にひとしづく
呪の毒をうちおとし
背中合せに裂かれなん
戀の終は今こんと
あざみ笑ひて隠れ去りけり

ひとつの鬼はつとゆきて
世にうとまれし詩人（うたひと）の

涙をしぼりつくりける
これもてやがてほこるべき
彼が命とたふとべる
薄文字かきし紙の上に
ふたゝび人の讀めぬまで
墨をこぼして走りぬけゝり

ひとつの鬼はつとゆきて
夜すがら金をかぞへては
ひとりほゝゑみうち守る
翁の頭たゝきけり
おどろくそばに物乞の
形になりてあらはれつ

黄金に重き箱一つ
かづき出して逃れ去りけり

ひとつの鬼はつとゆきて
夜すがら起きて書を讀む
博士の目をぞふさぎける
おどろきてたつ其肩に
美人になりてすがりそひ
媚のたもとにひき緊めて
ゑひて見つむる顔を撫で
ほゝゑむ髪をひねり去りけり

ひとつの鬼はつとゆきて
たゞひとり兒の亡き骸を

あすは野末にはふらなん
今宵かぎりの別とて
歎く親族にとりまかれ
棺の前に經を讀む
僧の頭をたゝき去りけり
ひとつの鬼はつとゆきて
昨日はひとりとりこにし
けふは二人をあざむきし
媚を賣りうる妖婦の
化粧の水に土を入れ
朝の寢起のみともなき
顏になすれと笑ひ去りけり

ひとつの鬼はつとゆきて
奥仕へするこしもとが
人目を忍び起いでて
男にやらん文をかく
ともし火消して興じ去りけり
ひとつの鬼はつとゆきて
若き寡婦のねもやらぬ
とばそほと〳〵うちたゝき
亡せにし夫の其まゝの
聲音をまねてにげて去りけり
ひとつの鬼はつとゆきて
ぬすみしてこし盗人の

負へる重荷に石のせて
立ち得ずまろぶかたはらに
はたと手をうち捨て去りけり
ひとつの鬼はつとゆきて
苦患に追はれ死なんとて
命呑まなん川のべに
泣きては拾ふ若者の
袂の小石うばひ去りけり
ひとつの鬼は枕べに
ねふる嬰兒おびやかし
ひとつの鬼は慾深き
嫗の咽を押へけり

雞なきぬ時たちぬ
東の帳あげられて
暗はつゝしみ去らんとす
勝利を得てし小鬼ども
かなたこなたの隈いでて
蜘蛛の子のごと集ひつ
再び列をつくりたて
かちどきあげてうち勇み
マーチをまたも奏で行く
すり響かする絃の音は
虚空に長く尾をひきて
彼の鈴の音の物すごく

まろぶ彼方や其ゆくへ
遠ざかりゆくあやしの音
かすかになりぬいと幽か
聞えずなりぬ今や今
魔の足音はかき消えて
強きかしこき人間の
力はじめてちからある
晝こそ其所に來りけれ
くだかけ鳴きぬ三たび五たび

さゆり花

わだかまりなき鳥のうた

にぎはふ野邊の片すみに
しばしの命わかたれて
無言に匂ふさ百合ばな
もたげかねたる花びらに
露のしづくをやどしつゝ
何をか汝はひとり泣く

神のさゝやき

かたはに似たるふし多き
いかに悲しみ深くとも
さはれ安かれわれ知れり
北斗のひかり北風に

吹かれて磨くかげ見ずや
世にいふ人の樂しびの
其輪のそとに汝ひとり
閉し出されし寂しさは
われいと汝を愛づるより
さづけしものゝある故ぞ

かたはに似たるふし多き
いかに悲しみ深くとも
さはれ安かれわれ知れり
われに契りて背かずば
長くまもらん安かれと

神のおりきてさゝやくは
世のなぐさめのこれ一つ
眉におもひのあとゝめて
つかれて眠る天才の
夢にきこゆる聲ならむ

露と星

糸より細き草の葉を
宿になしつゝおく露に
しばしを契る星のかげ
いさゝか雲の動くにも
聊さか風のさはるにも

ほしの光はけたるべく
露のま玉はくだかれむ
あゝはかなしや露と星

はつ戀

わかき血をぞる肘の底
ひそかにかゝる琴の緒は
しられぬ指にはじかれて
ふるへそらけりいつしかも

白きさゆりのひと雫
深紅(しんく)の色にそめられし
少女心のわづらひを
あゝまもりませ戀の神

小さき夢

秋のこゝろはとかねども
楓に似たるたなそこに
乳さぐる兒のねぶりかな

あきかぜかばふ袖のうち
母のなみだにあらはれて
小さき胸よ何をゆめみる

戀を

かさなる人の群の中
おもはず君を見る時は
にはかに騒ぐ胸の波
衣(きぬ)の上にも見ゆやとて
人目かへりみおさふれど
やがてなげきにうち沈む
あゝさばかりにはづかしき
甲斐ある戀かわが戀の
のぞみはかなく悲しきは
君まだしらぬ戀なるを

秋を悲しと

秋を悲しとなど語る
萩のしづえにこほろぎの
なくねをうしとときく故か
桐の朽葉の根にかへる
ひゝきをうしとき〳〵故か
おぢろの下をゆく水の
くり言うしとときく故か
否人生のその秋の
此身に早も近づきし
その悲しみに胸の痛めば

折にふれては

青ぞらにそびえたてる松の木の
　下にちひさしかたばみのはな
櫻ばなさきみちしより木のもとの
　すみれは人にふまれつゝのみ
書の中にはさみし葉にほひ失せぬ
　なさけかれにしこひ人に似て
大路小路ゆふだつ空のあめのあし
　しげくも人をおひてゆくかな
さゆんかな醒めんかな春の眠より
　世はあき風のつめたくぞふく
人のゆきし遠き國べのとほ〳〵に

たよりあらぬ頃を秋の風ふく
みづぐるま音いまやみてさと川の
　なかれしづかに月は出にけり
うらがれし林のうしろうすぐもの
　ゆき〳〵見えすく秋のくれかな
人を見しところの景色それとなく
　友にかたりてけすおもひかな
人つどひさゝめく聲につゝまれて
　いよ〳〵我ぞさびしかりける
雛わまたかへしつるより庭とりの
　ねこにもおぢずなりにける哉
しばし世のつらさ忘るゝ眠かな
　このまゝ息のたえよとぞ思ふ

紫薇花

川田順

旅にてよめる

いへのかず十にもたらぬ山ざとの
　あけがたさびしにはとりの聲
かすかなる神の御こゑの心地して
　木かげにひゞく水のおとかな
山みちの今年ひらけて去年よりも
　まれになりぬる鹿のこゑかな
すががさをうしろにおひて小林の
　わさかげわくる二人づれかな

とね川のきしの高がやうらがれて
　ながき橋のうへ人かげもなし
人は皆ぬれて立ちにしはたごやの
　あしたのあめに栗のはなちる
あらしふく松の一枝の折れながら
　折れもはてぬがあはれなる哉
森見えてかやぶき見えて畑なかを
　ゆく人見えて夜はあけにけり
おほとねの川のみなかみ春たけて
　ゆづ岩むらにふぢのはな咲く
鳥居入りて松のむらだち杉ばやし
　み社までのとほくもあるかな

しづかなる山の谷まをゆくほどは
　水のこゝろもかみ世なるらむ
きりこめてくらき山路のあきの雨
　いつより降りていつやみにけむ
霜がれ　そとば三つ四つ顯はれぬ
　かはのなかすの芦のむらだち
廣野とぶ鳥のひとむら雲にきえて
　ものおともなしもの影もなし
波の音もふけしづまりてあめ地は
　こゑなき暗になりにけるかな
わたなかの岩はゆすりし末ならむ
　しづかにきゆる岸のしらなみ

波あれて白き霧けぶるありさべの
　いはより岩にとぶかもめかな
しら波のよせてはかへす岩の上に
　うつりうつらぬ月のかげかな
すみなれし都はなれていかなれば
　旅てふものゝうれしかるらむ

吉野

よしの山ひとむらふかく霞めるや
　大みさゝぎのあたりなるらむ

松川浦

いり海はしづかにくれてそと海の
　なみの音とほきゆふ月夜かな

木　曾

ふみわくる岩ねのみすゞうら枯て
　を木曾の秋はあらしなりけり
大ぎその木曾のやま川けふみれば
　雲のなかゆくながれなりけり
　戀の歌の中に
忘れなばうきもつらきもなかるべし
　わがまことこそ悲しかりけれ
もえつきて雪にうもるゝ火の山の
　ひえもはてぬるわがおもひ哉
いさゝかの恨も言はでむしろわれ
　君がわたりを去らむとぞ思ふ

あら海のはなれ小島にこぎゆきて
　船こぼちてん世にはかへらじ
こひしとてうしとておつる涙かな
　たゞ泣く爲のわが世なるらむ
君が墓に生ふるなつ草ふかくとも
　人にからせじわれはらひてむ
くすり養て今はの人にすゝめつる
　その夜こひしき秋のあめかな
おぼつかな慰められてなか〳〵に
　まさるや何のうらみなるらむ
人しれぬなみだのうちにこの春も
　さきてちりけりやまぶきの花

君によりわが戀死なばわがつかの
　うへにさくべき白すみれかな
かもめとぶいそのの松原こゝにして
　君とかたりぬきみとわかれぬ
後の世はわれ少女子にうまれなん
　おもはれてのみ世を過すべく
おもはるゝ思ひになれてうき人の
　たゞ大かたにわれをみるらむ
戀らるゝ身は苦しみもわらじかし
　いかでか君のやつれたるらむ
今にしておもへばくやし少女子の
　名をだになぞか尋ねざりけむ

君も我もとはに若くてさゆる葉の
　はなさく野べに百世へてしが
恨みわびたえばたえねとかきしかど
　まことかれなばわれ如何にせむ
かりそめにありし情もうかりしも
　わすられぬをや戀といふらむ
つらきかなたゞ大方のなさけもて
　このまごころに報いなんとや
忘られぬほだしとなりしひと言や
　なさけに似たるつらさなりけむ
昨日みしをぐさの花のあとふみて
　さむき枯野をひとりゆくかな

人のみまかりけるに

ありし世に泣つくしぬと思へども
いかに殘りしなみだなるらむ

寫眞をみて

ほゝゑみてたてる君哉われをかく
なかせて何のをかしかるらむ

四季の歌の中に

仕へてし殿のむかしをこひをれば
おぼろ月夜にしろきうめちる

こぼれては蝴蝶となりて舞去りぬ
神の御そのゝやまぶきのはな

やま松のかげゆく駒のたてがみに

ふれてみだるゝしら藤のはな

あら鷹の小鳥さきてくふ岩の上に
ひどもと咲けり山ゆりのはな

はたゝ神ふみとゞろかす足もとに
むら雲くづれやま裂けんとす

夕づく日たえ〴〵うつる數かげの
をぐらき水にあきかぜぞ吹く

やけあとに一つたちたる假小屋の
ともし火ほそし夜半のあき風

夕ぐれの秋にもたへしなみだかな
こゝろなきこそ嬉しかりけれ

わがせこの船出をおくる秋の夜に

入江さびしくしぐれふりきぬ
水あれて家ながれたるこのあきの
きぬたさびしき川づらのさと
秋ふかき外山のおくのさよぎぬた
ことしも去年の人やうつらむ
をぐらやま君がみゆきの跡ふりて
むなしき水にもみぢちるなり
百舌のなくせとの竹垣うらがれて
風にふかるゝからすうりかな
折にふれたる
富も名もすてゝかへればふる里の
かきねの小川をぐさはな咲く

とても吹く浪風ならばわれに荒て
たゞひと舟ものこさゞらなむ
小づくゑにつく頬杖のたふれては
おどろかれぬるうすねむり哉
うちゑみて鏡にむかふみどり子は
おのが影とも知らずやあるらむ
父こぐさ母こぐさかれし冬の野の
みなしご草はわが身なりけり
あかつきの鐘の音寒したちねの
み墓のうへもしもやおくらむ
父の病わつしかりしとき　東宮より
盆栽の梅と松とを賜はりぬ又の年の

春その梅を見て

たまはりし御鉢の梅のちるみれば
わかれし春にまたなりにけり

なき人を思ひて

はてもなく光もあらぬ死のうみの
いづこをいかに君のゆくらむ

二つのみち

片山廣子

うき舟の巻もよみ終へぬ。夜はいつしかふけて、室の内に一人ある じ顔したるランプの光も、何となく寂しき心地す。つまも早歸り給ふべきなり。よみ終へし巻をとぢて、我は思はず深き息をつきぬ。我は深き息をつきぬ。かくいはゞ、我を知れる人は、よも誠とせじ。快活なる我夫きゝ給はゞ、めづらしやといかに笑ひたまはむ。あゝ假面の世や。氣がるき我胸より、かゝるため息の出むとは誰か思はむ。我も思はざりき。此頃我はいかにしつるならむ。身に病あるにあらず、心に思ふ事あるにあらず、只何となく氣の沈む折あり。昔こひしと思ふ事あり。こよひの如く深き息の洩るゝ折あり。こは死

期近くなりたるにや。否よもさはあらじ。少し年とりたるけにや。年とれば、人はまじめになるものとか。まじめになりたるなるべし。物よむにもかう浮舟の巻のやうなるは、心にしみてよみし事もなかりき。我がよみしは竹取落窪のたぐひ、殊に心にかなひしはかくや姫なりき。あたりまばゆきまでかゞやきしは、その美貌のみかは、世にすぐれたる才をもち給へればこそ、世に慕はれて世に下らず、弱き女の身をもて五人の男に勝をとり給ひしうへ、かしこき帝王の御心をかけ給ひしにも従はず、悲しき死を知らず、うとましき老をも待たず、うるはしきをとめのまゝにして世を辭し給ひしめでたさ、せめてその万分の一の才と美とあらば、我も亦人にかはりたる世をおくらむものをと、身の不幸をたえずかこちき。かくや姫はコケットのたぐひなり。コケットをめでたしと思ふは、心なしの人なりと

いふ人もありき。心なしか心ありか、我は知らず。只澁面つくりてといきのみつきゐたらむが心ありならば、われはむしろ心なしにて一生を送らむ。我が一生の目的は樂にありと常にいひしが、さる心なしの言をも人はきゝ洩しけむ。よき年頃なり、身にふさはしきよすが定めよとすゝむる人も多くありき。されどさま〴〵の人の上をきくに、いづれの家にもみな樂と共に苦の我をまつらむやうに覺えて、我はいづれへもゆかじといひぬ。さる事いひ〳〵撰び〳〵し末我は終に此家をえらびぬ。よくも撰びしものかな。とつぎてすでに二とせにあまれど、苦樂をともにせむの夫とは、只たのしみを分ちしのみ。苦といふものはかげも見で過ぎぬ。運よき人と世にはいふなるべし。誠に運よき身ぞと我みづからも思ふを、あやし、いかにして胸よりもるゝためいきならむ。我とわが心を探り見れば、そゞ

ろに胸いたき心地す。我にも亦心はありけり。昔もありけるなるべし。今のやうなる心地せし事、かつて一度はありき。四とせの昔、まだ家にありける頃よ、いたく我を望みし人ありき。猶わかき官吏なりき。それの省中第一の才子と聞えて、前途はなゝしき望あればとて、親もゆるし給ひ、我も又ゆかんといひぬ。事の大かた整ひし時、はじめて今の夫の上をきゝぬ。親たちは二たびこれに傾き給ひていづれをか撰ぶと我にとひ給ひき。一人はまじめなる官吏なり。一人ははでなる會社の人なり。一人は大學を出でて漸く三年、位置もひくかりき。一人は十年の間うるさき事務をとりつゞけて、既に世にゆるされたる紳士なりき。事は定まりて我は此方に來ることゝなりぬ。明くる年の春、我は結婚の期の延びしを幸ひに、友と共に大磯に遊びぬ。かしこにてゆくりなくも我が嫁がざりし君にあひぬ。

禱龍館の庭に、友とそゞろありきする君を見たりし時、まさしく寫眞の君よと我は見知りぬ。かなたは見しやいかに、我が入りたる後も、猶談笑しつゝ庭を幾返りしき。宿の者にきゝし、一人は病める君、餘の二人は見舞の君たちなりと。夜に入りて彼人々の室の前を過ぎしに、打よりて酒くむ折と見えて、いと賑はゝしく、一人はをかしき聲をあげて歌ひ居たり。思ふ女にきらはれて、思はぬ女にわらはるゝ、三十過ぎての一人もの、着物のほころび我とぬふ。歌ひをはりて皆大聲に笑ひぬ。其あした見舞の君たちは歸り去りて、病人の君一人まじめなる顏して散歩しぬ。我はひねもす外に出でざりき。又の日友をおくりて停車場にゆきたるに、小さき行李を携へて彼の君の來るを見たり。瀛車の烟も響も遠く消え去りし後までも、我はたゞずみて思はず深き息をつきぬ。其時何となく胸いたく覺えき。

それより既に三年をふれど、我は二たび彼の君を見ず。されど都こひしと思ふ折、都の友こひしと思ふ折など、ふと思ひいづる事あり。我と彼君とは、何のゆかりもなくえにしもなし。されど只思ふ。もし今の夫を知らざりせば、我は必ず彼の君の許にゆきたるなるべし。しかしておくらん一生よ。今わがおくれる世とはいかにかはりたらむ。三年の昔、運命の神は二つのちまたの別るゝ所に我をみちびき給ひて、いづれにゆかんやと問ひ給ひき。とみかうみ見て、我は遂に其一方を選びぬ。其道は平らかにして、果なき花野を一筋に分けゆくなりき。日はうらゝかに照り渡りて、雲雀うたひ蝶まふあたりに、花をつみ草をつみて、我は三年へぬ。知らざりき、春野の遊びもあく折あらんとは。首をめぐらしてはるかに思ふ。我が選ばざりしかなたの道やいかに。山あり、森あり、谷あり。水あるかなたの

道やいかに。否其道はよわき我足にはよも堪へ得じ。二たびえらべといはるとも、我は二たびえらばざるべし。我は猶このまゝに此道をすゝみて、蝶とうかれ鳥とうたひ、花をつみ樂をつみて、つひに我世をはるべきなりと思ふに、そゞろにうみたる心地す。なぜて今宵はかう氣の沈むにやあらん。もし見る人あらば、此せまき土地の人の、さらでも都より來し我を、めづらしきものゝやうにまもり居れる。めも早く口も早く、なにがしの夫人の君は、うかぬ顔し給へりと、たゞちにつたへらるへし。あゝうるさき世や。いですこし浮きたゝばや。夫も早歸り給ふべきなりと思へども、時計の音のみぞさびしく聞ゆる。

わがしれる二人の君の上をかけるなり。知られなば、いかに腹だち給はむ。

むしぼし

古き書ども日にさらさんとて、すのこにとりひろげたるに、こは古本うる店にこそ、まづ我にうらせ給へといふ〳〵、八犬傳をとりて妹のにげゆくも憎けれど、足のふみ所もなければ、追ひもかけず。さま〴〵持ち運び打ひろげなどするに、いつのまにか、虫にはまれたるも多し。中につきて、詩經は祖父の常に手ならさせ給ひし書なるを、失せ給ひしより、又見入る〻人もなくて、年をふるまゝに虫も己が物と領じけるならんと、今更に口惜し。おのれ二三年前、學校にもゆかずなりしより、暇あるよひ〳〵、讀まんとて開きし事もありつれど、關々たる雎鳩や、窈窕たる淑女のなごやかなる氣の通ふにやあらん、心のうちいひしらず安まりて、其まゝに打眠る事もしば

〴〵なりければ、何か、我國の萬葉をも知らぬ身にてと、つひにまた讀まずなりぬ。只にこれのみにはあらず、此所にある大方は、皆人の目にも入らず、日のめもさゝぬ暗き所に閉されて、月日を送るなり。心あらばいかに口惜しからん。我にしてざえと時とだにあらましかば、端よりはし迄よみもてゆかましをと、おのが身のいふかひなさ、常よりも思ひしらる。我讀みうるは只これのみにこそありけれと、源氏物語を取り出して、風のいとよく通る所にひろげたるに、父のながめおはして、いとわろき心かな、おのがものとしいへば、かうもするものかと笑はせ給ふ。これはおのが寶に侍るものを、父の御寶はこれにや、始皇にやき殘されし古代の物にこそはと、大きなる書のいといたう古びて、紙なども黑み破れたるを指せば、口わろきことをいふかな、これはウェブスターの大辭書。わが長崎の

書生時代のかたみなり。打見ほどの古物にもあらず、若かりし頃はそこなどの親にはふさはしからず學問にも勉強せしかば、賞にとて貰ひしなり。其時此書は、長崎にも廣き日本にもいまだ稀なる物なりしかば、人にも見せ我も見、若き人々のやさしからぬ手にもちあつかはれて、かくはなりしなり。思へば其頃の事もおもしろき夢となりつ。我も老いぬ、書も古びぬ。となつかしげになでさせ給ふ。涼しき風心地よくあたりの書どもの上を吹き通ひて、そこはかとなく古き物の香のする、何となくあはれなり。

我たのしび

若き御心の時をもわかぬすさびには、何事をか最もよろこび給ふと人とはゞ、只物語よむ事こそと我は答へなん。長閑なる春の日、野

山にあくがれて花を尋ぬるは、いみじう樂しき遊なめれど、友なき身のいかゞはせん。窓にさし入る月のさやかなるを見ては、えめやかなるよろこび胸にみてども、久しう打詠むれば、おのづからさまざまの思わきいでて、はては涙もおつめり。たへなる物の音はいたう心を動かすものと人はいへど、にぶき我耳には、只天つ風の響のやうにいと遙にこそきけ。女の好むわざをぎのたぐひも、物がたき親に養はれたる身は、夢にだに見し事もなし。只物よむ事を習ひ覺えしより此かた、夜にひるに忘れえぬは物語にこそあれ。あはれ我はいくばくの時をか其うへに費しけん。學校にありける頃も、心のどかに物語のよみたさにのみ、夏冬の休みを待ちわびき。おそろしき試驗の近づきて、人は皆ゆめものどかに結ばず學の道をたどりし時、我は廣き机の上に、いろ〳〵の物の本を積み重ねて、其かげに

て物語よみし事もありき。又いたづきになやみし時、心を靜めてよく眠り給へと醫師にいはれて、打うなづきつゝ、目をねぶりながら、かたへに人なきを見ては、枕の下のたからをとりいでし事もありき。いみじうも罪ふかゝりける心かな。いまやう〳〵おとなびて、さるはかなきすさびに貴き時を過すは、いとわろき事と人もいひ我も思へば、物ぬふ事を我つとめにして、日ねもすに針もつ手をゆるべず、いみじう心をいれたりと人めはつくろへど、猶よべよみし物がたりの事は忘られず。つく〴〵と思ひつゞけて、一人打ゑむ折もあり。昔の愚かしき心は。露ばかりもかはらぬにこそ。我師の君は幾度かいさめ給ひけん。などかう物語にのみ心を入るゝや。いかで其時の半をだにさきて、人をよむことを學び給へ。君が身のめぐりには、さま〴〵の人あるにあらずや。うるはしきあり、やさしきあり、に

くきあり、をかしきあり、思ふ事なげなるあり、悲しめるもあり、病めるもあり。彼等の身の上は皆わはれにめでたき物語なり。彼等の心に潜めるいろ〳〵の思をよみとかば、いかにおもしろからん。いでつとめて彼等をよみ給へ。我はいと若うて母に別れ物語よむたのしみも覺えずなりしが、やう〳〵世にいでまじらひてより、人をよむ事を習ひ覺えき。いみじうも心ゆくわざかな。此頃はまた君をもよみ始めぬと、打ゑみつゝのたまひし事ありき。されぞそれは賢き人の上にこそさもあめれ。神の御手づからかゝせ給ひし最も高く最もめでたき物語は、暗き心の目もておぼろげにもよみ得べしや。我と同じき人の子が暗き目にて見、せまき心にて思ひ、よわき手して書きたるこそ、我にはふさはしきなれ。げに物語なるかな。物語なるかな。あはれ后の位も何にかはせんと、帳ひきたてし昔の人も

おはしけりな。いかで其人のすさびをわがすさびにして、世のおもきつとめもまだ身に負はぬ程をば、心のぞかにすぐしてしがなとなん思ひわたる。若き程は誰もかうやあらんかし。

冬の夜がたり

女教師の君はまばゆきランプの許にイルペンセロソの詩をふしおもしろく讀みきかせ給ひしが、やがてゆり椅子の上に靜かに身をゆらせ給ひて、詩のしづみたる氣は各にもうつりたりと見ゆ。君たちが只今の顏の色よ、ミルトンが物考ふるやうなりと笑ひ給ふに、引き入れられて皆笑ひぬ。寒げなる風の音かな。窓をあけなば星の光いかにさやかならむ。今讀みしおもしろき名のも、昔ながらに輝きてあらんに、みやび心ある人はわけて見給へ。かう寒くては、我は物

うしとのたまふ。星の光よりも、ストーブのかゞやきこそ猶なつかしうと、更に立ちあがる人もなし。今宵はまだ早ければ、猶暫し此處にて暖まり給へ。おもしろき遊びをすべしとのたまふに、皆ゆかしうなりて居たるに、遊びとてもことに珍らしきものもなし。いかゞはせむ。鳥のさへづる眞似してあそばゞや。君たちは皆上手ならむ。されどさいひてはうちきゝわろし。いで只おもしろき問答をしてむ。心々に答へ給へ。いふ處のかはれるも一つにわひたるも、共におもしろからむ。何かはづかしき事のあらむ。此處には更にはづかしき人もあらぬものをと、すこし椅子を推しいだし給ひて、さらばはじめんよ。花といふ花の中にて、如何なる花をかもともめづる。花といふ花の君なる櫻の花は敷島の大和武士がかざしの花。春の野の霞の中に咲きいでて、蝶の羽風にもゆらぐばかりなる菫の花なん

女のこのむ花と答ふ。色といふ色の中てに、如何なる色をかもとも
このめる。色といふ色の中にて、色なき色の白をこそ。否おのれは
色なき色よりも、朝日に匂ふ櫻の色をといふ人しも、其花に似たる
顔の色したり。さらば自然の美といふものゝいづれめでたからぬは
なき中に、何をかわきてめづる。秋の夕ばえの空をと、小聲にいふ人
わり。おのれは如何なるにか、空にのみ心をとゞめ侍り。晴れたる
青空を見れば、心おのづからうらゝかになりて、若き身の望もよろ
こびもさながら胸に充つやうに覺え、浮雲迷ふ夕暮の空は又いみじ
う物哀なるものから、つく〳〵と打見つゝあれば、涙知らず〳〵に
落ちて、心なき身のしめやかなる物おもひなどするは、只此時にぞ
侍る。又今宵などの樣に星の光さやかなる宵の空はしも、見るにう
しと思ひつらしと思ふ心も靜まりて、古のかしこき人にもはぢぬば

かりの清く高き思ひもわきいで侍り。げに昔よりいひふるせる、空
をのみ詠めがちにてといふ言は、おのが形容詞にやといふ。いとよ
き御好み。おのれにはまた木草の綠こそ物よりもなつかしう侍れ。
月の光はめでたけれど、屋根より外のものもなき大路にて見るは、
何となく物たらぬ心地し侍らむ。小猫の額にしも下々にてなぞらへ
いふめる賤が伏屋の、露のおき所もなきわたりも、朽ちたる椽の上
に、夜店にて求めけむ小さき植木などの一つにても見ゆれば、猶こ
れにぞ天つ日の光はさすらむとおぼえて、あはれになつかしう侍り。
晴れたる夜の空にはめもまばゆき星のかゞやきみちたりとも、草木
の種なき北極の氷の中にては、弱きおのれなどはまづ心よりさきに
氷り侍るべしといふをきゝて、此御あげつらひどもいへばしおのれ
に預けさせ給へ。限なき自然の美は、うす暗くせまくるしき學校の

ガラス窓の中より月日の光をうち仰ぎつゝすぐす身の、かるゞくしくあげつらふべき事には侍らじを、いかで師の君にもゆるさせ給はなむ。自然をめづる心は、文明の紳士よりもなほニグローやインヂャンの方深しとか承はりしかど、それは又さるやうありてのこと。今の世の若き人々、シェレー、バアンスが詩の一つ二つをリーダーの中より拾ひよみし、昔のひじりが書き捨ての古ほうごぞもあなぐり出だして、さもおのれ一人悟を得しやうに、人はパンのみにて生くる者にあらずと、いみじくせまき胸の中に自然とかいふものをまるのみに呑まんとのみつとむる程に、おのづからパン得る道には疎くなりて、さすがに樂しからぬ事も恨めしき事もいで來るまゝに、人は汚れたり、人はいつはり多し。我はたゞうるはしき自然を友とせむと、神の給ひし此世界をも、塵の世なぞ思ひ落して、終には月の

都に遊ぶ願をもおこすべし。さる時、神その願をきこしめして、美はしき〳〵えもいはぬ美はしき花園に此人を只一人移し給ひて、余の者どもは皆汚れたり。よみの國にまかりくだれと掟させ給はんに、此人何時までか鳥と共に歌ひ獸と共に遊びつゝ思ふ事なくて侍らむ。猶一人猶一人かたへに人はしうもおぼえて、はてはさびしさ堪がたうなるまゝに、あが神あが神よし黄泉になりとも、いかで人ある所に我を移し給へと祈らで侍らんや。伊太利のこつじきは花の下に眠るなどきけばいとをかしげなれど、雨風荒き夜、あつき衾の中にいねて家なき人の上を思へば、悲しくも痛ましき事。寒き霜夜に母と共に埋火かきならしながら、身の行末を語る樂しみは、海山の廣きながめを一人して詠めんよりも、更に樂しき事とは覺さずや。心せまき女の身にて、おもひを天地にはせんとつとめ、遠き北極にありと

いふ恐ろしき氷の山や、南洋にたしかにありとも知られぬバラダイスのやうなる島など、知らぬ事を遙かに思ひやらんよりも、我に最も近き人間、我を生み給ひし母のはかりがたき愛にても心の中に思ひめぐらすこそ、女の身にはふさはしき事に侍るめれ。自然〳〵など口にいはむひまには、窓に吹き入る木の葉にても手に取り上げてながめんこそ。されどまことは、おのれも自然〳〵と申し〻事侍りき。さるを今年の春古郷の花を見ること侍りき。多くは侍らねど、猶三つ四つ五ついたう大きなる木どもの盛に咲き亂れて、下蔭にはえもいはぬ菫など咲きたる芝生の上を、ゆきかへり〳〵詠め侍りし程に、晴れたる空に折々きこゆる雲雀の聲と共に、心もうら〻かになりて、はては其花の蔭にいこひ、何事を思ふともなく、蝶の心になりていくばくの時をか過し侍りけむ。母の呼ぶ聲にふと立ちあがりしに、

花にしもあらで、袖よりはろ〳〵とこぼれしは毛虫といふいみじき物。思はず身もすくむ樣になりて見れば、猶二つ三つ肩のあたりにやすらふやうにてはひゐたる、其時の心地さながらたえ入るやうに覺えて、まことに天つよはひの半はちゞめ侍りけむ。虫好む姫君とは異に侍りしこと。それより後は、うるはしき花の蔭にも猶よからぬ事もあるものと、みやびやかならぬ事をも思ふやうになり侍りぬる、えれ〳〵しきことなれどと笑ふ。君がきらふは自然にあらで毛虫なりと、師も笑ひ給ふ。げにいときたなき事に移りまゐりし哉。かくあまりめでたき事はとはせ給はで、更に我等にふさはしき事をと申す。さらばとはん。世にありとある人、女にもあれ男にもあれ、名なきはあらじ。其ありとある名の中にて、いかなるをかもとも好ましとは思ふ。人々皆思ひ〳〵にいひいづる名のおのがじしことな

れるにも、心は同じからぬ物なりけり。己は如何なるにか春雄など申す名をきけば、何となくその人ゆかしう思はれてといふ人あるに、あないみじや、それは物語にて女に思はるゝめゝしき男の名に侍るべしといへば、さは權兵衛太郎兵衛などいふをや好ませ給ふと憎む。はかなき爭はやめ給へ。若き心に捨てがたきもろ〳〵のすさびの中にもわきてこれのみは一生捨てがたしと思ふは何と問ひ給へば、只物語よむことこそといひたるに、また例の事と人々笑ふ。さらば今迄よみし物語の男女の中にて、誰をかもともめづる。名をきかむ。おもしろきこと。物語好む姫君まづ始めさせたまへ。いさ誰とか申すべき。更に思ふ人も侍らぬものを。おもしろき心ばへの男女を見れば、いと好もしと直ちに心はうつりながら、其中に一人とりわきて忘れがたき心の友ともすべきは、いまだ見あたり侍らず。思ふ人

のなきは悲しきこと、我を思ふ人のなきよりも更に悲しき事と、師は教へさせ給ひしが、まことに物語の上にてだに、心にしめて思ふ人のなきは淺ましく興なき事といへば、それは月草のうつりやすき御心から、あまり多くの人をおぼすけにや。おのれなどは一度心に思ひそめし事はうつりがたうてなむ。まだいはけなくて三國誌をよみ侍りしに、秋風さむき五丈原に孔明がはかなくなりし處になりて、幼き心も亂れて悲しきに、思はず立ちて持佛に御あかしを捧げ香をくゆらしつゝ、机に伏して泣きゐたるに、祖母のこれは何事とあやしがりたれば、孔明への手向なりと申しゝに、狂氣じみたる子とて、いたく笑はれ侍りき。今やう〳〵おとなびて、昔今の物語をもすこしは讀むにつけても、かのアントニーと共にシーザーが死を惜しみ、又ある時は悲しきヲルが終に涙を流す事も侍れど、かの香をた

きし一夜は更に忘れがたうて、後の世といふものまことにあるものならば、死して其世界の人とならん時、數千歳の昔此世にありし君のいとめでたきさまにかゞやきゐ給はんを見ば、いかに心ゆくおもひせむと、あやしう物ぐるほしき事を思ひつゞけて、ひとり打ゐむ折も侍り。人にかはりたる心になむといふに、三國一の君をめで給ふとは大きなる御このみ。されど孔明の君のめで給ひしは、色黑くにくげなる人なりき。君などその代におはすとも、めもふれ給はじ。痛し〳〵。などてつめらせ給ふ。さるすぐれ人は、何となくけどほき心地もし侍る哉。かの犬山道節などこそ、却て好ましうといへば、いづこか御心に入りしとあやしがる。如何なる人ぞと師も問ひ給へば、姿かたち雄々しくて、怒る事のいみじき上手と答ふ。あやしのもの丶上手やと、皆打亂れてきゝにくき事もいひいづべし。朝顔の

姫君をといふは、人よりも殊に源氏落窪の類をめづる人なり。ビートライスの君といひいづるは、この中にて最も物よくいふ人。わろき好みと師はをかしがり給ふ。鞍馬の御曹子とさへいふ人あるに、誰も〳〵得堪へで笑ふべし。明治の女にはおはさずや。古代の姫君などぞさる言は申させ給ふべき。などて光る源氏とはのたまはせぬ。色もまさりて白かりけんを。さはひとしなみにや覺す。かれはいと強かりしものを。否強しとて、色黑く眼なども恐ろしげにて、髯がちなる御曹子ならば、君はおびえ給ひなむといふに人皆えあらで笑ふ。いかで師の君のもうけたまはらばやといへば、我は誰よりも誰よりもジーニージーンスをこそ好め。似たりや。かのやさしき田舍女と、此學者めきたる御けはひと、何處か似たらんと、心一つに思ふもをかし。十年の昔は我が好みもこれとは異なりき。十年の後此問をくりかへさば

君たちは又今の如く答ふべきやとのたまふに、十年の後は、人々如何なるさまになりて、如何なる所にかあらんとすらん、一度四方にあかれては、又かくあふ時のあらんや。いかにと思ふにも、げに只今の時ばかり樂しく罪なき時は、世をかふるとも又あらずやあらむ。此度は又かはりたる事にせむ。人の口よりいづる言の中にて、最も嬉しき言は何と問ひ給ふ。むづかしき御とひと人々打わびて何もいひいでぬに、師のかたへなる人、それは數々侍るめり。我は君を思ふとか、信ずるとか。されど我は君を知れりといはれたらん時のよろこびはいかならんとかおぼす。信ずるといふことも、たゞ此中にふくまれて侍るべし。高く大なる望をもちながら、事心とかなはず、慷慨悲歌かなしき世に一人さすらふる時、我こそ君を知りたれと、やさしき聲にいふ人あらば、ますらをの目にも涙なくて侍らんや。

まして若く物知らぬ少女が、年久しく籠りし學の窓をあけて、知らぬ世にいで、知らぬ人の中に立ちまじりて、新らしき事を見聞するまゝに、小さき心にはおどろく事多くて、さは社會にあてはまる女とならんには、只やくと顏をつくり衣をかざりて、常に人の上物語の上の評よくいひ、茶をたて、花の枝を折りくねるべきにこそあれ。心は如何なるさまにてもあらなむ。鏡のあるものにもあらばこそ。只なくてえあらぬは枝葉の飾なり。情などいふものは、ありては却て不便なるもの。いで捨てん捨てんと思ひなりながら、猶またくは捨てがたきものなれば、せめて情を抑へ、心を隱し、友ともせまはしからぬ人を友として、同じやうに語りもし笑ひもして、さもおもしろげにおもしろからぬ世を送る程に、せまき心の底に猶折々思ふことのありとも今は知る人もあらじ。みづからもいま暫しあらば忘れ

はつべきなめりと、人知れずつくいきを、誠に知る人もあらじと思ふ時、我は君を知れりといはれたらん、如何なる心地かせむ。おのれを知る者の爲に命をも捧ぐるは、女も同じことに侍るべし。空氣なく日光なくて、花は咲かぬものならば、愛なく同情なくては世にえあらぬ女の心に、もとも嬉しく響かんは此言と力を入れていふ。さる覺えやあると、師はをかしがらせ給ひて、さらば最も悲しき事は、何事をいはんとにもあらで、師の御かたを見たるに、いとほのかに打ゑみて物ものたまはず。もえつくし、火落つる音して、そともの木々を吹き行く風の聲もいとよくきこゆ。打きけば、何をかいふやうなり。

七人の友

折ふしのうつりかはるにつけても、猶昔の友こそこひしけれ。死の我等を隔つるにもあらねど、相見ぬ月日やう〳〵積るまゝに、心は心ながらまじはりは昔のやうにもあらずなりゆく。まことにうき事の限なれど、又思へばよろづ變りゆく世にありて、何かはゑからざる。よし今は手に手をとりて語る事こそ難からめ。只其世の事を思ひいづるのみにても、心はいひしらずあたゝかになるにあらずや。いでやうき世の旅にありて、いみじき花の蔭に一人いこふ時、あらましき風に向ひて一人進む時、われは樂かりし其世の名殘をゑのびつゝ、心は常に若うてあらばや。其かみ學の園にありて、人の世の春の始をすぐしゝ時、うらなき友とたのみしは、一人のみにもあら

ざりき。

ことに幼くよりの友は雲雀の君よ。誠の名は喜代子といひし。さる文學會の夜、シェレーが雲雀の歌聲めでたく打ずし給ひしより、人の呼びそめしなれど、誠に其御心しもあたゝけくのどけき春日おぼえて、常にいひいで給ふことはた、樂しさを胸にたゝみかねて思はずもうたひいづる雲雀の歌のやうにてありき。雲雀は何の思ふ事かある、われも思ふ事なくて世を經ばや。よし我ためいきのまじらずとも、世はなげきの聲にみちたるならずや。さは空たかく思ひあがりて、我世の限たのしき歌をうたひつゞけてんとて、常に〳〵樂しげに見えき。思へばあやしきまでに性かはれりし君とわれと、怪しきまでに親しかりし哉。さかはれどさかしき山のかたへに、目もはるに打つゞく沃野あり。くらく靜なる夜の隣に、百鳥の聲おもし

ろき曙のつゞけるならずや。いちじるく異なれるものも離れずつらなれる世にしあれば、二人の心も又さるかたにあひしならむ。二人は常に物語よむことを好みき。物語のやうになる世の中ならばいかにをかしからんと此人常にいひぬたりしが、學校をいでての後、まことに物語のやうなることありて、こひ人ひとり持ち給ひぬ。西洋ごのみの戀人なりき。英語にて戀の文かきかはし給ひしも、いみじく樣かはりておもしろかりしこと、其戀めでたくなりて其人と一つになりし、まだ去年の春の事なりき。雲雀の歌は長く歌ひつゞけ給ふなめり。やさしき友よ、君を思へば我心もやさしう暖たかにこそなれ。世は君が如き人のみならばいかにめでたからむ。

友の中の花と呼ばれしはふじ子の君なりき。姿のすぐれたるのみかは、才のほども只紫式部エリオットのたぐひと覺えき。みづからも

さやおぼしけん。夜に晝に思ふことは文の事なりき。わが只一つの望は、我等七人の友の一生を物語にかゝんことなり。我筆の限を盡して見せまゐらせん、今より樂しみにして待ち給へなどいふことは常のたはぶれ草なりき。長閑なる春の夜ごろ、霞の奥に眠れるやうなる月をめでつゝ、丁子の花かをりみちたる園の中に、人々たちさまよひしに、此君二階の窓をそとあけて、オーロメオロメオと見いだしたる折などよ。誠に人の心にしみて忘れがたき樣し給へりしかな。學校をいづるやがて、さる文學士の妻ぎみとなりし、いとよきあはひと人々めでわひぬ。はじめの程は文などもありしが、それも去ばしの間にて、新らしき家刀自の君はふるき友にやう〳〵疎くなりぬ。されど學士の君かたへにひかへおはします。今いとめでたき物語も世にいでんものと待ちわたりしに、更に音もなくかげも見え

ず。御子生れぬとき〻しはいつにかありけん。去年の秋の同窓會にて相見し時よ、いたくもかはり給へりしかな。人の來ぬ窓のもとに二人打かたらひつゝ、物語はいつごろ世にはいだし給ふといひしに抱ける幼子ずこし高う抱きあげて、かゝる人物一人世にいだし侍り。御評給はずや、いみじういきゝ〳〵したりとは覺さずや、と少し打笑ひて、誰も十七八の程はわが如き迷をもつものにや侍らん。人の妻と呼ばるゝ身となりても、猶しばしは彼の夢をつゞけ侍りき。物ごとのはかどるといふ春の日も、只うつら〳〵として垣根の櫻のちるを見ては、其一ひら〳〵に心をちらし、鶯の聲にさそはれては家をそとに遊びわりき、ある時は夜風寒き窓をあけて、星のかげを打仰ぎ音もなき天の川の川音に耳をすましなどしつゝ、背子が衣の綻びは目にも心にも入らで侍りし。おもへばはづかしうも侍りしこと、

足袋のあなつくろふは、文章や新体詩のつぎ合せよりも少しむつかしきものと、今なん思ひしり侍りぬる、とて我顔をみて、いみじきこと申したり。神田の師の御許へは猶や參り給ふ。これはいみじきこと申したりとて、幼子を打ちゆりつゝ笑ふに、かしこき悟をも得給へりしかなとて、笑ふ〳〵別れしが、思へばあまりにもをしかりし才よ、いかでさまでいさぎよく思ひすて給ひけむ。

おもしろきは直子の君なり。うはべはやさしげなりしかど、人にまけん事は死ぬるよりもきらひなりと常にいひき。學校を出でては、茶の湯活花琴などに心をいれぬ。露おもしろしとも覺えねど、知らざらんも恥かしきことゝて上手にし給へり。さるを去年の春のことなりけん。おのれは今までいみじく優しき女と人にも思ひたがへられて、しば〳〵いみじきことをひき起し侍り。おのれは猫の子にも

あらぬに、心にそまぬ人の手にもらはれゆきて、きたなげなる厨に鼠の番をし、狹き茶の間のすびつのもとにうづくまりて、主人の歸りを待つより外に樂しみもなく望もなくて、猫のやうなる世を送らんよりは、死なんこそ好ましう侍れ。かく女らしからぬ女は世にやくなきもの、世を捨て世に捨てられて尼とならんこそよけれとて、つひに米國ブリマールの大學に入りぬ。あはれなる君や。誠に女らしからぬ御心ならば、中々に幸ありけんを、君は猶すこし女らしき所のあるにあらずや。そのかみ學校にありて、ヂッケンスの物語を二人して讀みし時、君は其中の人一人をいみじく思ひ給ひき。其おもひ人によく似たる人いきたる人に一人ありき。君は心づき給はざりけん、其名も口にし給はざりき。されど物語の中の人は年を經ても忘れ難くて、見る人〳〵それに似たるもなきに、ゑひて女らしからず

なれるならずやと、我知らぬことを思ひ浮べて、遙に友の行末を思ふに悲しきこと盡きせず。あはれなる君、いかなる世をおくらんとし給ふにか。

その世に親しかりし人猶三人あり。一人はみちのおくとかやいひけん、關のあなたの國にゆき給ひしが、心は互にかはることもなし。かきかはす文にも、印紙二枚をこそはれ。人の笑へど何かあらん。五枚十枚はりたりとも、我等の中にいふべきことの盡きんとも覺えず。あはれ又いつかは、み目にもふれんとする。

又一人は、思ふも悲しき身の上なり。人の身には思はぬ事もおこるものかな。世を守ります神、いかさまに思ひはからせ給ふにかあらむ。

猶一人、今は遠つあふみのあたりにあり。互に忘草つまんとも思はぬに、いつか手にはふれけむ。

かくかき集め思ひいづれば、過ぎにし方の戀しさこそいとゞやる方なけれ。同じ窓のもとに打つどひて、かにかくと末の望を語りあひし七人よ。また七人ながらよりあひて、其あらましのなりもしならずもなりし身の上を語らんはいつにかあらん。いつにかあらん。女は家を身におふやうになりては、立居出入心にもまかせず、殊さら遠き所などにありてはいかゞはせん。年頃の望かなひて都にのぼりなどするに、又一人たちかはり旅になどあらば、つひにありし數ながら逢はんことは難きにやあらん。行末のおぼつかなきにつけても、まづこそ昔はこひしけれ。

神の家

今日はゑはすの二十五日なりけり。二千年の昔の此日しも、尊き神の子人の子となりて、世に生れましぬとぞいひ傳ふる。いでやほと〳〵道忘るゝばかりになりし御堂にも、今日こそはと思ひ立ちぬ。空よく晴れて、あまりなるまで長閑なれど、人の心やさもあらざらん。大路をゆきかふ足音常よりは暇なげなり。只をさな兒どもぞ春をまちかねて、かゆきかくゆく人ごみに羽根つきかはせる。さも思ふ事なげなる哉。なだれと云ふ坂をのぼりゆく程、道のほとりをかいかゞまりながら行きかへり〳〵おとし物尋ぬる人あり。かねにても落しやしけん、今借りしばかりなる金にても落しやしけんと、知らぬことを思ふ。師なる君が、道ゆく時も目をよくわけてゆき給へ、

歌文のくさはひはいとさはに落ちたらんとのたまはしゝ、げにさる事と覺ゆれど、かゝる年の暮などにさる落し物尋ねゆかば、車にやつきあたらんと思ふに、思はず獨ゑみもせらる。獨ゑみをしつゝ道ゆく人は氣ちがひのやうにて氣味わろしと妹のいひし事を思へば、いよ〳〵をかしうもなりぬ。遲くやならんと少し足を早めてゆくに、門のあたり人影も見えず。只大きなる犬一つさも物うげなるさまして出で來ぬ。ジャックなりしか、いましの主人は早來給ひしやといへど見しらぬげなり。我友なる人のにて、學校にゐし頃は知れるどちなりしを、またく忘れやしけんとをかし。戸ハはや閉されたり。祈の眞中と見えていみじう靜かなれば、此はつるまでと石段の上に上りて待つ。日もさし入らず朝風さむく吹く。袖かき合せ戸によりかゝりつゝ、思ふともなく思ふに、こは我一生のかたにあらずや。

内には身も心もあたゝかに多くの人のつどへる時、寒き門べに我只ひとりたゞずみたる、こは我一生のかたにあらずや。御法のかどに入るとは名のみ、天地の間にそびえ立ちたる大きなる御堂、人の目には見えぬ其大なる御堂のたゞ中に、多くの人々打つどひ世の中を思ひ離れて神と語る時、我は只一人して寒き門邊にたてるならずや。風にふかれ道ゆく人のあざけりに心をいため、只一人して立てるならずや。戸一重の内には、信あり、望あり、喜あり。戸を明けて其中に入らんともせず。さて思ひすてゝ門より外にいでんともせず、中間にたゞずみて我と我世を樂しからぬやうに送れるならずやと、思ふともなく思ふに、朝風いとゞ寒く吹きて、祈の時長く覺ゆ犬はいつしか登り來ぬ。ジャックよいたく老いしな、人ならば孫の手ひきて寺詣でする齡ならんに、つま持ちし事ありや、子持ちし事

ありや、戀しと思ふ事ありやと頭を撫づるに、折から外をゆく人、立ちとまりて見てゆきぬ。黑きコート着たる女と黑き犬と立ちたる、目にやとまりけん。やう〳〵にして内に入りぬ。いつよりも人多し。說教師の君、いともおごそかに神の御言を語りいで給ふ。打きくまゝに、昔はかうやうの事も、七人の友ともにゐならびてきゝしぞかしとふと思ひ出でらるゝに、まづこそ過きにし方はこひしけれ。其頃演壇の上に立ちし君は、此君にてはあらざりき。三年四とせ五年ばかり、常にこゝに來ては聞馴れし人の聲を聞かずなりにしは、いつにかありけん。一とせ古鄕の伯父君のもとにゆきて、夏をすぐしゝ事ありき。秋風立つころ都にかへり來て、まづ此所に詣でしに、聖壇に立てる人ぞかはりゐたる。人に聞きしに、こたび三年のいとまを得て、外國の大學に物まなびの爲にといで立たせ給へり

し。まだをとつひの事といへるを聞きて、今一度御言葉をきかでやみしを、殘り多う覺えしが、誠に其御聲はまた聞くまじき宿世やありけん。三とせすぎし此春しも、君は更に遠き此世の外の國へと旅だたせ給ひにき。今かくてある間も、花やかなりし御聲は耳に響く心地す。人のたましひまことにあるものならば、又こそ御聲はきかめ。信ずるといふも又迷ならずやと人はいひしかど、よし迷にもあらばあれ、我は信じて樂しまん。餘りにひやゝかに悟り顏なるは、男ならばさてもありなん。我は女ぞかし。迷ふもよし、疑ふもよし、信ずるもよし。さま〴〵に紛るゝ事なくては、いかで冷やかなる此世を樂しと思ひて送り得ん。我は信ずべし。されぞかく思ひて信ずるは、誠の信にはあらぬにあらずやと、心あやしう亂るゝまゝに、人の聲も神の御聲も耳には入らで、式もはてなんとす。人の皆ひざ

まづくにやをらひざまづけど、月日を經てやう〳〵かたく冷やかになりゆく心を開きて神に祈らんはかたきわざなりけり。あはれいたくもかはりにける心かな。かはらぬ御目にていかに見そなはすらむ。淺ましと覺すらんか。あはれと覺すらんか。神にしいませば、あはれとや覺すらん。あが神、あはれみ給へ。敎ふる人もなく導く人もなくて、迷ひ〳〵廣き世をゆくわれをあはれみ給へ、と念じつゝたちぬ。今迄の靜かなりしに引きかへて、人々皆さきを爭ひていでゆくめれば、しばしあとになりていづるに、友なる人は日あたりよき敷石の上にジャックと共にたゞずみて我を待てり。いかゞおはする、此頃は御心地やよきといへば、いとよう侍り、身やいかゞあらんとも知り侍らねど、心地はいとよう侍りと打ゑみ給へる頰のあたり、いと餘りによき色したり。すみ子の君は今日も來給はぬかな、師範

學校もはや休ならんにといへば、さりとも休まで見ゆ給ふらん、羨しき人かな、今しばしあらばめでたき教育者となり給ひなん、黒き羽織きて物教へ給ふらん樣のはや目に見ゆるかな、我等二人は其時何になりてかあらん。げにもよ何になりてかあらん、と打笑ひつゝ見れば、笑へる友の目には涙のやどるるやうなり。我心やうつりて見えけん。うしろの方に戸をたつる音して、堂もりの翁はとぼ〳〵と下り來ぬ。殘れるはわれ等のみにこそありけれと、急き立ち出でつゝも更にふりかへり見入るゝに、落葉のあともなく掃ひ清めし敷石のあたり、日は長閑に照れるものから、誠に人げもなくさびしげなり。こゝにしも神はすみますらんか。

一日の家とじ

鎌倉にものせる弟たちのむかへにとて、母は朝とくかしこにいでゆき給ひしかば、ならはぬ身にて一日の家とじをつとめんとするに、常に使ひ慣れたる女は、折あしう家に歸りてあらず。殘れるは我よりも年わかうて、物もわきまへぬ程なれば、頼もしげもなきに、妹さへ心地わしとて臥してあれば、よろづ便なき事多かり。かうやうなる折に客のおはさばいかゞはすべきと、心もとなうてすぐすに、龜井戸の伯父君、ふるさとのいとこなどおはしたり。きばしありて父の友なる人の、日頃は音もなきがふりはへて音づれ給へるに、家の内にぎはしうなりぬ。めづらしき人々なり。何をかまゐらせんとさま〴〵思ひめぐらして、女をば物かひにとていだしやり、一人厨に出でて立ち働く。きなれぬ事にしもあらねど、今日は母のおはしまさねば、物きかん人もなくて、たど〴〵しき心一つにさま〴〵の

物調じいづるにも、若しまらうどのこれきこしめさん時、眉ひそめ給はゞいかゞはせんと、たとしへなく心もとなう思はるゝは、學校にありし頃、又なく恐ろしき物と思ひし春秋の試驗をうけし程の心地も、かく迄やはありし。喜代子の君は、此道のいみじき上手におはします。あはれ只今かの御身にならばやゝせめて今日一日なりともと、常にはさしもなき事まで思ひつゞけられて、つくづくと火を眺め居たるに、おもしろげなる笑聲たえず聞えくれば、わがかう汗にぬれ烟にむせぶ厨の中を見だにし給へかしと、わろき心もいできて、いといたう思ひくしたる顔の、ふと瓶の水に移りたるに、我ながら淺ましうなりぬ。これを人の見ん時とおもふに、隣のきりかけのふしあなさへあらはなる心地して、心をつけて見れど人のけはひもせず。軒のつまに虎毛の猫ぞ一つふしたる。目を細うしてこなたを

打まもりたるも、心あらばといとまばゆし。今日はなどかういさゝかなる事に心をば亂すらむ。日のあつきけにやあらんなど思ふ折しも、車の音たかう聞ゆ。又客のきませるにやと靜心もなう出でて見れば、くすしの君なりけり。いかゞせさせ給ひし、妹君は、といみじうせはしげにのたまふ。父もいでておはしたれば退きつ。くだものまゐらせんとて切るに、心あわたゞしき折なれば、指さきすこし疵つきぬ。いさゝかなれど藥の箱いだして、細き布の端などあなぐり居たるに、藥の香のほのかにしたるを、いと疾うかぎつけ給ひつゝ、指を切り給ひしにか。我に見せ給へと障子のあなたよりのたまふ。ことぐしき疵にも侍らずといへど、許させ給はず。ありし藥をあまりなる迄ぬりつけて、白き切れにてまき給ひぬ。此結びあまりに長し。少し切り侍らんとて、箱の中なりし鋏を取りたまへば、

赤うさびたり。いとよき御鋏かなとていみじう力をこめて切らんとし給ふに、いとはやりかなる御心に、誤まちて隣の指まではさみ給ひてけり。聲もたてつべく痛きに、血のいと多くいでたれば、驚きつゝ御顏赤めて、いみじき事をしたり。痛くやおはするとのたまふさきのよりは、少しまさりてといへば、をかしがり給ひて、笑ひ〳〵これもまた包み給ひぬ。世にめづらかなるドクトルにも侍る哉。あすも又參り侍らん。心して其御指使はせ給ふな、とて立ち給ひぬ。名殘をかしきに、痛さも忘れて打笑ひつゝすぐす。日暮れば客も歸り給ひて、いといたう靜になりぬ。母の歸らせ給ふこともやと思へば、心待ちにまつ程、さうゞしき事限なし。車の音のする毎に心ときめきせられてきくに、皆よそにのみ過ぎゆく。今宵は歸らせ給はぬなめり。はや寢んとおもふ折しも、二十日ばかりの月

やう〳〵さしのぼりて、桐の葉ごしに机の許までさし入りたる影、あるかなきかにほのかなり。夜もいたう更けぬ。おきゐて此影をめづる人もあらじと、心さびしうながむるに、いづこともなく蛙の聲の聞えたる、いとをめやかなり。

雪の日

花とめづらん程にはすぎて、いやふりに降りしきる雪、ふきすさぶ風さへそふに、ものゝふが駒なべて立ちならしけん北の荒野の知らぬ景色も思ひうかべらるゝ今日のながめ哉。日は五百重の雲に隱ろひ、鳥はおのがじし狹きねぐらに身を潜め、人も大方ひたやごもりにこもりてやあるらむ。もろ〳〵の物の響靜まりて、天も地も只一つ白妙に埋もれはてぬ。いひしらず靜に、いひしらずさびしき日や。

詩人が歌ふらんもかゝる日にこそあれ。貧者が音に泣くらんもかゝる日にこそあれ。かゝる日にこそ靜に物は思はるれと、つく〴〵と打見つゝしをれば、そゞろに思ひ出づる事こそ多けれ。

我世に生れいでし日も又かうぞ雪は降りけんかし。老人どもの語るにて知りぬ。あはれにもなつかしき其雪の日よ。遙かに思ひかへせば、知らぬ神代の心地もする哉。其日しも初めて此世の息を吸ひ此世の人となりし幼兒よ、神はいかなる運命をか其手には握らせ給ひけん。いかなる事をし、いかなるさまにて世にながらへよとか、其耳にはさゝやき給ひけん。父母はたいかに其生先をゆかしがりて、小さき身一つには負はれぬばかり、さま〴〵なる事を望みもし祝ひもし給ひけん。昔を思ひ今を思ひ又ゆく末を思へば、いふがひなくも悲しき我身なるかな。生れて二十年、さばかり短き月日にもあら

ねど、思へば只みじかき春の夜の夢のやうにて過ぎき。今長閑なる其夢をさまして、我も亦現の世にふみいでんとしつゝあるならずや。前途は遠し望は多しと思へども、月日や望や只此の雪のやうに消去りて、悲しき齡積りに積り、積りて又消え去るべき身の定めにはあらずや。我生れし日の雪は、やがてわが一生を示しゝならずやと、思ふともなく思ひめぐらすに、心も暗うなりゆく。

わが祖父なる人の、古鄕にてうせ給ひしも雪の日なりき。折しも遠き國にゆきてありける若き叔父の、夜深き雪の中に車を走らせ歸りつくやがてぞ絶え入り給ひぬる。通夜して明方にもなりぬ。明けなば人しげくならんに、あまりに所せくあらはなれば、心安き今一かたの家にゆきて、歎くもふすも思ひのまゝにせんと思ひて一人立出でぬ。雪はいつしかやみて、晴れたる空には二つ三つしらみ殘れる

星の影さやかなるに、地は猶眠れるにやあらん。打わたす田も畑も家も林も遠き山々も、一つ雪の下に埋もれはて、、死せるが如く靜なりき。我はいつまで道のたゞ中に立ちつくしけん。秩父の山々山ぎは赤くなりて、いづこともなく鳥の聲のするに、やうやく我にかへりし其時の心地、猶今に忘られず。あはれなりし雪のあした、悲しかりし雪の夜、思ひいづれば猶只今の心地するに、月日はいたくも積りにけり。

又雪の日人に別れし事ありき。別れて五年にやなりぬらん。友といふきはにはあらず、師とも思はざりしかど、一年ばかりがほど學校にて英語をぞ敎へられし。思ふにかなはぬ世の中なれば、昔の友の皆學士などいふ名を得て世に時めくをもよそに見すぐす身なりとか人のいひし。其學士たちよりも猶才はありしとかきゝしかど、あり

やあらずや知らんとも思はざりき。只いみじく世をも人をも思ひおとし、我はがほしたる人にて、憎きことのみいひしかば、人を猫の子ともおぼさんに、なぜかく日々に來ては物敎へ給ふと、人々いたく腹だちて、憎きことをいひもしいはれもして一年近くなりし程に、一日例になく影も見えざりき。猶ほかにもさまゞの事をいとなむ人なれば、いとなきにやあらむと思ひしに、又の日のつとめて初めて聞きぬ。國もとに不幸なる事ありて俄に歸らんとするなりけり。あはれとはさすがに誰もゝ思ひきゝ。其日しも今日のやうに雪ふる日なりき。書の体に人々皆ストーブのもとにつどひて、物よみねたりしかば、我もあとより其むれに入らんと思ひて、長き廊下をたどり來しに、いつの間にか來りけん、此人の校長のもとを暇乞してたちいづるにはたと逢ひぬ。おのれは思はぬ事にてこれより國に

まからんとするなり。今迄は互に知らず知られずて、無禮の罪をかさね侍り。ゆるしゆるされて心よく別れ侍らん、と少し打笑みたる顔には、常のわざけりの色もなかりき。人々に又いつ御目にふれんとも知られず。宜しう申し給へ、とて人を呼ばんとするほどもなう急ぎ立出でぬ。入口の戸のあきたるに、雪をのせたる風さと吹き入りて、身にしむやうに寒き日なりき。門より見えずなりても猶ゑばしたゞずみしが、やがて二階の窓のもとにゆきて見しに、小野の山道ならねど、人げもなくさびしげなるわなたの坂に、黑き外套も白くなりて、吹雪の中をわけゆくかげぞ見えたる。見る〳〵遠くなりて、つひに全く石垣のかげに見えずなりぬ。見えずなりし時、我はいひしらずわはれなる心地して、かく雪を冒し風に向ひて急ぎゆくわなたには、悲しき事のまてるならずや。しか知りつゝも猶しか

急ぎゆくらん心の中はいかならんと、つく〴〵と打ながめつゝ立ちたるに、雪はいやふりに降りしきり、一筋見えし足跡も見えずなりぬ。されどわはれと心に印し、あとは、たはやすくも消えず。同じやうに志を得で世にさすらふる人を見る毎に、わくらはに男とは生れけんをと、痛ましく悲しと思ふ思ひとゞめがたし。わはれなる人、わはれなる人、悲しき此世の旅にありて、今もなほ寒き風に吹かれ〳〵、かきくらす吹雪の中をたどり給ふか。今も猶友なく望なく喜びなき不平の旅をつゞけ給ふか。かく思ひ出づる事も今は絶えて稀になりぬ。されども猶こそ雪のふる日はわはれなれ。

故郷

こひしかりし古郷にも今ぞつきたる。海山遠き外國の塵のちまたに

年をへて、つかれ寢の夢の中にも忘られざりし故郷の地を、今夢ならでも踏まんとするよと思ふに、身を飾らん錦の事はいはずもがなれ、やつれし旅の衣の袖をもとりて、待ち悅ぶらん人のある世にしもあらばと、忘るゝ世もなき悲しみを又更にくり返して、旅人はえばし動かんともせざりき。車めさずや、車呼び侍らんかと、停車場の男はすゝむるに、否ありきてゆかん、昔の人たちが荷をさへ負ひてゆきかへりしけん道を、車にやはのりてゆかんと、獨言のやうにいひてやをら立ち出でぬ。日は花やかに照り渡りて、田の面畑の面、遠き山ぎはまでもけざやかに見渡されたるに、風心地よく吹き渡りて、大根の葉色、かぶのかをり、見し世にかはらぬ秋の暮なり。すぎゆくところ〴〵の賤が家より、稻の香なつかしうかをりいでたる、昨日かも苅りいれけん、垣のあたりにちりこぼれたる落穗のかず〳〵

まだ拂はでぞ殘れる。乞食あり。さる門邊に立ちて物こひたりと見えて、賤の女は大聲にわめきゐたり。まだいなずや、いなずば犬をおこしてほえつかせんぞ、手足もきかぬあはれの者ならば、飯もやらん酒もやらん。いましは何ぞ、さるよきからだもちて、猶人のなさけにはすがらんとするよ、恥は知らずや。物乞は首をたれて急ぎ立ち去らんとせしが、するどき女の言に、何とか思ひけん、さすがに顏は赤くぞなれる。女はうちに入りぬ。外には人影もなし。旅人は二つ三つ銀貨をとり出して男に與へぬ。否、禮には及ばじ。何所にかゆきて又新しき一生をはじめ給へ。我も一度は物乞なりき、と過去に追はるゝが如く、俄に足を早めしが、道はいつしか松の林の中になりぬ。そこはかとなく松の香かをりて、なつかしく賴もしき木蔭をゆくに、心のうちいひしらず安まるやうにて、歩みは又も遲

くなりぬ。林の中ごろに木立ひまわりてわかるゝ所あり。小さき池もありて、かたへは草ぞ茂く生ひたる。旅人は其草の上に腰をおろして、つゝ杖つく〳〵やゝしばしいこひしが、やがて懷より文とおぼしきもの二つとり出しぬ。幾度か開きては讀み返しけん、紙も古びていとといたう手すれたるを、又おしひらきて讀みはじめぬ。

あこよ、あこが不孝の罪、おこたりの罪、一々に數へあげて耳痛き事いふ〳〵別れし日は、よも忘れ給はじ。其折さまでにいはでもあるべかりしをと、翁は今なん我詞をとりかへさまほしき——我いひしことの誠ならざりしにもあらず、誠なりしはそこもよく知りておはすべし——さるは今悲しくいたましき音づれを告げんとするにつけて、やさしからぬ翁が手して書かん事は、あまりに

心ぐるしと思ひ侍ればなり。

そこが負債のため、妹御、都に出でて、人に使はるゝ身となられしは、かねて聞き給ひけん。さてしも身を惜しまで働き給ひし爲かよわき身の堪へでや終にはかなくなり給ひにき。おのれしも折よく都にゆき合せて、今はの言をもきゝ侍り。世の人はいかにもあれ、一人の人なほ君を信じ、君が誠の人とならん日を望みてわれば、思ひ捨てずしてつとめ給へとなん、兄なるそこに申し殘されし。

つげ參らせんことのこれのみにてもあれな。これのみにても人一人の身にはあまる悲しびなり。そこも猶人の子にして人の心を持ちておはさんを。然はあれど悲しびは常に打つゞきて來るものなり。妹御の野邊送りのはつるまでは、母君いとをゝしく忍び給ひ

しかど、終に忍びわへずして打ふし給ひき。七日ばかりありて、又妹御の側にならべ參らせぬ。なからん後わが子に傳へ給へ、かれが上は今はの際までも思ひつゞけ侍り。我子、かならず心を入れかへて、いつかは誠の人となれかしと、終の息に申し殘されし。此文を見ばそこも猶胸痛き事あらん。されど悲しみも又神のたまものゝ一つなりと、後に思ひしり給ふべし。只世を終る迄も、そこを思ひそこが上を祈り、今はの息にもそこが名を呼びつゝゆきし二人の誠の女ありし事を、夢の間も忘れ給ふな。そこも猶誠の人となり給ひなん。此文にな答へ給ひそ。只天がけりつゝも猶絶えずそこが上を祈るかなしき心の望に答へ給へ。翁は常に、母君の友、又妹御の友にて侍りき。世にあらん限は、また人々の思の止まれるそこが友にて侍るべし。事ある時はえか思ひいで給へ。人

の助けはしき時は、しか思ひ出で給へ。

えばしながめゐて、漸くに他の文を開きぬ。

わこよ、翁は今いみじう弱くなりにて侍れば、又立たん事はかなひ侍らじ。されどもし死をかへす藥のあるものならば、そこが文こそはと思はれ侍り。おぼつかなくて積る月日の中にも、猶人の世のいみじき戰をたゞかひつゞけ給ふことゝ常に思ひやりつゝ、勝利の音づれの來ん日はいつかと待ち渡りしを、いみじうもしいで給へりしかな。さる家を持ち財をもつ紳士となり給はんとは。さるは幼きより才おはしき。其才かしこうも用ひ給ひしな。昔樣々の惡しき名よびて、そこを罵りし一言〳〵に取消し侍る。今はそこあるこそ我身の名譽なれ。昔の人々にして世におはさましかば、いかにいかにそこが成功を喜び給はましを、只これのみこそ。

おくられし黄金は、貧家の兒が教育の爲にと、村の師に預け侍り。誰とも知らせ侍らねど、多くの人々いかにそこが惠を喜ばん。翁の喜も思ひやり給へ、此ふみ海を渡りてそこが手にふれん時には、翁は既に世になき人とおぼされよ。さるは翁のみにもあらず、村のたれかれ大方は長き旅路をへて、つひの宿りま近くなりにて侍り。年月へて又古郷を立歸り見給はん日もあらば、其代の老人たち誰かゐ殘りてそこを迎へん。思へばあかず悲しうもあるべき事になん。さばれ今まで生きながらへて、かゝる文をも見る事を得し、何の喜びかはまさり侍らん。さらばよあこ、神は常に共にいまさなむ。

文はいつしか手より落ちて、遠き所をあてなく見つめたる目には、ゑみか涙か、ほのかに浮び出でぬ。

其よの人々は皆よき人なりき。殊にたのもしかりしは此翁よ。せめて今迄世にありて、今一たび相見ることを得ましかば。翁についでは村長の君、いかで今一たび御聲も聞かまほし。今も猶世におはすらんか。否々、よも今迄はおはせじ。我罪をいれざりし其代の人々、誰かは今迄殘りゐて、我罪をゆるさんとする。されどこれより早くはいかでか歸らるべき。身の罪もあがなはずて、と思ひつゞくるほどに、車の音きこえて、我村の方より來るやうなり。村人にもいま顔をあはせんことゝ思ふに、何となく恐ろしきやうになりて、思はずも林の茂みに身を隱しつ。藪のかげより見出すに、大きなる車に芋をつみ載せて、今停車場へとゆく道なるべし。馬さへさも心地よげなるかほしたるに、引く人はふとくめでたき聲にて、昔なじみが忘られよものか、と歌ひつゝぞゆく。日に向ひたれば顔はよく見えた

り。一目にて知りぬ。こは我竹馬の友、其世には級も同じ級、とし
も同じ年なりき。今見ればまだいと若うて、一筋の皺もなく白髪も
見えず。車のうしろの方には、持主の名ぞまだ新らしく書かれたる。
そは此人の名なり。我見し世には、この親なる人の名こそはありけ
れ。今は亡き人にやなりぬらん。母御も長くはおくれてあらじ。彼
翁はげによき人なりき。又よき子らを持ち給へるよ。車は既に遠く
なりて、うたふ聲松の木の間に消え去りてより、やゝ暫くありてや
う〳〵立ち上り歩み出でしが、林のつくる所に來て又足を止めぬ。
地はこゝよりやう〳〵低く成ゆきて、やがて川一筋のあなたは我村
なり。打見おろせば、西の方を圍みて立てる群山までも殘なく見渡さ
る。此村を出でて此村に歸る人、まづこゝにきては昔の我家を望む
を常としき。よし其家は物蔭に隱れて見えずとも。昔のまゝの老木

の梢かはらぬ岡の姿にも、心々に忘れ得ぬ目じるしはありて、かし
こそは我生れし所、かしこそは戀しき人々の我を待つらん所と
――あるは又さる幸なきもわなり――はるかに打見おろすを常とし
き。今し此旅人は、いかなる思ひかおこりけん。いひしらず悲しげな
るその姿は、折しも荷車ひきて來し賤の男が心なき目にさへもとま
りけん、さすがに此人にのみは豊年のよろこびもいはですぎぬ。川
のすぐあなたの家にては、今日しも稻こくと見えて、人々の賑はし
く立ちまふさま、水車のをかしき物音、只手にとるやうなり。其昔
こゝのあるじなる人は、おもしろき人なりき。此人の目に入らで此
橋を渡り此村に入ることはなし難き所と、人々いひき。七日に一度
市にゆきし時のみはさもやわらざりけん。昔こひしき旅人は、せめ
て一人なりとも見し世の人の見まほしきに、此かぞを過ぎんとして

すぎがてにたゞずみぬ。五十年百年も經にけんと見えし古物の帽子、只今いで來るか、きゝなれし聲今聞ゆるかと思ふに、今は此翁も失せけるなるべし。人々はさも急がしげに立ち働らきて、知らぬ旅人に目をとめんともせず。誠にあらぬ世に來し心地してたてるに、あらき風は庭に散りぼふからを吹き立てゝ、袖までも吹きつけたり。何のしるしとかさとりけん。俄に身をかへして、昔住みけん岡邊の家にと足をむけぬ。

かねては家の前は知らぬ顔にゆきすぎて、御寺に昇る坂道よりふりかへり見おろさんと思ひ定めき。來て見れば更に見しれる人もなくことゝふ人もあらず。昔の家は人もすまであはれにあれはてたり。軒の落ちたるは、いにし冬の雪の爲にや。垣は横さまに仆れふして小路をおほひ、母が手入れに清げなりし庭のおもはた、名も知らぬ

草に埋もれはてたり。戸はとざまりもなければたゞちにあきぬ。帽をとりて荒れたる厨にふみ入るに、塵は年と共にぞ積れる。片隅に大きなる箱の只一つ殘れる、誰も要なしと見てや捨て置きけん。其はしに腰うちかけ、雙の手に顔を被ひてつくづくと思に沈むに、ありし世のおもかげは又目の前に浮び出づ。ゐろりの火は又もやおこりて、赤き火かげを壁にうつし、夕けの膳手馴の椀も箸も見ゆ。老いたる人一人何やらん鍋の中をかき廻しゐる片へには、頰の色よき子一心に火を見つめたり。さまざまのをかしき物の形や見ゆるならん。いざあこよ、夕けを始めずや、夕けはてなばあすの下ざらひし給へ、御身は勉強だにせば今にいとめでたき學者とならんと師ののたまはしゝぞ、老たる母の爲よう勉強すべきな。聲は今も猶耳に聞ゆるやうなり。隅の方に据ゑつけの古筆筒、いづこの誰が手にか渡りけ

ん。猶おもかげに見ゆ。其かたへに立ちてなりき、老いたる人は小抽斗の中より、ありがね殘らず取出して、半錢も殘さず若者が白き手に渡しぬ。荒き仕事にこはくなれる手をもて。こは心して用ひ給へ、御身が何とかなる迄は、僅づつにてもおくるやうに心がけてん遠くなりても家の事をな忘れそ。やがて世になりいでて、我おもてをもおこさん日を、今よりまちてあらんに。

ゆるし給へ神……

目に入るものなべて其世を思ひ出づるくさはひとなり、我罪をせむる種となるやうにて、内も外も悲しくあれはてたる中に、小さき菊ぞ只一輪庭の片隅に今迄も咲殘れる。母が培ひし其世の名殘にや、打見るに心もすこし慰められて、なつかしくやさしき思は胸に充ち來るに、昔の放蕩兒はやをら其花を摘みとりて、翁が文に包み入れ

ぬ。

墓地は小高き岡の上にあり。うしろに森を負ひ、南、野に向へり。目に近き里のけしき遠き山々、すべて殘なく見渡さる。前には廣き牧場を隔てゝ一筋の流あり。日によりては水の音も遠く聞えつべし。都の御寺の庭などのやうに、いかめしき石段を昇りてゆくにもあらず、只村人がおのづからにふみならしたる小道ぞ一筋見えたる。上りはつれば墓のあたり花や樒の手向のあともなく、いみじく事そぎてさびしげなり。只三つ四つ五つ神さびたる大木あり。代々を經ていやしげりゆく梢のかげに、村人が千代の眠り所を覆ひてぞ立てる。詣づる人の絶えたるにもあらねど、猶家の内なる一夜のねぶりとはかはれゝば、そゝるしの石は、つめたき雨にもぬれ寒き風にもふかれつゝ月日經るまゝに、見るかげもなくなりはてゝ、苔生ひたるぞ多

き。わすれ草にしもあらず、只年月つめるさるしとは思へども、猶あはれなるは、かゝる所のさまなりけり。中にやゝ目立ちて見ゆる一つは大學をいづるやがて死ににとて歸り來し若き學士の墓、また一つはながき一生を此村人の爲に捧げし醫師の君のなり。村人があれぬ心のあともまづ見えたる。やゝはなれたる木蔭に、あはれなる卒塔婆たてり。打見るよりまづ悲しきことつきせず。母や妹やこゝに眠りてよりすでに十餘年。つめたき床の上に、草はもえ草はかれ、月日へて猶かへらぬ我をいかにおそしと待たれけむ。待たれし我は今歸りきぬ。我が足音は土の下に響くやいかに。やつれし我影は草葉のかげにもうつるやいかに。旅人は帽を取りて石の前にひざまづきつ。いかで我罪のゆるされて、まつらん人のたましひに二たびあふ日あらせ給へと神に祈りぬ。祈り終りて立上がれど、かきくらす

心のうちは更に思ひのぞめん方もなくて、老木の木蔭にたゞずむに、其かみかの翁に我罪をせめられしも亦此木のかげにてそありけれ。遠く見おろすに、畑は殘なく苅り去られて、ひろ〳〵と心地よげなるに、物悲しげなる水の音遠く聞えて、人生のはかなきを笑ふが如し。とばかり立てるに夕風そゞろ寒く吹いで木の葉力なくちりみだれ、日もやう〳〵くれてゆく。心も暗うなるやうにて、廣き世に誰一人、誰一人、わが悔悟の情をあはれとうけ入れん人もなきか。誰一人たのもしき手をさしのべて、君が罪はゆるされたり、心を安んじて立去り給へと我を慰めん人もなきかと思ふに、いひしらず悲しくいひしらずさびしき心地す。一度こゝを去らば又いつかは立ち歸り見ん。さは我は今とてしなへに此地を辭すべきにてそあれと、とりかへされぬ身の昔をかつ悔いかつ悲しみつゝ、靜に歩み去らんと

するに、あなたの墓石のかげに、誰やらん人のゐるけはひす。思はず立ちとまるに、老人のゑはぶく聲きこゆ。誰にかあらんと。

第一竹柏會の記

同じ梛の木蔭にたちて、同じ詞の泉をのみ、同じ歌の流に棹さすゆかりはありながら、かたみに知らで過ぎなんはあまりにあやなきわざなりと、人々相はかりて、竹柏會といふを起し、年に一度相あつまりて、かたみに相しり相むつばんと思ひたちつ。今年柳樓の春の眞盛卯月の六日といふに、日本橋倶樂部に其始めての會を開きぬ。かねてより人々天文を見るやうに、空をのみ打詠めつゝ祈りし甲斐もなう、朝のほどより雲あつく閉ぢて今か降り出でんのけしきなり。昨日一昨日にてもまだやはたらぬ、さは明日よりの十日二十日

はいかにもあれ、今日のみは降らであらなんと誰も〳〵思ふに、人の思ひは天にも勝つものにや、雨は折々雲をもりて、こぼれんとしてはとまり、落ちんとしてはやむも、中々にをかしき空あひなり。人々晝すぐる頃より打つどひ來ぬ。竹柏園のあるじの君には、胸にリボン結ひつけたる若き人々數多と、玄關に立ちて出迎へ給ふ。石樽ぬし井原ぬしは左に、西刀自竹屋ぬしは右りに立ちて、いざ此方へこなたへとすゝめ給ふ聲いとにぎはゝしく、奥村ぬしは殊に此方かなたに立はたらき給へり。廣間の正面には、故翁の御すがた、刀自の君のと並びてかゝけられ、右手の床には、常盤木の緑ゆかしきを瓶にさしたり。東久世伯、萬里小路伯を始めて、人々此間に餘る迄つどひぬ。しとねや足らずなりなんなど、やくなき物思ひする人もありき。宜しき程になりて主人の君の御挨拶あり。やがて皆いざな

はれて庭に出づ。出づれば大橋ぬし芝の上に寫眞器械たてゝ待ち給へり。折から空も少し晴れたり。虹の浮橋めきて空に高く國々の旗をかけ連ねたる、春風に吹亂れたるも、花とはさま殊にめでたき見ものなり。池をめぐりてあなたの築山に人々つどふ。水際にそひて腰をかくるもあり。松の木蔭にたつもあり。うしろの方にたちて見おろせば、さまぐにめでたき色あひの衣、唯肩のあたりより帶際まで見え渡れる、今やうのきぬの見本地一つに取あつめたらん心地す。女は能なきものなり、女の身は唯うるはしき衣つけん爲の臺なりなど男は云ふめれど、臺なりともかくうるはしきものおかん爲の臺ならば嬉しき事なりなど、さゝやく人あり。男は皆左の方に一つになりて立てり。はやりに短く苅りたるかしらどもの見おろされたる、うしろ手は皆同じやうなり。移り變り早き世にしあれば、かく

寫し給はん人々の姿有樣、年々にいかに變りゆくべきにかとおぼゆ。今より寫しいでゝと、池のあなたより聲をかけられて、若き人々は急ぎ笑をのみこみ、そなたを見つめたるもをかし。いかさまにか寫らん、唯手のあがるばかりさがるばかりにて、事は忽にはてぬ。手を携へて皆歸りゆく程、まらうどざねの君たち居殘りて、今一ひらを寫しつ。やがて席定まりて東久世伯開會の辭を述べ給ふ。ついで巖谷ぬし、兼題にちなみて春風の物語し給ふ。風といふ風はあまたありとて、谷川の氷とけて漣笑ふらん春の初風、少女の姿とゞめけん天つかぜ、筑紫の海の神風、人の厭ふらんはやり風などあげ給ふにも、柳のあひだを通りて吹き出づる歌の林の春風を、誰も〳〵殊にめでたしとき丶ぬ。次に昌綱ぬし兼題の披講し給ふ。時短かければとていさ丶かよみあげられしをはりに、師の君のを、

願はくはわれ春風に身をなして
うれひある人の門をとはゞや

と、よみ給ふに至りて、皆人ひとしく禮するに、共に禮をしつゝも、かく梛の園生に枝を連ぬる身は、何ともいひしらず嬉しき心地す。手品は誠に陽氣なり。すみの屏風の陰には、大鼓さみの音にぎはしくはやしたてゝ、人の心を引きゐたり。德富の君の演說の時には、いみじく靜になりしが、時鳥の御馳走などいふあたりになりては、さすがに皆笑ひぬ。惜しと思ふ程に切り上げ給へり。三曲はじまる頃より人々そゝに出たるも多し。物の音のやさしくなつかしきを聞きつゝなれば、心はしらず〳〵和らぎて、知らぬ人にも近くなりぬる心地す。あやしき力もある物にこそ。やがて皆庭に出て遊ぶ。縣居翁の歌かきたる櫻の花かんざしを、椽のほとりにたちて人々に分ちを

らるゝは、洋琴にすぐれたる君にやありけん。男は帽にさし胸にさし、女は髮にさす。切さげの君たちも程よくさしはさみたり。庭の面は此頃の雨に、松の綠芝の綠、綠つやゝかに見え渡りて、池の水際に若き楓のうす赤き梢を寫したる外には、異なる色も見えず。只此かざしの櫻ひとり春をしめ顏なり。人工も自然に劣らぬ折はあるものなりけり。木間をぬうて花やかなる衣の見え隱れする、又何にかはたとへん。此軒下に酒店の設あり。いづれかの學校の制服つけたる人々も多く立まよふに、小花氏こゝのあるじ顏して、ビールあわだてる器をさげて客をさそふ。獨逸あたりのビール店の樣も思ひやられて、人々の呑みほす樣、いさましく心地よげなり。庭の左手の方に、小さき家あり。よしめきたる作りざまなるに、人々は只あがりにあがる。こゝには必ず立ちよらせ給へ、但し一度限りなどい

ふ札のさがれる爲にもよるべけれど、見るめはた賑はしくて人の心をひきたり。小幡ぬしもはらこゝの事とりて、よく人をもてなしたり。こゝに紫紺に花形の花やぎし衣をつけたる島田の君と、淺黄の矢筈の袖長きを着たる束髪の君と二人して、間なく隙なく櫻餅を運びいでたる、葉の匂はあたりになつかしくかをりみちたり。ビール店の長氏川田氏、古風の器に日本酒入れたるをもてきて、上手に强ふる樣、老人たちのいなぶさまも面白きに、をさなき人たちは櫻餅もたる手をとゞめて詠め入りぬ。猶あとより〳〵とのぼり來れば、よき程に皆たちいづ。柳枝子ぬし、同じ程の人々と花をうりあるく。さも男らしき紳士が、黑羅紗の肩に櫻さしかざしたるは、昔の大宮人とは樣ことにめでたく、白襟の淑女が菜の花を携へつゝ椽に腰かけたるは、此日なしの色にいかなる同情をか添へ給ふとゆかしき心

地す。遊び半ばと見えける頃、坂井氏庭のたゞ中に椅子を立てゝ、其上に立上がり、石樽氏と二人杯をあげて、竹柏會の萬歳を三呼す。內外の人々ひとしくそなたを打詠めて、心の聲をあはするに、空にひらめく旗の影も、折から嬉しさを包みかねて、舞ひ返す袖と見えたり。一本松の木蔭にしんこ細工の店あり。男二人一つ机に向ひたるが、只指先きの少し動くばかりにて、またゝくまに種々の物をひねりいだす。猫や小犬や桃や何やと、幼き人々は只寶ものゝやうにめでたがる。まことの花の枝に鶯をとまらせたるうるはしさ、ありふれたる歌よみがありふれたる詞に、梅と鶯と組み合せたらん色も匂もなき歌よりは、中々に人の心を喜ばせたり。いみじき繁昌なりな、と何心もなくさしのぞき給へる師の御顏を見るにも、先づこの細工物と我らの詠草と、いづれか御心に入ると承はらんにはと、おもても

赤らむやうなり。間もなく立去り給ひぬ。リボンの君たちは、それ〴〵に手をわけて力を盡したるに、師の君のみはいづこにも〳〵立ちまはり給はではならず。いかでしばしだに休ませ給はなんと心ばかりは思ふ。幼き君は何心もなく乳母に抱かれおはす。赤き提燈を見せまゐらすれば、目を大きくし給ふ。暫しかし給へとて抱きまゐらするに、ほゝゑみ給へり。何事かしかたえず嬉しくおはする、ミューズが君をらうたがりて、常に何とかさゝやき給ふ、語り給へ、ひそかに語り給へと打ゆすぶるに、いとよう笑かたまけて、何か物語し給ふ。人々とう見つけて、實にてももらふやうに我に〳〵と手を出すもをかし。いづれへか行かせ給はんと云へば、いづれにも同じやうに笑ひておはす。今より三十回めの竹柏會の時には、君はいかにならせ給はん。金ぶちの眼鏡をかけて、鬚めでたくはやし給ひて、

兄君と二人いとよくはたらき給ふべきなりな。御父君其日には、いかに御心のどかに酒くみ給はんといへば、我等も其日は眼鏡をかけてや來べきと、鬼も笑ふらんやうなることをいひて皆笑へり。心の内にぞ、第三十回の竹柏會の日は、我等が人生の喜びも悲しびも大方知りつくし味はひつくしたらん頃にこそはと、行末遠くゆかしくもあはれにも思ふ。はや入らせ給へ〳〵と呼ばれてみな急ぎ歸りくれば、狂言ぞはじまりたる。若き人々は中にも入らで見る。太郎冠者が腰に狸を下げて舞ふさまのをかしきに、皆しにかへり笑ふ。三曲や手品や謠や何やと、面白き事のみつゞく。終に又成上り物の狂言あり。人々とめどなく笑ふ。まじめなる男のたへずして笑ふ笑ひ聲は、打きく人の心も開くやうにて、いひしらず心地よし。鶯の初音にたとへけん女の聲、松風天つ風にたとへけん物の音よりも猶ま

さりて、めでたく響く心地す。此狂言よ、小説も芝居もかくまでに人を笑はする力はよもあらじと見ゆ。しか人を笑はせながら、自らはまじめなる顔したらんよ。馴れても猶いかに苦しからん。此人々がかく笑をしのぶやうに、怒をしのび情をおさふる力、人にあらばめでたからんと思ふ。餘興ははてたれど人々の興はつきず。猶庭にいでて遊ぶ。二階を見給へと云ふ人あるに、見れば楠緒子の君窓より半身を出して遠き所を眺め居給へり。黒き羽織の袖の風にひるがへりたる、畫のやうなりと云へば、否小説のやうなりといふ人もあり。新體詩にても考へゐ給ふにやと云ふは、例の口とき君なり。やめ給へ〳〵、若き人々が口もふさがで上を見あげたるは、をかしきものなりといふ人あるに、皆あわてゝうつむきつゝ笑ひ出しぬ。築山の木蔭につどへる一群の衣の色はいみじき哉。藤色二人、鼠色一

人、黒一人、淺黄一人、君もはでなる衣き給へり、早かしこに行きて、畫中の人と爲り給へと若き人をそゝのかせど、うしろよりありきつきを見られんとて動かず。猶松の蔭に立ちて人々語りあふ。春の御前の春の遊びは、御講義にて承りき。今日の遊びといかにくらべ給ふと云へば、春の御前の庭のけしきは、いかにも〳〵めでたかりけん。されどまづ人の上をおぼせ。あるはひなの樣なる、あるはそらだきの香に心をあくがらす人のみなりけん。さる人たちの遊びは、いづこにか生氣のあらん。只畫のやうにぞありけんかし。今日の此人々はさにあらず。命あり望あるまことの男まことの女が、おのも〳〵身におふ重きつとめをしばしとり放ちて、世の外なる園の中に遊ぶまことの遊びまことの休息なるをなど、はかなきことをいひつゝ、男は男、女は女にて物語つきず。雨は今迄も降らねど空暗

うなりゆくは、日のまことに暮れゆくなりけり。人々あかなくに別れ歸る。あるじの君雪子の君、玄關にたちておくり給ふ。一人〳〵に竹柏園社友の名簿を與へ給ふ。まだ知らぬ友はらからの名を知るべきならんと、皆喜びてもち歸る。歸さの道は風中々に寒けれども、春風に身をなしてといふ御歌を思ひつゝ行けば、心のうちいひしらずあたゝかなり。燈火のつく頃家に歸れば、雨は今ぞさはる物なくふり出でたる。いざいかばかりなりとも降れよと思ふ。晝の程家を出でしより僅の間に、多くの珍しき人々と交はり、多くの新らしき事を見もしきゝもし覺えもして、今かはれる人となりても歸り來りし哉。誰も皆かくこそはあらめ。心の少し廣くあたゝかになりし心地するは、目に見えぬ春風のまことに吹き通ひけるにか。思へば樂しかりし一日にこそはと、ゑめやかにふけゆく宵の窓のもとに、つく

〳〵と思ひかへして、又來ん年の竹柏會の折のくらべ草にもと、會員の一人なる廣子しるす。（明治三十二年四月六日）

研究會

客人のおはしたりとて、師の君下りゆかせ給ひし後は、しばしの程こそ書の上をも見つめたれ、やう〳〵あらぬ方にのみ目をはしらする人多くなりぬ。いみじう靜まりてもおはしますかな。同じくは此時を樂しう過し侍らばやといひ出でたるは、多くの若き人々の中にても、もともよく笑ひ給ふ人なり。隣なるは、人よりも少し多くの春秋を見給ひしかば、おのづから書をも世をも知り給ふこと多くて、物いふことも上手におはします。これは學問の時に侍れば、さるかたの樂しみこそふさはしう侍るべけれ。かれこれと申さんより

おの〳〵が御膝の上の源氏物語を題として、さま〴〵覺す所をいひいで給はんはいかにといへば、いとよき事、しかのたまふ君よりまづ始めさせ給へといふ。あなわろき事をも申しゝかなと打わびながら、さらば年がひに許させ給はなん、藤氏にあらざれば人にして人としも思はれざりし其代の樣を御講義にて承るに、平民は皆賤といふ名の下に心なく情なきものゝやうにおとしめられ、みづからもおとしめて、もろ〳〵の樂しみや望の外に生きながらへ、幸ありて光る源氏の御姿を一度にてもをがまんを、一生の光とも思ひでともなしけんを思へば、いかにはかなくあぢきなき一生なりけん。物しらぬは華族の姫君のやうなりとおとしめて、ひくき所の人々も才を競ひ智を磨く今の世に立ちて思へば、よくも其世のいはゆる賤の女には生れざりけるよと、宿世の程も嬉しうなんといへば、げにもと打

うなづきて、おのがじし思ふ所をいひいでたる、師の御机の外に聞く人なきぞ嬉しかりける。いでやおのれは此御方々の御ぐしこそ羨しう侍れといふ人あるに、さは師の御許へ通ひ給はんにも、丈より長く引き來給はんやといへば、それもげに不便なること、さもわらば几帳といふ物ついたてゝ、常によりふしてのみ侍らばやといふ。怪しの御好みや、いかで君が如き本性の人、さるうつとうしき物蔭に埋もれ居給ふべき。おのれは此物語よむ毎に心にかゝることなん二つ侍る。其一つは此御几帳といふ物になん。其代の女たち、賤の女といふきはゝ知らず、少し人めかしき限は、此几帳の蔭に生れて几帳のかげに生ふし立てられ、清らかなる外面の空氣にもふれず、うらゝかなる日に照らさるゝ事もなく、庭の小草の露をだにふむ事叶はずして、終に几帳のかげに身を終ふる、いと餘りにも所せかり

し一生や。うつとうしさに氣も結ぼれ心も亂れて、狂人となる人なかりしはあやしうも侍りしこと哉。まだいはけなくて隱れ遊といふ事し侍りし時、あまりよき所に隱れゐて久しく見出されぬ時は、嬉しき物から猶あへなく心細うなりて、はや人も來よかしと覺ゆること侍りき。まして一生隱れゐたらんよ。あないみじ。いかに覺えけんといとほしうも侍るや。猶一つあやしう心にとまるは、涙に侍り。凡そ世に生れて涙なきものや侍る。なしなどいひて泣かぬ人も、あまりいみじう笑ふ時は、ほろ〳〵とこぼるゝを見ても、誠はあるものになん。されどこれは人の心と同じく、かるゞ〳〵しく外に出すべきものにも侍らねば、おのが如く常に〳〵笑ひて世をふる人の、人しれず落す一雫こそは神の御前には眞珠よりもめづらかに尊く侍るべけれ。さるを此代の人々よ。物もいはず物もくはで、只やくと涙

をのみこぼし居たりけんは、いと餘りにも侍りし哉。それも女の泣きてのみ居たりけんは、今の女のさへづるよりは女らしくめでたき事も侍りけん。男さへ其流行病にかゝりて、ゑひては泣きさめては泣き、泣きに泣きて世を經しは、女を眞似るにか。限ある人の命にて、涙は限なくかれぬものにや。あやしき事になん。さは思さずやと笑ひ給ふに、君もまた泣き給ふ事ありやと、人々をかしがる。隅の君、などかうつゝしみてのみおはします。師のおはさぬひまに、御心もはやのたまひいでよと皆そのゝかすに、いとあやしき事なれば、人々笑はせ給はんといふ。なにか、これは皆淑女にあなればと、いとよう靜まりたり。さは必ず笑はせ給ふな。おのれはかくさぶらひて御講義承る毎に、其世にはよくもかう美しき人のみつどひけるよと、せまき心一つに驚くこと多くて、また家に歸りてかへすゞ〳〵

讀みもてゆけば、其多くのうるはしき中に、殊にすぐれたるしも、大方病の爲に世を早うし給へる、いとあかず口惜しき事になん。まづ物のはじめに桐壺の更衣、盛の年にしてはかなくなりし、あはれとは覺さずや。かはりにとて參り給ひし藤壺はた、三十ぢあまりにして世を去り給へり。御姪なる紫の上は、春の花を好ませ給ふ御心より推して思へば、さることあらんとも覺えぬに、母君祖母君の悲しきためしにはもれで、終に肺の病にてうせ給へる、あはれなりしこと。宇治の大姫君のはかなくならせ給へるも、亦さる方にてや侍りけん。明石の上は若き時より物思ひたえでありしかど、身のいみじうすこやかなりしは、かの空氣よき明石の浦にて人となりしけにや。彼所は病人多くつどふ今だにいとよき所と醫師は申すを、まして蜑の住家より外にはなかりけん其世には、塵をだにすゑぬ神の御園の

やうにや侍りけん。よしとばり帳の隔はありとも、汐風は絶えず深き窓の内にも通ひ侍りけん。まして此人、年に二度住吉に詣でけるとあり。さる保養のしるしありて、入道を始め母も子も身すこやかに老を重ね、御娘明石の中宮は、さる御位の君には珍らかなるほど、御子多くもち給ひて、長く榮え給ひしもことわりになん。内のおほいどのゝ御やからには、弱き人もおはしまさず。葵の上柏木の君はあれど、一方は御産の御なやみ、又一人は戀の歎にみづから求めし病なめり。さらでも何所にか死のなき所はべるべき。望月のみちたらひたる藤原の家も、かゝる悲しびにはもれぬにこそ侍りけめ。此外六條の御息所夕顔の上などは、女によくあなる神經の病とも覺え侍れど、たゞ怪しきは末摘花の御鼻になん。始めて讀みし時は、寒き思ひしたまひしけにやと思ひ侍りしかど、其後の卷に、御兄の禪師の君

も御鼻赤うおはすとあるを見れば、これは常陸の宮の御ぞうにつきたるものにや侍りけん。いと怪しき病こそありけれ。今もさる人やあると道に逢ふ人にも目をとめ侍れど、絶えてこそ見當り侍らぬ。父を見んとて來るドクトルの君にとひて見んかとも思ひ侍りしかど、いと若うて物をかしがる人なれば、いかに笑ふらんとわびしくて打いで侍らず。もしこゝに知らせ給ふ人もやどいへば、得たへやらで淑女の君たちしにかへり笑ふ。あないみじ、何事の勉強にやと騒ぎにまぎれて師の君入りおはしたり。源氏物がたり研究會を催し侍りてと、まめやかに申すものから。

つゆくさ

去年の暮より病めりときゝし人の

この頃あつしくなりぬときゝて其心のうちを思ひやりて

まくらべの小瓶の梅ぞかをるなる
　あの世もかゝる花やさくらむ

いかにせん夫（つま）が羽織のほころびの
　めには入れどもぬふ由のなき

折にふれて
知らずしてすぎこし方も今みれば
　神いまもりはある世なりけり

すもゝさく垣の内外にかたらひし
　その夜おぼゆる春の夜のつき

もとめこし鉢のつゝじを見てぞ思ふ

花おほかりしふるさとのには
人の手にとらんとすれば消にけり

神のめでますつゆのしらたま
大海のはてなきなみもてらすらん

庭の小ぐさの露のうへのつき
落葉はく翁のみこそながめけれ

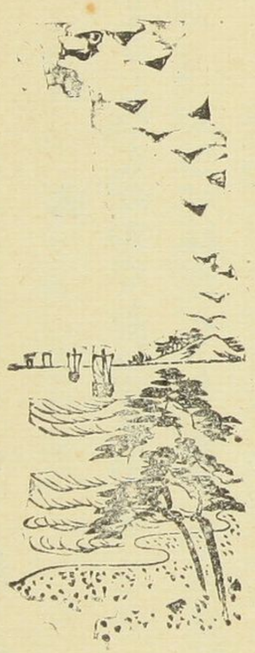
みてらの庭のしらぎくのはな
うぶすなの森の木かげにおく霜

とはくとつがん君がかどでを
おさへてもそゞろにうごく心かな

岩にもあらず木にもあらぬ身は
おなじくは耳なき人に告げんより

石をあつめてわれかたらばや
風あらく星の光すごしかゝる夜に

いかなるつみをたれ犯すらむ



行餘集

三浦守治

偶成

青雲をさしつらぬきてましろなる
　ふじがねたてりきさらぎの空に
おはきなる望いだきしますらをの
　われいたづらに老にけるかな
うたひつゝいざや歸らん月夜よし
　ビールのゑひの醉心地よし
醜草のはびこる中にまじりても
　すみれはおのが色にさきけり

しばしまて昨日巣だちし雛づるよ
　くもゐの空はあやふかるべし
すてがたくおもひのこし〻故郷の
　かきねの梅はいまさくらんか
やぶれたる疊の上にひとりゐて
　たばこくゆらし花をみるかな
世の事を知らず顔にて駒込の
　竹のはやしにすむ博士あり
朝ぎよめはらひきよめし庭の面に
　たけの枯葉のはら〳〵とちる
そよ〳〵と梢をわたるあさかぜに
　蝶もまじりてちるさくらかな

朝かぜのさそふにつれて夢ながら
　飛ぶとはなしに飛ぶ蝴蝶哉

花さけばしづこゝろなし來ん春は
　花なきさとにすまんとぞ思ふ

賤が屋の南の軒の竹ざをに
　ならべほしたり小さなる衣

われ死なば梅ゆたかなる此宿を
　かのうぐひすにゆづり與へん

ひと村は若葉の中にうづもれて
　をり〳〵もるゝ庭とりのこゑ

人はみな田植にいでし賤が屋の
　うまやのかげの栗のはなちる

關が原ゆきゝの人のあとたえて
　十里の尾花たゞあきのかぜ

うき草のよる岸をなみ水のおもに
　たゞよひながら花さきにけり

希望

ねがはくは百歳いきて亞細亞州の
　うつりかはりを見まほしき哉

ながらへてやむ人々をすくはゞや
　身は數ならぬくすしなれども

ねがはくはひろき學びの道のべに
　小さなるあと一つのこさばや

沖縄紀行の中に石垣島にて

よもすがら薯をたうべて珍らしき
はなしの中に夜はあけにけり

北海道紀行の中に

くすしわれやむ人々をすくふべく
北見の國に今日つきにけり

石狩のあら野よこぎりて飛ぶ鳥の
ゆくてに見ゆる雪のとほやま

太沽砲臺占領

突貫のこゑやみたりとおもふまに
朝日のみはた城のうへにたてり

豐公

中村のさとにかへりてほゝゑみし
ゑがほぞ君のさかりなりける

歸鄕

友もおいぬ我も老にけり友も我も
むかしながらの笑ぐゑにして

獄

いかめしきひとやの門を夜もすがら
いかなる夢かゆきかよふらん

かたみ

かたみ皆うづみはてつと思ひしを
とりのこしたり小さなるくつ

鳥

かへりこしつばめはもとの燕にて

いへのあるじぞあだし人なる

重症患者

いひのこすことやあるらん病人の

口を動かせど聲は出なくに

机

をさな子のかたみとなりし文机に

香華たむけてなきたまを祭る

春郊

蒼空に高く雲雀のこゑすなり

見わたすかぎり菜の花にして

秋曉

あさ風もいまだわたらぬ白はぎの

つゆにならびて蝶ひとつ眠る

霧

きりの中にいなゝく駒の聲すなり

われに先だつつはものやたれ

華嚴の瀧

鬼のごと怒りそばだつ岩まより

三千丈の瀧とゞろきくだる

畫師

石樽千亦

都に一峰といへる畫師ありけり。妻はとく身まかりけれど、そが忘れ形見にて、今年十五歳なる秀子といふを、他人の手にかくるがいとほしとて、只獨にて暮したりき。

若き折某の筆の跡をまねび、あらゆる流派に入りたゝずといふ事なく、歴史の畫をかきても、風景のにても、をさ〳〵人の下にたゝず。春秋の展覽會には、いつもめでのゑるしを得ずといふ事なかりき。されど今の世には、すぐれたる目もたる人少なければとて、つゆ喜ばしき色も見えず。又惡しざまに評する人ありても、腹だつさまもわらざりき。

一峰ある時、われは日本の畫師なり。いかで外國人にも見せぬべき日本の畫といふ畫かきて、後の世にも殘さばやと思ひ起しぬ。さるにても何にかすべき。如何なるものをか書かんと、幾度幾そたび思ひ煩ひてありしが、まづすぐれたる物より數ふれば、萬世一系の大御門、全國の風土山水、されど何れも皆筆の力の及ばざるもの、さはいへ此二つをおきては又何をか撰ばん。さては山水の一つを畫くべきか。奇しきまでに珍らしきは松島天橋立嚴島、古より三景とたゝへつる程ありて、さすがに捨つべからず。敷島の大和心をよそへてめでられたる櫻花をもて名ある嵐山吉野山、これはたはてるべき所なり。されど世界は廣し。猶此上に出づるものなしといふべからず。あはれ〳〵かきて世界の人々に示すべく、又新聞雜誌の挿畫に我事畢れりと思へるえせ畫師の膽ひしぎつべきすぐれたる畫題遂

になきか。あらでやは、あらでやは。さてもありけり、我國の姿をあらはせるもの、支那四百餘州を見てこし人にも、歐米の山水をめぐり遊ひし人にも、いまだ似たりとだに聞きし事なき唯一の富士の嶺、げにこれをおきては我日本にゑがくべきものありとも覺えずと獨ごちぬ。

いゆき憚るといひけん雲の棚引ける、霞の間より匂ひこぼれたる、空には塵ばかりの雲もなく朝日夕日の華やかにさしたる、殊に雨の晴れたるあとはいつもあはれなり。殘る隈なく雪のふりつもれるも、半なるも、只嶺にのみ殘れるも、いついづれ時所をわかず景色のすぐれたるはいふも更なり、東西南北前後左右同じさまに、四方八方いづこをわかず、表なければ裏のあるべきやうなし。げにも國の鎮、仰げば心おのづから高く大きく、向へば身もおのづからすが

〳〵しく尊くさへぞおぼゆる。かばかりの山他にあるべくもあらず。まことと世にたえて無き所、こを人にうつさば直に正しくさかも動かず傾かぬ大丈夫美婦人、こを器物にすれば完全無缺、こを國にすれば萬世一系の帝統上にいまし神代ながらの臣民下にたてる我日本國、この心をさながら畫きいづべきは我日本畫師の本領にして、しかも此上なき好材料。

時は久し、人はた少なからず。此比なき山は古今幾多の人の筆にのぼりぬ。されど是只の山、いかで世界に二つとなきくしびの山に比ぶべき。神とまさずみ山は、爲に悲しびために泣きてぞあるべき。畫にやまと風漢風洋風さま〴〵あり。やまと畫又幾種あり。漢のも洋のも風により派により其品幾百種と云ふ事を知らず。されど只纔に形姿を寫せるもの、中には見る人の心によりて强ひてそれと定むるもの

のみ。其心をうつし出でて、あはれといはしむるもの一つだにある事なし。或る歌人は一首だに此山をばうたひ出でざりきとか。蓋し劣らん事を思ひてならん。いでや我はこの難しと世に捨られたる、さらぬもとても及ぶ事を得ざる畫題をとりてゑがき出でん。さるにても此山にのぼりもしめぐりもして、事と筆そめつる畫師もありきとか。されど聞えたる畫なきを思へば、我はた同じ樣に世の謗をやうけん。さはれなみ〳〵の流に沈みはてんはわが心にあらずと、ふるひ勇みて筆とりそむるに至りき。

かくて後は、人よりいかに乞はるゝも悉くいなみて顧みず。家の事さへ忘れはてたるが如く、あるは雲霞のたなびけるさまを物し、あるは晴れ渡りたるさまをものし、すべて雪のかゝれるさま、鹿の子まだらなるさまをうつし、書きては破りやぶりては書き、かき終へ

ざるに早くひきさく聲きこえ、さらぬも半日一日をとゞめず。同じやうなる事のみして、遂には月日のすぎゆくをもはたと打忘れ、少女がすゝむるに、あゝ又してもと歎きつゝせん方なげに膳に向ふ。

少女はかひ〳〵しく家の事とりまかなひて、何くれと思ひ煩へり。ふさ〳〵と黑かりし髮、まばゆかりし姿やいづら。鬚髮は蓬生の如くおどろ〳〵しう亂れ、衣に染みし垢は漆の如くひかり、面やせたるに眼のみきらめきたる、いづこいかなる鬼の島よりさすらひきにけんと疑はる。少女はやさしげに、衣めしかへ給へ、髮をさめたまへとすゝむれど、うるさしと叱られ、さる料あらば絹地かひて得させよといふ。さても今はこの少女なかりせば、此家片時だにたつべくもあらず。志を半途に空しくせさせじと思へば、ちひさき心に一きはつとめいそしみ、更に世のあだなる姿を顧みんともせざりき。

父は父なり、子を思ふ道には誰も迷ふといふを、えかもかなしき妻が忘れ形見の一人子、いかで其心根を知らざらむ。同じ女子に生れながら、花の盛をも徒らに過さするいとほしさ。殊に幼き折より男手一つに養はれ、世の少女子は母の膝によりかゝりて、あれよこれよと物好みする年頃より、世わたりの風雨にあはせ、婢一人だにえつかはずなりし身の、水仕わざに手足もあれ、見るもあはれなる姿となりぬるをば、いかにかこちてあるならん。人なみの世なりせば、さるべき聟をえらび、子の幾人もあるべき身を、あたらむなしく過さする苦しさ、こは皆わが好奇心より起りしこと、幸なき身とあきらめてよ、ふがひなき親とゆるしてよと、心の中には手を合する折もありしが、さりとては心よわし、我目的にはかへられず、さもあらばあれ、かなしき我子を犧牲にしてなりともと思ひかへしつゝ、

又畫絹に向ふ。くさ〴〵の繪の具は、其熱き泪にとかれたりしなるべし。

いつしか鬚髪に白き筋をまじへ、こゝにいくらの春秋を過しけん。一個の老翁は、丹青の配合濃淡のとりわはせ、風をも起し雲をも起すべきさまに、まこと神のいますが如くなりあがりたる富士の畫を、あるはおきあるはかけ、右にゐ左に立ちて瞳をこらして見てありしが、今始めて心にゆるしゝ畫はなりぬ、秀子よ〳〵と手を打ちて喜びしまゝ仆れふしぬ。莞爾やかなる笑靨はわづかに此世の名殘をとゞめて、又いふこともなし。

其秋美術展覽會は櫻が岡に開かれぬ。幾千枚の繪畫、すべて見るに足らず。さるを日々に集ふ人山の如きは、中にすぐれて秀でし富士の畫あるによりてぞかし。そも此畫や形のみの富士にあらず、見る

人の心より強ひて思ひ定むる富士にもあらず、打見るまゝの風景をうつしたるのみの富士にもあらで、心の美をうつしいで、日本の國の鎮となれる富士、げに古今獨歩、末の世かけて又いでくまじき筆、これぞ誠に、日本畫師の開山よとめでたゝふる聲、天下にひゞき渡りぬ。さても今は地下なる一峰の心に叶へりやあらずや。觀れば一峰の一女秀子出品とありて、畫面の名と同じ水莖のあとにて、ひら〳〵と風に流れたる傍の松には、筆太くあざやかに書ける四文字、曰く不要審査。

筆

筆よ、われ汝の族に親しむ事こゝに二十年。思へば始めて汝を見たるは、わが漸く這ひ得る頃なりしが、其折は未だ其名をだに知らざ

りき。まして汝が斯く晝夜わが傍を離れざる忠臣ならんとは思はざりき。其後二年ばかりを過ぎて、汝が名を知ると共に、汝を用ふる事を知りしかど、未だ親しき中らひならざりき。さるをわれ七歳の折學校に入りしに、我が母は汝をして我に從はしめき。されど其折はわが幼きをや蔑しけん。はた我が至り深からぬにてやありけん。思ふ如く從はねば、吾は腹だたしさに深く汝を硯の海に沈め、又齒刑に行ひ墨壓の罪に處しなどして、或時は汝の首を失ひて歸る折もありしかば、汝の爲に父母にいましめられつる事もありき。後漸く我になつき、吾も亦一日汝が我傍を去る事を好まざりき。斯くなりては深く汝の祖を虐待せしを悔いたることもありつれど、せんすべもなかりければ、其悔ゆる心はせめて報は汝にと、ひたすら汝を愛したりき。其心をや悟りけん、物こそいはねゝ、汝も我思ふまゝに從

ひき。たま〳〵我病みふして傍なる汝を用ふる事もえせざりし折は、汝は我弟妹の手につかはれて口をしとも思はず、我思ふ事をなし卒へたりき。後吾は父母の國を去りて遠く遊ぶ折、こひ慕へる弟をも妹をも見すてつれど、汝のみは伴ひたりき。吾旅にありて窮したる折は、汝は殊に我爲に力を盡し、其身の碎くるをも惜まで吾に職を與へき。吾或時汝の頭のいたく傷はれ汝の身のいたく煤けたるを見、涙をのみて汝を愍み、若干の金を得るに當り、やがて汝を退隱せしめ、汝の子を新らしく取りたてたりき。此間に汝は我意をうけて、三百里外の彼方なる父母故舊の許に使し、はた遠き外國まで往かしむるをも、つゆ恨めしとは見えざりき。されど汝の爲に父に師に叱責を受けたる事もありき。されど我に代りてこをいひとき、師父に佗び師父をなだめしも又汝なりき。又事あるに當りては、汝は吾に

從ひてつゆ身を惜まず、一日の間に汝が族、あるは傷つけられあるは斃るゝこと幾許といふ數を知らざれど、なほ吾に從ひてつゆおくれをとらず。主なる我いこふ時にあらざれば汝も休ふ事なし。はた今日のみは心安しと思ひて臥したるに、霜さゆる眞夜中ともいはず、我眼さめたる時にはいたはりもなく汝をも起したりき。吾深く其勞を喜ぶ。この喜ぶ詞もなほ汝の力によらざるを得ず。げにいみじきは汝の力なる哉。昔唐土の某、汝の族を封じて管城子となしき。吾未だ幸なくして汝に其勞を報ゆる事を得ず。まして世はいよゝなほ事繁くなりて、なほ汝を安らかにおく事を得ず。汝それこを恕して、今日までの如く猶我世と共に常にわが忠臣たれ。われは唯汝の族を賴みて世に立たんのみ。

浪

波は、氷りゐし志賀の辛崎うちとけてよすらんさゝ波、あら波、つなみ、高師の濱のあだ波、たてばたちゐればゝ又ゐるふく風の友なる波、久方の雲井にまがふ沖つ白波、背の君がこゆらん夜半にたつ田の山の白波は、なみ〳〵ならぬ節操の聲今もひゞきあるが如し。池の藤波も風のまに〳〵立ちさわぐよ。白菊を花かあらぬか波のよするかと云ひけんは、猶秋風の吹上にたてればなるべし。袖の波は心の海に風やたつらんと哀なり。冬も氷らぬはあつき心の雫なればなるべし。天の川淺瀨白波たぞらん心やいかに。秋の夕暮によるらん尾花の波、空の海にたつ雲の波は時も定まらず色も一つならぬが如し。紅深き波は秋の川に限れり。石間ゆく水の白波、たち返り〳〵ては

遂に巖の角をもはこびゆくらん。波の白ゆふかくとは住吉の濱松が枝に風のふくを見たる人の心なり。波のこゆとは末の松山に雪のふるを思ひたる人の考なり。同じく波といへど同じからぬは波にこそ。大かた水平を得ざる時は、いかに小さきせゝらぎも猶立ちさわぐめり。まして岩に碎くる瀧川、千尋の海原をや。されどこの波よ、たゞに水の上のみにはあらざめり。人の心に波たつ時はいさかひを起すもあれば、うき世をはかなむもあるべし。かの戰といふものはた、世の波ともいひつべきか。さはれいさかひといひ、うき世をはかなむといひ、戰といひ、みな世に厭ふべきこと恐るべきことなれど、そは皆平らかならんとてなれば、いつまでもさる事あるべくもあらず。まして遁るべき道もあるをや。されど猶いはゝ、かの地震といふものも大きなる波濤とも見つべきか。我等が乘れる世界の船

をもたやすくゆすぶるは、風のわざとも見えぬに、いかにいみじき力ならん。いとかしこし。されどこは遁るべき道を未だ考へたる人なし。さてはあら金の土などいふとも、さまで心安きものにもあらじ。されど又せんすべもなし。ふるひかしこみてゐたりとて何かせん。よし風ふかばふけ、波たゝばたて。

豐珠集

銚子にものしける時

こゝだくの巖をのみてよるなみの
きしうちゆする犬吠がさき

折にふれたる

ふさはしき賣家ありと入りて見れば

今はの人を妻ぞみとりたる

移　轉

えばの中に實よりおひけむ楓の樹
わが丈となりて我ゆかむとす

山家月

つき見むと山の修業者とぶらへば
たゞ一人して貝ならしをり

劍

傳へ來しものみな賣りて殘れるは
たゞひとふりの劍なりけり

更　衣

文函もちて卯の花がきね傳ひゆく

童もけさはころもがへせり

日光

まかゞやく玉の臺のおくふかく
大きなる人の鎮まりいます
こゝだくの罪と科とをぬりこめて
黄金かゞやくうてな高ぞの
旅のうた
よひの雨の名殘つゆけきあぜ道を
草はませつゝ牛かひのゆく
父のうせける折
法の師があだにつけたるあらぬ名も
父のと思へばたふとかりけり

なつかしき父にわかれて懐かしき
さとに別れてまたゆかむとす

星

荒磯べにひざまづきて祈る少女子の
顔の色あをし夕づつのかげ

海

おひそめし草のかき葉の露をだに
すてぬや海のこゝろなるらむ

山

のりてゆく駱駝の背の上暗くして
雪の高根にゆふ日かゞやく

避暑

みやこ邊の暑さ語らふ岩のうへに
しぶき涼しくなみ打よする

北海道紀行の中に

霜がれし蘆生つゞきに紅葉やま
もみぢつゞきにとゞ松の山

新　年

初日かげ屋並の旗に匂ひあひて
わが大王の年たちにけり

八百八町かねの音にあけて纏もちし
火消のともは出そめにけり

折にふれて

山に入りし人の文だにうれしきを
そへておくれり梅の一えだ

かきならし砂に文字かく小供らの
足もとちかくさゞら波よる

鶴とむで歸りしあとを慕ひくれば
やま人のやどに梅の花咲ぬ

相　聞

君が見しおけしの髪を髷にゆひて
花かざすべく早なりにけり

千代もとて君とうゑつる二つまつ
さかゆく春をわれ一人見る

氷

昨日すてしたらひの氷さながらに

こはりつきたり枯しばの上に

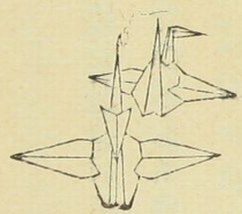
梅

よき梅のさはなる里の草のいほに
鶴かふおきなひげま白なり
春のうた
戀も世も半ばにすてしうたびとの
墓のうへ白くさくらばなちる

夕

水をいでて池を離れて餌にあきて
列をつくりてあひるとやに行く
折にふれたる
天地の神よまもらせ鬼すだく

北京にすめりわれの一人子
玉松の木だる磯べにむしろしきて
あたゝかき日を翁あみすく
天地に黒さとばりをおほひおきて
しづかにねぶる夜の大きみ



艦中雑詠

吉田又七

日清の役に赴きける時五嶋の沖にて

いきて又歸らむたびとおもはえず
さらばわかれん日のもとの山

豐島の沖を過りて

もろともにみさをの道の變らねば
敵のかばねもあはれとぞ見る

黄海々戰はてける夕べ

天地にひゞきわたりていさぎよし
すめらいくさのかちどきの聲

わが艦も我身もともにことなくて
夢のごとくに戰ひはてぬ

いくさはてし甲板の上にひれふして
神のめぐみをおもふ夜半哉

我死なば故郷に送りてよと戰友に托し
置ける書の奥にかきつけゝる

いさぎよく死ねとはいひし父母も
いかに泣くらんこの文を見ば

威海衛進擊の夜

死をいそぐますらたけをら月影の
入るをおそしとまつ今宵かな

陸戰隊に加はりて澎湖島に戰ひける時

城とたのむふねをはなれて外國の
あら野の末に石まくらする
遼東還附の詔勅を讀み奉りて
大君のみことのりぶみ胸にいだき
甲板のうへにわれひとり泣く
ある時
むくゆべき時もあるべし年ふとも
わするな汝（なれ）も今日の恨みを
戰爭中をりにふれて
すてし身のほかに望はなけれども
心しづかにひと夜ねてしが
甲板をしば〳〵あらふあらなみの

ながれもあへず氷る夜半かな
汐かせにみじかき髪をけづりつゝ
湯にいらずして四月へにけり
去ぬる風は敵の彈丸（たま）にもあらなくに
身さへ骨さへ吹きとばすらん
ものゝふのま心こめてうつ彈丸に
くだけぬものはあらじとぞ思ふ
はじめて鎭遠に乘りける時彈丸の痕を見て
こゝに碎けかしこにさけし吾彈丸の
火花のいまも目に見ゆるかな
黃海海戰六週年の日　我乘れる艦鎭遠なれば
おぼつかな昔やうつゝいまやゆめ

むかしの敵ぞいまのわが艦
老ませる母を横須賀に迎へしに程もなく東
洋の風雲また騒がしくなりて我鎮遠も近き
程に艦出せんとす斯る時に老たる人を殘し
おかんは心安からねば故郷に歸しまつると
て停車場に見送りて
さきくませまさきくいませ母君よ
功をたてゝわがかへるまで
をりにふれて
あら波のさかまく底やつひにわが
葬らるべきところなるらむ
數ふれば三十ぢの暮になりにけり

いつを我世のさかりともなく
初日かげにほへる海の水をくみて
まづかきそむる年はぎのふみ
たま〳〵に艦をはなれて一夜ねし
いそ山かげにうぐひすのなく
ひだりには菜畑むぎ畑みぎりには
小まつ老まつたちならぶ嶋
舟にありて十日廿日をすぎしまに
山は青葉になりにけるかな
釜のごとやけたる艦もやゝさめて
眠らんとすれば夜ぞあけにける
わが艦にけられてさけてちる波の

そらよりぞおつる夕立のごと
大うみに舟をうかべてあめつちに
さはるものなき月をみるかな
甲板をしづかにあゆむ衛兵の
くつ音さむし霜やおくらん
のる艦を世とも家ともたのみつゝ
七年あまりなみまくらする
浦づたふまさごの上のたはぶれに
かきおく我名たれかよむらん
觀艦式の日
天地もうちしづまりてきみが代の
こゑよりほかに物おともなし

叢雲回航員の英國にゆくを送りて
ゆく舟のすがたは消えて烟さへ
はてはかすみになりにける哉
甲突川の邊なる西郷翁の誕生地を訪て
水清きかはべを出でてあめのした
かけりし龍のゆくへ知らずも
隱岐勝田山なる後鳥羽帝の陵に詣で侍
りて
草ふかき大みさゝぎをふしをがみ
ますらをわれも涙にぞむせぶ
戰友を山寺に葬りけるとき
つゝの音三たびひゞきて埋みつる

ひつぎの上に花ちりみだる
暴風雨の夜
あなくるしあな心ぼそふなのりは
けふを限にやめんとぞ思ふ
そばしの休暇を得て歸省しける時
あさ日さす武藏野の原を横ぎりて
千里はれたるゆきを見るかな
知る人は少なくなりて名も知らぬ
人のおほくもなりにける哉
初瀨回航委員附を命ぜられて英國に赴ふか
むとて鎭遠を退艦しける日
年月をなれにしふねにわかるゝは

親にわかるゝこゝちこそすれ
この艦の此釣床よ明日よりは
たが夢のせてうきしづむらむ
出たつわした吾師新橋に送り給ひし時
うみ山のまだ見ぬけしきわが歌の
袋にいれて歸りこむわれは
我國をはなるとて
日のもとのはての五島ひとつ消え
二つ消えつゝ見えず成にけり
釋尊誕生の靈地なる古倫母にて
國亡び民は地獄にくるしめど
今は助くるみ佛もなし

朝がほの花

長壽吉

細く長き紫の雲、西天にうかび、東の空に星の光さむき冬の夕べ、我は筑紫の友より文を得ぬ。

『三角の半島にスケッチし、水禪寺の池畔に歌よみて、君と一月を暮したりしより、月四つ經ぬ。其頃の樂しかりし事をえるして、我歌と共に都なる君に送らむと思ひし中に、はや今日と成ぬ。されど我はいかでかゝる文を君に送らむとは思はむ。人の世の事のはかりがたき、いふもおろかなれど、我はいかで樂しかるべき文を、忽に涙もてかゝむと思はむや。

書くは悲しき限なれど、君なれば我も涙おさへて記すべし。君が歸り給ひし後一月、そは秋の夕べなりき、我は白川堤下の寓居をいで、曇りたる空をきづかひつゝ、阿蘇嶽の雲に隠れしを眺めて、水禪寺の池畔にいでぬ。けふ我はしき弟は、過ぎし日君と樂しみし畫津湖の舟遊を思ひいでて、友三人と、かの清き水に棹さゝむとて樂しげに出ゆきしを、夕暮になれど猶歸りこぬに心づかひして、我は迎へんとて來りしなり。薄霧こめたる池のをかしさよ。飛石づたひ水をわたりて、松すこし生ひたる芝山をめぐり、清き流にそひて畫津さしてゆけば、暗き木蔭に秋の虫なきて、さびしき景色なり。心ゆくまゝに詩を吟じつゝ行けば、かの家居ある所、道曲りたるかどにて、下男のゐへぎつゝ走りくるに、はたと行きあひぬ。

下男は我袖をとりて、いかなる事を語りしか。君も少しは推し給ふべし。下男は白川堤下にはせ行きぬ。あゝ我は、いつかの土橋を渡

りしかゞいかにしてかの清き流れに、棹さしゝか。蘆葦半ば秋霜に枯れて、蕭條たる書津の湖の岸邊に、我は限なき恨と悔と悲しびとに沈みて、たゞ獨り小舟のうちに坐りぬ。あゝ君、我前には、蓆の上にはしき弟の魂なき身の横たはれるに非ずや。篝火風にゆらぎて、さびしく照せる弟が顏のいたましさよ。あはれいかに苦しき終りなりけむ。胸におきたる手の指さき少しゆがみて。我はかくに堪へず、君しばし、其夜のけしきと、其夜の我悲しびとを思ひみよ。

我ははじめて深く人生の哀れを知りぬ。人の命のはかなきをさとりぬ。陽春心とたゝへ給ひし我心も、つくる時なき悲しびにおほはれはてぬ。されば一人の弟を失なひて、歌もなく詩もなく、たゞ泣てさびしき秋を暮したるわれ、君哀れと思ひ給へ。

こは朝顏の種子、わが書齋の垣根にさきしま白き花のなり。そは君

がいたくめで給ひし花なりき。君が歸り給ひし後、弟は日々水やりて、花數おほく咲きしが、かの悲しき日の朝も、なほ二つほどさきぬ。弟はかの朝、この花の種子を君に贈りてよと語りしが、その言葉も何となく、今はいはれありげにぞおぼゆる。この種子、數すくなけれど、こはかの朝の二つの花のなれば、あはれと思ひ給へ。こをなき人が心のこりたるかたみともし給はゞ、なき人も我も、喜ばしき限なるべし。』

とみに我目にうつるは、かの書津の湖色なり。夏雲影を落したる深藍の波をやぶりて、かの中の島に舟つなぎつゝ、唱歌をうたひし時、いかに樂しかりしか。其時いとも樂しげなりし其人は、かの深藍の水に沈み、かの葦の葉かげにむなしく眠りしよ。かの水禪寺の池畔に語りし時、いかで長き別をなさむと思はむや。かの垣にさけ

る朝顔に水やりし時、かの白き花をめでて其種子をもとめし時、いかでかゝる悲しき贈物を得むと思はむや。我れ白川堤下を辭して北に旅せし時、そは細き雨ふる朝なりき。かの人の涙ぐみつゝ、門に見おくり居し其面影、あきらかに我目にぞうかぶ。都に歸るやがて送られし文には、幼き筆のはこびながらも、をかしき事あまた書きて、こむ年の夏には、また遊びに來給へ、其折には、都にのみありといふ珍しき書物、味はひよき菓子を、なぞかきおくり給へる、幼なき文字、幼なき文、いとなつかしくて直ちに返しの書送りけるを、行末のぞみ多き十二といふ齡にて、父母のなげき兄のなげき、人のなげきとなりて、世を逝きたまへる、あはれいかに、幸なきさだめに生れ給ひけむ。嗚呼この種子、この朝さきし花のとあれば、我はこれを植ゑて、花をさかせて、長く君をとぶらはむ哉。

花を葬むる詞

花よ、我れ汝を葬むる。

思ふ、この夏湘陽に遊びて、水淺き酒勾の支流に沿うて歩みし時、目にみゆる綠麥綠草と藍山青水、日陰なき隄上、暑さ堪へがたかりき。ゆきて郁橋をわたる時、橋のたもとに、三つほど咲ける汝れを見たりき。少女がむくろに生ひいでし花の如く、めづらしくあはれなるものに思はれて、心なく汝れを折りて、我が衣囊に入れぬ。

今、秋、色あせし汝れを古人が詩集のうちに埋む。なれをつゝむは金石の詩、汝枯れてくつる時、あゝ我蕪詩、よく古人に比ぶるを得るか。

暮雲流水

古河の城趾

すこし黄ばみたる竹藪、雨にかすみて、水涸れて畑となりにし古堀の菜は、雨にうたれし初夏の朝、古河の古城をとひて、とある古社にわれはいこひぬ。思川の漁船の笛のかすかにひゞく外は、やれ城は唯雨の音のみ満ちて、いたくぬれたる我衣の滴の、繪具箱の上にをかしき象を畫くも静なりや。

石垣くづれ、篠生ひ草あれて、城の形みるべくもあらねど、亭々たる大杉、碧苔なめらかなる大石、何れか古河公方を忍ぶの種ならざる。

草をふめば草やはらかに靴の下にふしぬ。篠を折れば篠やはらかに

我指にかゝる。あゝ昔、糾々たる武夫、劒かゞやかし弦鳴らしけむを。

さゝやかなる家の三つ四つ見えたるは藩士の後のすみかとか。はねつるべの井に桃の花のちりこぼれたる、すもゝの花の軒によりたるなど、これも静けき眺なりけり。雨にぬれつゝ堀を渡りて城外に出づれば、こゝは一面の桃畑なりき。若葉の麥の緑なるが、うす紅の桃花におほはれて、高き所幾つ、低き所幾つ、遠くかすかに、桃と麥と、紅と緑と連なりたる、いかに單調にして、しかもをかしき眺なるらむ。雨はあら〳〵しくかよわき桃花をうちて、瓣のたれたる風情、何にかは譬へむ。

蕃山先生の墓、矢部氏の墓、二つ並びたる前に、我はかの桃畑にて折りし桃花を手むけて拜しぬ。あゝこの花、散りてこぼれて朽ちて

土となりて、靜けき黃泉の家居ちかく、復春を笑ふらむ。

岩門島

天風我髮をふき、松籟かすかにひゞく。眺はるかなる岩門島のいたゞき、百里の海山、たゞ我目のうちに入りぬ。

暮色をうしろに雲岫永く連なるは肥後の山々。藍色あざやかに南をふさぐは天草島か。心ゆくこの景色かな。夕べの海鳥とほくかけりて、ちさくこりつゝ見えずなりぬ。遙なるかな、み天の雲、限りなき哉、おほ土の山川。この天地を思へば、いかに人の身のちささや。

歌をうたへば、我聲はげにかよわき響なりき。

夕雲やく夕日、かぎりなき天草の浩蕩におちて、夕波光ある血を流す。くろき小島二つとほくみえて、光れる波に、一條ひきてゆくは、

長崎がよひの瀛船なり。

この島すべて岩よりなりて、其間に松生ひたり。岩の赫色と松の綠とあやなす下に、大洋のなごりか、大波白くくだけよるに、海鳥おほくむれ居て遊ぶも、また眺をそふるものなりき。昔は山陽この島のほとりに遊びて、雲耶山耶の詩を賦しぬ。今我れこの詩を誦して昔を思ふに、松風と浪の音と、しばゝ我聲をみだしたるもをかし。海鳥忽ち近く翔りて我をおどろかし、風にはかにおこりて我が帽をとばさむとす。

暮色すでに大空の半をおほひて、夕ぐれの氣わが身にせまりぬ。天草洋の金波いろをうしなひ、天草の島はかすみ、肥後の山々は雲にかくれぬ。松籟を離れて浪聲に近づきつゝ島を去れば、加津佐町の漁父、樂しげに歌うたふ。

島で名所は加津佐の岩門
地からはえたか浮島か

と、二句よくこの島をうつして、野調またおもしろきに、吾は長く、岩門島の景色とこの歌とを、忘るゝこと能はず。

白玉橋

白玉橋、あはれをかしき名かな。

紫ばみたる水源の山、朝嵐靜に溪にふき落ちて、春も枯葉のはら〳〵と浪にちりぬ。

岩にくだけては白く、淵に沈みては藍なす溪水、橋の下にさわぐ。

遠くましろき多摩の川原、げに石は白玉の如し。水も白玉なせり。

いづれをか白玉といひけむ。

著しく大きやかなる岩のもとに、三人の里の子ぞ遊び居たる。年は七つ八つとも見ゆるに、清からぬ衣も、こゝの景色とあひし心地す。

あゝ樂しげなるさまかな。山紫に水清きこの川邊に生ひたちて、行方いかに暮しゆくらむ。汝れらが父は、日原の山にたき木こるか。川に沿ひて流木あやつるか。さらずば荷馬ひきて氷川の里に通ふらむ。汝れらが母は俚歌おもしろく、梅さく窓に機や織るらむ。樂しきはこの山里ぞ。うるはしきはこの川の邊ぞ。夢にだに、都のちまたをな思ひそ。

「四百余州」うたひて歸りゆく子等がさまをみれば、我もかく幼く心なく樂しく清き時はありき。此山水の如く心清き時はありきと思はれて、七里の山路は俄に物うくなりぬ。

見れもどあかぬ景色かな。青空よくはれて、白雲二つ三つ浮べり。

藍色ふかき淵には、色よきシンナ色の枯木のぞみて、樵夫の橋をゆくもげに畫なり。さらば畫をかゝむ。あゝいかにして、かく石原のましろなるらむ。白の繪具のいと多く費さるゝは。

入間の溪

妻阪峠、げにけはしき山路なりき。今はたゞこの川の邊をたどりゆかむ、さらばしばしとて、川の石に腰うちかけぬ。

夕暮の山風、夏も涼しき心地よさに、道の遙なるも知らずて、我はをかしき溪水の音に、耳かたぶけぬ。潺々として少女が絹のすそのふれあふが如きもの、滴々として秋雨の簷端たゝくに似たるもの、さては瀧つせの石にふれて、轅門の鼓かとしのばるゝもの、さまゞゝ交りきこえて、我心に謂ひしらぬすゞしさと清けさとを與ふ。

野人が歌に驚きて急ぎ行けば、上下の赤工村たちまちに過ぎぬ。てゝは永田の里か。夕ぐれたく炊烟、家をこめ木立をめぐりて更にのびて溪を渡らむとす。美しきかな茜の雲。苗田にうつりて、山も木も家も、すでに深き藍の色に包まれぬ。山間の日暮るゝ事はやく、むかひ岸も暗くみえずなりぬ。靜なる道をたどりてゆくは、たけひくき僧と、我とのみなりき。いまはあたりも暗くなりはてゝ、空のみぞ白く光りたる。暫したゞよひたる溪水の、空をうつして光れるが、ちら〳〵と木の間に見ゆるも、げにさびしきけしきなり。燈三つ四つ見えて、飯能町に入ぬ。僧はいづれに行きけむ影を見ず。我れたゞ獨り暫し町をさまよひて、やうやくに見いだしゝは、うすぐらき行燈の文字、お泊宿〇〇〇。

逆旅樓上、足もつかれ心もつかれて、身はいつしか、彼川邊の石の

ほとりを、そこはかとなくさまよふなりき。夢はさめぬ。蓐いとうすきに夏の夜の寒さを覺ゆ。さら〳〵となりたる庭樹の音の間に、かすけくひゞくは、いやしき少女らが鼓の響か。旅のわはれ、いとふかく、わが心を抱きぬ。

高角山

夕陽すでに水上の山に沈みて、袂すゞしき高津川の畔にさまよへば、歌聖が社をつゝめる高角山の森影は、遠く落ち來て、こなたの岸に立てる我をも、亦おなじ暗さにおほひぬ。

かの名は知らぬ池の、いと物すごきをみて、砂白き連理の松原、夏の日わつく照りたるに、身はつかれ、いまこの川の邊にいでて、かの若香魚の水にをどるを見たりし時、かの歌聖が社の急磴にいこひ

し時、足のつかれはとみに去りて、せめては高角の月をみむ、益田への夜道はいと近しとて、心ゆくまゝにこの川のほとりに月をまちぬ。

蓊鬱たる山の森は、まくろき色して、夕ぐれの白き天に、髪みだれたる巨人の如くたてり。かの歌聖が妹に別るとて、袖ふりたりし木の間はいづこぞと、遠くはるけき昔を思ひて、さらに我歌のつたなきをなげき居れば、釣糸の水うつ音も、いつしか絶えて、高津橋のたもとに甘酒うる小店の燈のみぞ、いとさびしげにかゞやきそめぬる。

夜やう〳〵ふけぬれど月をみず。益田さしてさびしき畑中の道をたどりゆきぬ。思へば今宵は月なき宵なるべし。我は玄海の洋をこゆる時、十七夜の月をあふぎしなれば。

古城の梅

君、白梅の林をすぎて、香の雲をうがちしとなたゝへそ。われは、薫れる白烟といはむとするに。

平生不喜凡桃李、看了梅花睡過春、げに清き梅の林に入りて、其烟の如き花を眺め、一枝をたをりて妙なる薫りにしばし醉ふ時、我はつねに春の花を忘れて、睡りて春を過ぎんの心あり。

函根おろし寒き朝、靜なる古城を尋ねて、人なき頃を花蔭にさまよひ日毎々々其香に醉ひて、梅さく春のいたづきを慰めたるは去年なりき。

しめりたる枯草の、きいろき上にいこひて、岡をおほふ白梅の花を遠く見たりし時、われはつくゝと白烟といはむと思ひぬ。岡の上の緑の松は、いと〳〵近くみえ、岡の下の梅の林は、いと〳〵遠くけぶりたる、雪にもあらじ、霞にもあらじ、雲にもあらじと思ひぬ。

道なき岡の梅林をぬひて行けば、黑き古木の苦むしたる形、ひくゝたれたる枝の花の形など、をかしからぬなし。雨に散り風に散りし花片の地に敷きたるは、白瑤亂れしくかと思はるゝに、いづこともなき清香の、風ふく毎に醉はむばかりにかをりたるは、心にも身にも清くしみて、鶯ならぬ鳥の歌も、尊きものゝやうに思はれぬ。

城山にのぼりて、遠き新九郎の昔を思ひ、くづれたる石垣のあはれを見、さやげる老松の響をきゝては、この梅の花こそ、武士が夢のあと匂はすべく、かざるべく咲きいでしものなれと、思ひし事もありき。

霧降瀧

木蔭の道、夕ぐれさらに暗きに、我は石にくつをすべらして、あやふくたをれんとしぬ。起きもせでしばしやすらへば、嗚呼靜なる哉。したの溪ふかき瀧の音のみ、さら〳〵と山に響けり。「瀧つぼにくだりてかへり給ふほどに日は暮れむ」と、茶店の翁は語りしが、げに今は紅葉のあかきも見えずなりぬ。

夕暮の暗さに、さだかならねど、數おほき白糸を高くかけたらむ如き霧降の瀧、たとへばおほくの玉の、嚴にふれてなれるが如き音のをかしさよ。其形其音、我は常にこの山中の第一と思ふに、せまき平地の几によりて、靜に水の音をきく。この琤々の音、溪をつたひてきゆる所や、大谷川の流、石をかみ灘をなして走るらひ。かのわ

づかに夕空をもらしたる、瀧のいたゝぎの岩の間を探りて遠く行かんか、其處には瀧の神の、天琴いだきて休らふあらむ。さらばそは、美くしく尊とき少女神ならむ、なぞ想をめぐらす。

暗き道に幾度となく石にすべりて、やうやくに茶店にのぼりつけば、二荒山はうす月夜の天にかすかに見え、なつかしき瀧の音は、楓の枝を渡り紅葉の間をぬひてはるかにさびしげにきこゆ。

「いま歸り來給ひしか」と、やれ戸おして立ちいづる老人は、白き布におほきなる箱をつゝみて負ふ。「君も日光町に歸りたまふなるべし、我は明日の茶菓子もとめむとてゆくに、いざ來たまへ、道あないすべし」とて、一里松明に道を照して、坂くだりゆく翁のすこやかさよ。年をとへば七十二とか。「さらば翁は、將軍が日光御成のさまを知りたるべし、語り給へ」といへば、よろこばしげに長々と語

りいづる物語、そのをかしさに、道のおほかたをすぎて、林もすぎぬ、溪も渡りぬ。一里松明消ゆる頃、我は翁に別れて、大谷川を渡りぬ。

妙義の秋

第四石門の外、蕭々たる秋雨山にみつる夕べ、我獨り石に踞して、妙義の秋色をみる。

左に高きゆるぎ岩、靜に白雲をかけ、右には屏風岩、雨にぬれて色あざやかなり。腑せば遠くつらなる木々の梢、紅、黄、緑、げに錦なりけり。雨滿山の錦にそゝぎ、風ふけば、紅、雨に流るゝが如し。かすめる遠山、うすひ川、磯部のいでゆはいづらぞ。奇しきかな大岩の形。美しきかな木の葉の色。我は何事をも思はず。たゝ深く深

く自然の美に醉ひぬ。

雨はいたくふりいでて、踞せる岩またくぬれぬ。衣ぬれ帽ぬる。されぞなほ去るにしのびず。

しばしにして憂としてなるものあり。見れば吾杖の岩を打ちて落つるなり。その杖、岩の角をはなれて、直に木の葉の錦をうがつ。杖木の葉にかくれ、木の葉うごき止めば、滿山たゞ雨の音のみ。恐れの思にはかに起りぬ。

あゝこの山、いつの世に、いかなる神か、天の斧もてけづりなしけむ。千尺高く聳えたつもの、そは雲をさく劒か。洞をなして雨をさくるもの、そは猿の宿か。孤峯ひたすら天をつかむとするが如きもの、連なりて風をふせぐが如きもの、目に滿つる奇峰怪石、げにをかしきはこの山のけしきなり。今われこの高きにありて、白雲と處

をひとしくし、山靈の氣をあぶ。雄大の心とみにわきて、快き事たとふるにものなし。

楓葉の紅きをわけ、栗の葉の黄ろき下をくゞりて、山を下り、夕ぐれおそく磯部に歸れば、里のくすし師が垣根にさける紅薔薇、今日はいと〳〵やさしきものに思はれぬ。

安房の浦づと

印東昌綱

病をつくろふとて北條にありける頃

ひくかりし旅のやどりの借づくゑ
　つかひなれたり日數へぬれば

村をさのかぞもる犬もころゝは
　跡したふまで住みなれにけり

まつ人はこずとのたより今つきて
　落葉をたゝくよるのあめかな

船はてし笛のねさむくきこゆなり
　一人ものおもふ旅のゆふべに

宿にまつ人はなけれど手折り行て
　さびしき窓のながめとはせん
天のがはとわたる雁のこゑぬれて
　そゞろにさむき秋のあめかな
あめくらき旅居の窓をおしあけて
　かさのゆくへを一人見るかな
年ごとに音づれくればいつとなく
　わがふるさとの心地こそすれ
いつの頃歸りますぞと問ひたりし
　その夜に似たる雨のおとかな
わが病すこし癒えたりはるかぜの
　麥はた菜畑ゆるく吹くころ

折にふれて
みやしろの軒端はくちて髪きりし
　女の繪馬のあたらしきかな
このあたり橋あらばとも思ふかな
　柳一里の川そひのみち
繪具皿とりちらしたる窓のうちに
　あるじはあらずうぐひすのなく
花かげにすぎこし夢やかたらはん
　ふたりのほかはたゞ蝴蝶のみ
父君をみとりせし夜のゆめさめて
　あかつきさびしさみだれのおと
見るまゝに心もとはくなかれけり

ひとすぢしろき里がはのみづ
ふきたえし風のゆくへを見送りて
われ一人たつをかごえのみち
柴栗ははゝぎみことにめでたまふ
これもいさゝか家づとにせん
二すぢの野川のみづはいでゐひぬ
ねぶの花さくしたかげにして
何ごともつゝまぬ人のいつとなく
よそ〳〵しくもなりにける哉
此世にて又の逢瀬はいかゞわらん
のちの世あらばその國にして
いつかまた共に見るべきこの島の

このまつかげの夕づきのかげ
岩の上は君とわれとになりにけり
さらばかたらんこしかたの夢
ちる花はまたこん春も匂ふらん
きみがすがたをいつか見るべき
唯二人をぶねに乗りて島のあたり
めぐると見ればさむる夢かな
かきゆひて札たてゝあり村長が
いへのたからの紅梅のはな
しづかなる春の色かなおくつきの
こけのみぎりに桃のはなちる
何事かのゝしりあへるわたし場の

やなぎにかゝる夕づきのかげ
智慧の輪によそ心なきいもうとを
おぞろかしたるうぐひすの聲
おば君のむかしの雛もとりいでて
今年のと共にかざる今日かな
いもうとの病はいえずひなまつり
さびしき窓にもゝのはなさく
風にちり雨にうたれてかきのはな
實となるべきは少なかりけり
つみためて一つにもたる花たばを
三つにわけつゝ春の野かへる
たれをりてつれなくすてし早川の

きしをながるゝ山ゆりのはな
海士の子が遊びすてたる磯ばたの
ちひさき舟にほたるとぶなり
いく度もとまると見せて姫百合の
花のまはりをあそぶ蝶かな
さびしさに友をこそまて友はまた
われをやまたん秋のゆふぐれ
ゆきかへり又ゆきかへり橋の上を
さまよふほどに月かたぶきぬ
野を出でて市にうらるゝ秋の虫
かゝれとてしも鳴かずやありけん
なく虫のこゑは一つにきこゆれど

親もあるらんつまもあるらん
乞はれてはいなみかねつゝ菊の枝
のこり少なくなりにけるかな
かへりゆく友よびとめて咲そめし
黄菊ひともと折りてやるかな
みそらゆくかりがね寒しこの夕べ
きみ思ひいづやわが思ふごと
身ひとつに秋のあつまる心地して
やらんかたなき我おもひかな
僧一人のせて舟子のわたすかな
みなかみくらき雪のゆふべを
二ひれに別れし子らがいさかひの

なかをへだつる里がはのみづ
病院にて
かへりてんことはいかゞと故郷を
なきていでこし人もあるらむ
百花園にて
四つの時はなはたえねど秋はぎの
さかりや園のさかりなるらん
清澄山に上りける時
おく山の杉のむらだちつゆおちて
名も知らぬ鳥の聲ぞきこゆる
天津の海岸に宿りて
いそ山の松のむらだちみえそめて

あかつきさむき星のかげかな

旅より歸りける時

うみやまのきよき境をわかれきて
　みやこの塵にまたや入るべき

父母の君の靈祭しける日夏月といふ事を

夏の夜の月は照らせどともに見ん
　ちゝもいまさず母もいまさず

鷄肋集

清水寅治

偶成

酒はつきぬ我いねんかな冬の夜の
　つめたき床にわれいねんかな

吾世をば一夜になしてはてぬとも
　われは恨みじあはんとぞ思ふ

なつかしく我名をよぶに驚けば
　その人はあらず雨の音きこゆ

世の人はあざけりぬべし友どちは
　そしるともよしわれ君にあはん

恐ろしき姿となりてそのひとの
われをうらむる夢を見しかな
殘しおかば人やみるべく然りとて
やぶらんは惜しなつかしの文
ひねもすを雨に暮してひたふるに
何はおもはず君をしぞおもふ
見るにつけ聞につけつゝ物ぞ思ふ
心やいかにならんとすらむ
あはれ我を千尋の淵に落し入れて
ひやゝかにゑみをもらしたりけん
骨にしむうらみをのこし人を殘し
ひとりゆくべき末をしぞ思ふ

いきどほる心もきえていまはたゞ
ともにうまれし世をうらむ哉
言葉もていひあらはさむすべもなし
わがおもふこゝろ神ぞ知るらむ
もろともにいなばいぬべく契りてし
其人はあれど其なさけあらず
夏草の中にうもるゝつか見れば
世はたゞやすくすごすべき哉
然りとて思ひすつべき世にはあらず
坐に故人ありうめの花さけり
うき雲のはれしあしたに忍ぶれば
あやしかりつるわが昨日かな

世の波にゆられ〳〵しはて〳〵は
　いづくの岸につかんとすらん
やう〳〵に眠りしゆめの又さめて
　さめぬやみぢを又たどるかな
うつせみの世に樂しきは一人ゐて
　物思なきときにぞありける
とこしへにゆく水きよく山あをし
　はかなきは人のいさをなる哉
雪にくれし行脚の僧にやどかして
　世にもやさしき戀をきくかな
ふきゝほふ早手高波よこにうけて
　雨ふるおきに小ぶねたゞよふ

大海原みちわたる月のかげゆれて
　しろがねの波に秋かぜぞふく
かへり來し船とりまきて子供らも
　その子の母もいそにつどへり
わぎも子の袖ふさかへす秋かぜに
　をじまが磯のはぎがはなちる
しけにあひし舟は歸りて親子三人
　ゆふけの膳にあひかたるかな
うちひさす都のつとの日がささして
　村長のまな子伯母の許にゆく
　某の君の北海道に嫁ぐをおくりて
たへがたき寒さはいはず波たかき

海路はいはずともに具してん
道こそは千里八千里ありといへど

心へだてんうみ山はあらじ
わきかへる心しづめてはなむけの
うたげの酒にわれうたふかな

古戰場

木がくれにふくろふなきて桶狹間
こけむす塚はたゞあきのかぜ

火山

あさにけにおもひの烟たちのぼる
あづまの山はわれに似たる山

北海道記行の中に

きはみなき廣野のはてに星見えて
幌向が原はたゞあきのかぜ

ありそべにたちて思へばあまりにも
あさく小さきわがこゝろかな

ふきさたる万里の風を袖にうけて
大いはの上にひとり海を見る

いさゝ小笹

いさゝ會同人

高山直純

折にふれて
もちの夜に影を並べし人は失せて
こよひぞてらす片われの月
野にあそび數々つみし草のうちに
忘るなぐさを胸にはさみぬ
たましひは何地ゆくらん立のぼる
けぶりぞまよふ日ぐらしの里
亡き兄の顔もありけりをさなくて
つくゑけづりし小がたなの跡

をさな子の心つくしてすなやまを
築かんとすれば波うちこぼつ

松本清太郎

とつ國にまなべる友にやるふみの
なかにつゝみぬ梅のひとはな
あはれ一人都にのぼるわれをたゞ
見おくるものはふるさとの山
思ふぞちまなびの道をかたる夜の
この樂しみにまさる物あらじ
人しれず谷かげにさくはなすみれ
よな〳〵星のかげやどしけり
みづくさの繁れる小川傳ひゆけば

桃さかりなる村にいでにけり

今山光二

相模の海うらゝけき朝も大しまの
三原のやまはくもたちまよふ
何事をさゝやきあひてもろともに
いそぎくだるか谷がはのみづ
さくら花一重はちりぬ八重さきぬ
それさへちりて春くれんとす
くゆらする烟草のけぶりこもる迄
友つどひけりさみだれのまど
かちどきの聲はけぶりに包まれて
あさ日のみ旗ひらめきのぼる

むしぼしの日記物語よみ〳〵て
あつさをさくる昨日けふかな
避暑の友みな歸りゆきぬ我やまひ
いまだなほらず秋かぜたちぬ

今井嘉幸

ゆくといひ來るといひて童べが
おきべの船をあげつらひをる
下町をいましめてゆく拍子木の
おと高くさえて秋の夜ふけぬ
そのかみの名主の家をたづぬれば
いしがきくづれ草おひしげる
百萬のすめらみいくさひき具して

うまに水かはん楊子江のきし
音もなくながるゝ水にながれゆく
ともし火のかげ船うたのこゑ
玉の心玉のすがたの少女あらば
われ妻もたん吾つまにせむ
玉のりのをさなき少女たへにして
人はほめけり我は泣きけり
恨らむくはわれはおくれて生れけり

南無阿彌陀佛正雪の墓　村山小次郎

富士にのぼりける時

ふじのねをうしはく神の大まへに
歌たてまつりをろがみまつる

わが前をすべりゆく人見るが中に
したつ岩根に見えずなりゆく
折にふれて
夕かぜになびく入江のやなぎかげ
舟つなぎすてゝ人かげもなし
熊笹のしげみがなかをふみわけて
見えずなりゆく狩びとのむれ
みるからに心もさむし霜がれの
はやしをいづる冬の夜のつき

篠崎　正

大鷲におはるゝ猿のこゑたかし
たにふきあぐる秋のやまかぜ

おほかみのひと聲たかく谷鳴りて
　つきかげしろし大木曾のやま
すみれさく野邊の若草うちしきて
　友は畫をかきわれは歌を思ふ
いへ二軒雜木のはやしいさらがは
　わがふる里に似たるあぶら畫
かへりゆく人影うすく暮れそめて
　あき風しろき蕎麥ばたけ哉
わやにしき黄金珍玉あらずとも
　此世にひとり君しいませば
わが家にこがねしら玉なしとても
　君はとがめじわれも憂ひず

うつら〳〵ちりゆく花を眺めつゝ
　われ思ふ所なきにしもあらず
文机のうへにさ百合のはないけて
　しづかにおもふ神をまつる歌
あきの雨にふりこめられて巡禮の
　うたきくやどの夕まぐれかな
こゝのへの玉の宮居に人はなくて
　あきかぜさむし太液の池
蛇の目傘なかば廣げてうるはしき
　をとめも乘りぬわたしばの舟
富士山に登りける時七合目のあたりにて

上小澤潛

みるがうちに麓の野山かげきえて
　はせくるくもにわが袖ぬれぬ
さきだちて岩かどよづる不二講の
　人かげきえてあめこぼれ來ぬ
　石室に宿りて
うき雲はふもとにかへり星かげは
　そらにあらはれ天地くれぬ
　絶頂に上りて
岩かげにいこふ道者のひとむれを
　さかしまに射る朝日かげかな
天地のはてなきなかになにすとて
　ちりのこの身の生れいでけむ

旅のうた
くちはてゝ苔にうるほふ倒れ木の
　したくゞりゆく山のほそみち
　折にふれて
廊下ありく靴おとたえし寄宿舍の
　ふけたる夜半に雁の聲きこゆ
そゞろありき歸りてみれば文机に
　友よりのふみ友よりの花
墨のあとインキのこぼれあまた年
　つかひふるしゝわがつくゑ哉
よべもまたなき母の夢みつるかな
　いざ菊をりてはかまうでせん

夕がほの花さくかげに湯あみして
　たらひにうかぶ月をみしかな
夕燒のにほひきえたる雲のひまに
　星一つ見えて野はくれにけり
よこさまに夕日さしこむ並木みち
　頬かむりしておうな歸りゆく
うつら〳〵物思くれば野はつきて
　わかしともれりたそがれの村
病みながら旅だちし友いまいづこ
　十日たよりなし雨さむく降る
都より種子とりよせてうらにはに
　まきしわさがほ花さきにけり

かけおちのめをといそしみ耕して
　いへゐつくりぬ村のはづれに
人みなはいかに此世をおもふらむ
　わがうき身にはうきよ也けり
をかしげに何とて人のわらふらん
　ひとり悲しきわがこゝろかな
たへかねつ泣るゝかぎりわれなかん
　人目ひとごとさもあらばあれ
きみ故にをしむ命ぞきみがやまひ
　いえずば我も失せんとぞ思ふ
なぐさむる君がなさけの言の葉に
　いよゝかなしきわがおもひ哉

川にのぞみて

阿部貞二

ながれゆく　この水よ
いづこより　流れきて
いづこにか　流れ去る
みなもとは　をち方の
あをき山　その山の
山かげに　わく清水
草の葉に　宿るつゆ
木の枝に　そゝぐ雨
とけかゝる　ゆきの雫

聲もなく　あつまれば
たに川の　こゝかしこ
流れおち　ながれよる
落ち來れば　獅子吼ゆる
たきとなり　せかれては
龍ひそむ　ふちとなる
春あきの　はなもみぢ
こゝろなく　ふく風に
みだれては　ちりかゝる
かの山と　この山を
めぐり過ぎ　かの川と
この川を　よせあつめ

やうやくに　山ひくく
水多く　村ちかし
草の家　二つ三つ

水ぐるま　日ねもすに
めぐりつゝ　まろ木ばし
人まれに　くちんとす

こゝやがて　ひろき野に
流れゆく　見かへれば
すぎし山　かげくろし

川の幅　ひろくなり
見るかぎり　もり林
田と畑　と町

堤ゆく　人も見ゆ
しら壁の　家も見ゆ
船もゆき　水にぞる

かくて今　わが前に
流れこし　この水よ
いづこにか　流れゆく

行く舟の　數まして
水にぞり　すみがたく
幾里へて　海に入る

その海は　かゝる水
數多く　あつめつゝ
あつむれど　みちもせず

鐵の船　丸木舟
ともに泛び　大くじら
小鰯と　ともにすむ

風つよく　ふきくれば
おほ波は　おほぞらを
うごかして　地もゆるぐ

靜かなる　夕日には
海人の歌　聲がすみ
月夜には　玉兎とぶ

この水も　絶間なく
てらす日に　むされては
昇りゆき　雲となり

吹く風に　送られて
やがて又　この川の
みなもとの　山のうへ

露となり　雨となり
雪となり　ふりて來て
地にひそみ　いは清水

流れゆき　流れさり
幾千年　百千年
この水は　とこしへに

この水を　ながむる我
あゝ我も　かゝらんか
あゝ我も　かゝらんか

鶴

日は西山にうすづきて
夕べは海のあなたより
いつしか陸を蔽ひきぬ
限りも見えぬ大海原
越えて來りし鶴一羽
漸くこゝにつきにけり

今宵一夜を何所にて
羽うちやすめわかさんか
森は鴉に拒まれぬ

藪は雀ぞやどりたる
村のはづれの一本の
杉に今宵をあかさんか

高き梢は風あらく
ひくき梢は人近し
二度三度木をめぐり
二聲三聲なきつゞけ
鶴は彼方に飛び去りぬ
今宵いづこに宿るらん

さ さ ぶ り

遊子のうた

酒さめて柱によればほと〻ぎす
と〻せのむかし故郷を
いでし其日のしのばる〻

牛追のうた

牛を追ひ〳〵枯野をゆけば
若い女が枯草かるよ
ちよいと抱いて小わきへのせて
つれてもどろか里のみち

草刈のうた二首

風はふく〳〵尾花はなびく
君の心はいつなびく」
枯れて苅られてかまどに入りて
なほもゆるかわがおもひ」

漁師のうた

なさけないぞやさかなをとるは
さかなに親子もあらうもの

無題三首

君とわかれの酒もりすれど
酒によはれぬこよひ哉」

浮世すてたる法師の身にも
　秋の夜風の身にしみる」
ひと聲ないた山ほとゝぎす
　我もつまこひ月になく」

春の海

男波と女波とよりあうて
かたみによする春の海
　あれ見やしやんせ
つがひの鷗がうかぶぞい

わかくさ

家のうちの小さき事にかゝはりて
　をとこ心のいつくじけゝん
しづみゆく月のひかりはむら雲に
　しばしうつりて闇となりにけり
かはりゆく雲のかたちを眺めつゝ
　何とはなしに日をくらしけり
夕まぐれ森川ぞほりとあるみせに
　わかき學士のおもちや買ふあり
一夜にてきえはきゆとも花に宿る
　つゆの命のさちおほきかな
あさ風にちりわかれたる花と露と
　いづれの世にかあはんとすらん

わかこまに一鞭あてゝはせくれば
　ひづめにみだる野菊しらぎく
秋の野をながれ〳〵てゆく水の
　末は尾花のうちに入りにけり
山でらのあるじの法師おとづれて
　ゆふべにかへるもみぢ葉の道
小雨ふりわたり靜けきわきの夜に
　むかしの友とむかし語りあふ
たづねつゝ芋畑菜畑すぎゆけば
　菊のはなさく家につきにけり
しづかなる明方の空に木犀の
　はなさきにほひ秋のあめふる

そらだのめ

峰ゆり子

ちひさき下駄の音かたことゝ、けたゝましう駈け上りざま、後ろの小戸引きあくるは、七つになれる兄の方なり。菓子はあらずや好き犬が來れるを早く〳〵といふ。與ふるやがて玄關に走りゆきぬ。犬の聲子らのさゞめきをかしげなるに、立ち出でて見れば、さまで大きからぬ黑班の白毛多なる洋犬を中に、隣の子のたれかれ、書生あまた立ち圍み居り。首輪もなし、何處のぞと問ふに、此頃まで家にゐたりし車夫の喜助とて本郷のかたに住へるが、只今まゐりつるとて敷臺の片すみよりゐやをなす。いましが伴なひこしにや、主あるにやと問へば、喜助は目をそなたへ向けつゝ、無きにもさふらはず

とて、犬の上を語りいでぬ。

こはもと醫科大學にて解剖の用に供せらるべきなりしを、一日某の學士の君が口笛によびならされ、車のあとに從ひゆきしが始めにて、あはれなる屠所の群よりのがれ出でつ、學士の車と共にあるべきものゝ數に入りぬ。さては肉も肥え毛並も艶やかになりまさりて、皮のいぼ輪に彫まれしフリッツの名は、小使の翁より病院の白衣の君にまで知られて、フリッツよ〳〵と呼びならされぬ。彼れが得意の時代はかくて一年二年と續きけるが、三年の春と云ふに、ゆくりなくも學士の君は留學の公命を帶びて、遠きわたりにかしまだちし給ひぬ。

まだ身ひとつのさるべきよすがもおはせざりければ、家はそれなりに住む人かはりて、よるべなき哀はフリッツが上にのみ殘れり。有

りし年頃乘りならし給ひける手車の置所なりける車宿の軒下にいつも其姿見ゆるやうなりて、年々に入りかはる赤門のくつのあと、フリッツが見しれるは、やう〳〵に埋もれはてし今までも、そこに飼はれつ。日頃はおのれに馴れてかく跡を追ひ來侍るなりと語り出でし喜助が物がたりに、怪しく涙さしぐまるゝもわりなき業なり。猶聞かまほしき心地せしかど、あまりに問はんもと思ひて、あらぬ方うちながめ、聯想の空畫をくりかへしぬ。喜助は相手をかへて更に何をか語り居たりき。

そのかみ某の學士の君といへば、醫科大學中俊逸のざえと聞え、いと若くして專門の課程を終り、由來斯道の窮理になみ〳〵ならずいそしみまして、廿年あまり七つといへる秋、早く博士の學位を許されし給ひぬ。六とせが程も前なりければ、さるとなへをゆるされし學

者たち、今のやうには多からざりける。殊に同じ道に志す人々の、心よりたゝへざるはなかりしとぞ。思へば其頃なりけん、家の書生たち、大いなる寫眞にあまた人のうつれるを見てありしに、おのれものぞき見ける、そは博士が留學の途にのぼり給はんの當時、かねて講義を擔任しておはしたる某學舎の生徒が、師の爲の送別會にもしたるにて、あまりに出席者多かりしかば、二枚に撮りわけけるとか。今までにかくばかり人望もち給へる講師は例なかりしと、畫のたゞ中をさして、目鏡をかけ、ゑみまけてゐ給へるがそれなり、まみ口鬚あざ〳〵と、まのあたり見るめはこれにもまされりなどいひあへりし。名高き君ときゝては、知らぬものだに目をとゞむべきなり。ましてかく人々に惜まれ給ふゑるしなりけむ。

獨乙におはして、ほどもあらず、うたてき病魔の冷かなる手は君を

誘ひて、ボメルワルドの頂といはず、ラインの水底ともいはで、幽冥の境はるかに消え去りけるこそ、酷しといはんもさらなりや。博士が肖像をたゝめる古き雜誌の、塵にうもれしけふ此頃、さりとは永きおあづけの待つにかひなしとも知らでや、喜助が單衣の裾にまつはりて、門を出で行くフリッツが老たるうしろ影、限なくあはれなり。あはれかくていつまでか世にあるらむ。

雨もよひ

板塀高くたてる新道の角に井戸ありて、その駒よせに屈まり居る男あり。うす曇りの空を寒げにしはぶきて、短き煙管に今はたきたる足もとの吸空（すひから）を引よせ、頻にあとの火を續けんとす。何處よりか來けん、顏よからぬ女の低きまるわげふすぶりて、袷の裾の座るくせ

つきたるが、下駄より上につり上がれり。近わたりの家のはしたにもや。たすきを珠數輪にまさぐりつゝ、そが前に立よりざま、何にかあらん低き聲にいふ。男は見るまに煙管もつ方の臂をもたげて、白眼（にら）まへし面にはいたく酒氣を帶びたりき。やがて息まき立上らんとするを、女はさもあやふげなるけはひに、あたりの人に見られまうく、手もて宥めながら、口とにいひとくやうなり。いかなるまさな事のいで來なむ、誰そ來れかしと念じつゝ、我は行過ぎぬ。

別れし良人の性あしく、いづこまでもつきまとひて、物ねだりの果はねたみがましきことなどいふ類にやあらん。浪花江のよしあしは知らぬものから、やるせなき女心おもひやられて。

軒づたひ

横に曲らんとする出合がしら、男女のつれだちたるが、糸屋の店わかりにさとあらはれぬ。人のけはひに振離したる袂の、いづれもはでやかなる單衣なりけり。男はやせがたの小造りにて、模樣リボン結びたる帽子前さまに傾けつ。卷煙草くゆらす手に珠ありて、いみじうきらめきぬ。

女は眞向なれば、ゆくりなく目を見合せたり。そはいつも此わたりにて出であふ娘なれど、名も知らず家も知らず。形はいと美くし。衣紋をいたく脊にぬぎかけ、胸のあたりなまめかしうくつろげたる、いづれせばき間口ののれんの蔭に生したてられし身なるべし、かくては往かひしげきちまたに目をそばだてられなむ。口さがなきを常

の髪結などに見られなば、あすのおとくいに筋立の手をやめて、花をそへ枝をさしたるうはさのはては、やがて世間といふものゝとりざたとやなりなむかし。

手ぐるま

友と二人そゞろありきしてもどり來つれば、わが家の門に車一臺燈も消たで待ち居ける、誰そやと思ひつゝ、まづ先へ入り給へと友にいへば、ふと立とまりて動かず。御妨にもなるべし。あす又まゐりなんとてゆきかゝるに、何かあらむ、暫し休らひ給はずやといへど、きかずして歸りぬ。つかの間に變りし友が振舞をいぶかしみつゝ家に入りて見れば、あな、うはさに影のさしけるよ。客人はさる若き學士の君なり。友がかねての理想の實になりし喜ばしさ。いま道すがら此度いよ〳〵定まりつる印のリングなりとて、向ひ鶴彫りつけたるをわれに示しける、其リングのあるじこそ此君なれば、われさへ胸とゞろく心地す。襖越しにきけば、あれよけん、これわしからむなど、もはや雨夜の品定めにはあらで、母君に衣の相談し給ふなりけり。當日は午の日午の刻などいひて、笑ふ聲も打まじりつゝ。

さばしゝて歸り給ふといふに、我も送りいでぬ。玄關の敷臺近く引よせられし楫を押へて、車夫のかざしたるてうちんよ。さきのほど門外に有しやこれ。げに心づきて見れば向ひ鶴の紋處、かの友が目にはいかに速に映じたりけん。

あさつゆ

塵のかゝらぬ綠の色を詠めばやと、朝とく庭におりたつに、袂を掃

ふ風いとすが〳〵し。僅十歩の石の上、ゆくも歸るもはいなければ、しばしやすらはんとて、腰うちかけし竹椽の向ひ、柘榴の枝の繁みがもとに、ふと心づきぬ。

こはいかに、よべ一夜釣り忘れしまゝの小鳥籠は拔がらなりける。あなやと驚き近よりて見れば、あはれ瞼とぢたる銀兜は、止木より轉び落ちて居たり。いひしらずくやしくて手に取るに、嘴かたく塞ぎて、あがきに亂れし細き脛は、動かんともなさゞりけり。

さるは友なる人の海のあなたに旅すとて、さいつ年四羽のカナリヤを我許へ預けしなりけり。二つがひとも過し頃玉子を生みけるが、片つ方のはおのれと喰ひ盡しぬ。引かへて今一つの雌雄は、黄金笠とよべる妻鳥の、たえず巣にふして玉子を暖め、雄の銀兜まめやかに食を運び水を含ませ、日ねもすさゝやきて、小さき籠の内もホーム

の樂しさは、かくてこそと、なまじひに人は耻づべく覺えたりき。

我も好むとにはあらねど、其愛らしき樣の捨てがたく、召し使ふ童もいたくらうたがりて、朝夕の餌やり水飼ひ怠らず、近き草原をあさりてはこべを摘み、籠のうち常に清めて、たやすからぬ客人だちてもてあつかひにけり。さる程に過し朝なりき。童が聲して、そゝや誰が業ならん。籠を仆して鳥をかすめ去りぬ。否喰ひたるなり。血あえてあるを、家の猫はよべ倉にとぢこめ置けるに、こは必ずかの赤なめり。憎き奴かな。我目に觸れなばせんすべありと怒りちらしぬ。さは猫がわざとはえるけれど、それとも限らざるべし。身におぼえなき罪なりせば哀なるべきに。とまれかくまれ錠をゆるべおきけるはいましならずや。かくいはれて、げにおのが怠に侍りきと、惜む〳〵主なき籠を取片づけつゝ、さはれ此つがひよ、我とうみの

玉子を喰ひたる方なれば、さまであたらしとも覺えずと、なほ獨ごちゐける、人やりならぬ過を自ら慰めかねてやと、をかしかりき。

それより程なく、かの美しき雌雄の中らひも久しからで、妻のこがね笠うせぬ。去月の末よりは、殘りにし此一羽の首を傾けて囀るがいとはしく、樣々に勞はりつゝ、昨日は暑き日なりければ、堪へがたかるべしと思ひて、さてしも柘榴の枝につりたるなりけり。さし入る夕日をまばゆげに鞠の如くふくだみ居たりしかど、音づれましゝ客人と語らひ居けるわれは、只いぶかしと打視やりつるのみ。それなりに紛れぬ。今にして思へば、かゝるべうてや、例のうるはしき聲はなくて、此方をのみひたむきに詠め居たりけん。あはれ何をいはまく思ふにまかせざりけん。直ちにとり入れてやりたらんには、かくもならざらましを。心づかぬ事してけるよ。ゆるしね。それも

汝が失せなん命なめりと、口ごもりに念佛となへつゝ、物置く所より鍬を求め來り、さて何處に埋むべきと其所らうち見やる。花さく草の根かたなりせば、おのづからなる手向にもやと撰びつるは、心あひの友より贈られしベゴニヤがもとなり。こゝにこそと土を穿つ。雨ふりなどしてあらはならざるべく、力をこめて深くなし、いざとて羽を撫で尾を正し、緑の一葉をまとはせてとこしへの塒の床に横たへつ。永き眠の安かれと、土の衿を覆ふ時、白き花の頂搖れて、露一つ玉の如くこぼれて消えぬ。

誠や汝が妙なる聲音もて、春の朝のほがらかに、秋の夕べのしめやかに、自然の歌を謠ふを聞けば、誰か想の澄まざらん。闇にさすらふる心さへ知らず〳〵あくがれて、ミューズの光にまみゆる心地す。人と生れし身は幸なりとも、徒になながらへば、五十年の齡も、此鳥

が三春の命に劣りぬべし。日影を隔つてふ玉の臺も、人の血しほに塗りけんよ。佛の御目には此竹籠ぞ貴くも見そなはすらん。げに天地の眞の道はそれなれや。歌ふ爲に生き、歌ふ爲に啄み、うたふ爲に眠れるよ。

いざや骸（むくろ）をぬぎすてゝ
はがひにかふる花の袖
玉の聲音はしづまりて
萼（うてな）がうへにかをるらむ

たゞあるじなりけるかの友の、遠き旅より歸り來て、かくと知らばいかばかりかこつべき。翅なくして始めて自由なる汝は、雲にのり風に和して千里の海も越え得べし。爰のあしたはかしこの夜半と聞きつるに、夢に入りても告げよかし。

鍬を放ちて空を仰げば、いつしかさし出し朝づく日綠の梢に囀ぎて、ゆめか現か曉の露ありと見てしが、はや影もとゞめざりけり。

さゆり葉

つくし路を君が船路ときくからに
知らぬところも夢にみしかな
すぎし世のつみの報をいつまでか
いきて此世にうけんとすらん
只ひとり座禪堂裡に寂として
ふりつむ雪のおとをきくかな
運命のつよきかひなよ我をとりて
あはれいづこに捨てんとすらん

まなびやの昔のまゝの文づくゑ
　わがされがきのわとも殘れり
黑かねの窓もくさりもくちはてゝ
　ひとやてふものなき世ともがな
白き赤きうちまじりけりさゞれ石
　同じながれのおなじ瀨にして
月の夜をわれよりさきにゆく人の
　霧にこもれるはなしごゑかな
母ぎみが柩のまへのともし火に
　ひとり油をそゝぐ夜はかな
つれびきは裏町あたりたえ〴〵に
　よさむの風にきえてゆくかな

筑波詣

大橋文之

朝まだき相馬町を出で立つ。明日は望の夜なれば、牛久の沼に舟遊せん。必かへり來ませと友の言ひおこせつれば、立ち別れいなばの山のと書きて返しやりぬ。宿の嫗はむすび飯をこしらへ、ほうろくに載せていさゝか焦したるを反古に包みて、山路は晝食すべき家なければ、これ持たせ給へ。箱などに入れなば却りて便あしかりん。其袋にをさめてと打ほゝゑめば、

ゆきかへる山路に恙なかるべく
　おもふ心をむすびこめつや

人々わが首にかけたる袋を見て、其さまの怪しげなると、十里にあ

まる山坂をゆき復るに、船車にてもこそあれ、徒歩するに旅のよそひならぬを笑ひぬ。宿の主人はしば〳〵都にものしつる事あれば、都の人は何處へ行くもかくなんなどいひはぐすもをかし。

消えぬまの命なりけりうた袋
野くれ山くれ露にふす身の

都にては信玄袋とぞいふめる。我は歌袋と名づけぬ。今日は晝食ををさめたれば、命の袋なりけりと狂がりつゝ走り出づ。町はづれに鎮守の社あり。

神さびし森の梢にあかはしの
光うすれてからす鳴き渡る

二人三人の農夫が、鋤鍬など打かたげて語らひながら行く。あはれ過ぎにし月よ。われ此里の友の許を音づれしに、其あくる日よりな

が雨うちつゞきて、果は川の水沼の波溢れて、田畠を浸し堤を崩すやうになりにたれば、遠近に早鐘うち鳴らして、男といふ男を驅り集めおのも〳〵有らん限りの力を合せて、夜も寢ず晝も休まず防ぎに防ぎつれど、遂に其かひなくて、見渡す十里の田畠は悉く海と爲りにけりな。農夫らの悲歎おもひやるにいとゞ心寒し。町を離れてよりはや幾丁ばかりにかなりぬらん。左の方を眺むれば牛久の沼の水はる〳〵と湛へ、朝霧ふかくこめて、水鳥の聲も物戀しらに聞ゆ。

大水に夜床のさまやかはりけん
つまにはぐれし水鳥のこゑ

常ならばいかばかりをかしからましを。道の右手を見渡せば、見るかげもなきまでに田の面ぞ荒れはてたる。

いたづらに實のりもやらで折れふせる
いなほのうへに秋かぜぞふく
水の中にいくかひたりて枯れし稲の
その穂ながらにもえいでにけり

四十にもなりなんと見ゆる女あり。つゞれの袖をひたり、乳兒を背負ひて、かひなき稲を一穂〳〵に拾ひ集むる、その心思ひやられて。

ひさのこる水かきわけて賤の女が
かれたる稲をこゝかしこ拾ふ
背の上にむつがる乳兒をゆすりつゝ
すかすよ母もなみだながらに

鳴子の縄いたづらにかゝりて、野守の庵のかげだにもなし。

秋の田は見渡すかぎり荒れはてゝ
すゞめもなかず引板もきこえず

ゆき〳〵て牛久の里につきぬ。誰か名づけゝん、かしく坂と云へる艶にきこゆ。上なる高樓には、手弱女二人三人よりゐて朝のけはひす。一筋町なれど兩側に柳と櫻とをうゑ渡したるぞおもしろき。

いにしへの柳櫻をこきまぜし
都のにしき鄙に見るかな

春ならばとこそ思ひしか。田久といふ所より、道をかへて山路をたどる。千草百草さきみだれて、思ふにましたる景色なり。

秋の花のくさ〴〵にほふ此野らを
都にちかくうつしてしがな

打ち吟じつゝゆく程に、別れぬべき道も忘れてけり。茅が屋の門邊

に翁たてり。こと丶へば別路は五六町ばかりもあとなり。今は此家の前をよぎりて、かしこに出で給へと指ざしぬ。

八千草のいづれ招かぬ方はあらじ
　ゆきこそまよへ秋のやまみち

教にまかせてゆけば、道はあるかなきかに埋もれて、草の露深し。

さきを丶る其花ごとに色ごとに
　秋のみ神はやどりけらしも

やう〳〵にしてやゝ廣き路に出づ。是より高見が原となんいふめる こ丶は過ぎにし年、現つ神わが大君のいくさの道忘れじと、もゝの軍人をつどへて軍のならはしせさせ給ひし所なりとぞ。今はたれ訪ふ人影もなく、只み山に通ふ山がつの荒々しくも花ふみしだきて往來するのみ。

秋されば花の錦をおりしきて
　みゆきまつらん野べの八千くさ

遠近に小鳥なく。

秋の神の飼はせる鳥か百草の
　花のあたりにうちむれて鳴く

こゝろざす筑波の山はるかに見ゆ。行くさきはまだ遠けれど、何となく嬉し。

朝霧はうすくかゝりて筑波山
　すゝきが中に見えそめにけり

この原のつゞきを稲荷が原と云ふ。こゝにも草の花あまたさければ、おのづから足のはこびにぶし。

草といふ草を盡してさきにけり

鹿のねはしき野べにもあるかな

古昔こゝに狩して、年ふる雌狐をうたんとしける者のありしに、所の男この狐をあはれび助けて見のがしにたり。夜になりて狐は美しき女となりて男の許にゆき、妻となりて共に田畠のわざなどいそしみ、子など數多まうけたりとぞ云ひ傳ふる。

野狐の契を人にむすびけん
いなりが原はたゞ秋のかぜ

矢多部の里もすぎて、苅間といふ邑に入る。此あたりには山畠も少し交りて、鍬もてる人も行き通ふ。若き女の草籠を背にして立てるも見ゆ。花さける草はよきて苅らなんと、思ひつゝゆく。正午の頃となりければ、晝食すべき家やあると見渡すに、さるべき所もなし。人に問へば、猶一里あまりも行かではといふに、よし〳〵旅の草枕

野にふし山にいねたる昔もありけん。是も今の開けたる世には得がたき不自由の賜と獨うちゑみつゝ、道のかたへなる松林の中にわけ入りて、落葉をかきよせて莚と爲し、やをら歌袋を取り出でて、道々に摘み來し言の葉ぐさなど書きつけ、さて例の握飯を取り出すに、遙に見ゆる筑波の峯と似通ひたるもをかしく、水を佗ぶる折から、中より梅干一つあらはれ出でてはからず咽をうるほしたるは、是ぞ誠にみなの川ともいふべからんなど、獨考ふれば考ふるほど可笑しくて、斯かる折には同じ道の友のあらましかばとも思ひけりな。

山川のかはる景色はありといへど
旅はひとりぞかひなかりける

此あたりの人にやあらん、裸馬にまたがりて、前なる道をゆくら〳〵歩み來て、あとさき見廻しつゝ、傍なる稻の穗を馬に喰はす。おのれ

のこゝに居たるが心づかざりけん。稍しばしゝてふと此方を見るや、一散に鞭あてゝ走りにげたり。是より一の矢といふ所をこゝろざすなり。道の程はと問へば一里あまりと答ふるに、さては心やすしと足に任せてゆくに、暫くありて問へば、此度は二里にもあまりなんといふ。腹だたしくも又心細しや。次第〳〵に廣き野となりて、家居もあらず、人の通ふもいと稀なり。

さびしさにたをりてゆかん女郎花
ともなき野べの友とさだめて

道やゝ細くなりぬ。

まてしばし怪しきつの此野べに
我をたぶらかさばわれいかゞせむ

道は頓に無くなりぬ。

さもこそは怪しきつのわざすめれ
つくばの神よわれをたすけたまへ

さるにても來し方は只一筋道なりしかば、迷ふべくもあらざりしをと見やるに、行先は二つに別れたるやうに見ゆれど、是とて人の通ふべき道とは見えず。只わづかに草のふしたる跡あるのみ。

物いはぬ花としきけば女郎花
かせのなびきに道ををしへよ

右せんか左せんか、あなたは深き松林と見ゆれば、一たび踏み違へて入らんには又せんすべもなかるべし。さらば里人を待ちて問はんか。まてど〳〵人影の更になきを如何にかせん。

萩すゝき右に左にまねくなり
いづれの方にたよりゆかまし

桔梗の花の紫ふかく染め出でて、一叢しげりあひたるゆかしさ、何心なく立ちよりて摘まんとすれば、傍に石碑うちまろびて、苔に泥に埋もれたるが有けり。さてはとてかき起しつゝ見れば、まさしくちぶりの神なりけり。木の枝を折り來て、汚れたる土を削るに、嬉しや左一の矢道とぞかすかには讀まれける。

亂れさく秋の八千草それながら
　ちぶりの神に花たてまつる

心も勇み足も進みて、つゝに松林の中にわけ入りぬ。日の光いと暗くて何となう心さびし。

名も知らぬ鳥がねきゝて松蔭の
　をぐらき山路われひとりゆく

一里はすぎぬらんと思へど、まだ松原を出でず。

ゆけど〳〵老木松原小松原
　いづこなるらんいちのやの里

林はいよ〳〵深くなる心地す。

杣人のあとだにたえし山中の
　をぐらき道をいたち横ぎる

茸あまた朽ちたり。

秋くれど狩る人もなくて徒に
　みやまの木の子くちにくちたり

や。遙に人の聲すめり。

道もなき此山奥にたどりきて
　こひしや人の聲の聞ゆる

と見るに、遙あなたをすぐるものあり。呼びとめて聞くに、彼の森

こそ一の矢の里なれと指ざす。走るやうにして、茶うる店に立ち寄りてしばし足を休めぬ。是より大曾根といふ所を過ぐるに、筑波山はや目の前に横たはりぬれど、まだ三里がほどもありとか。白雲の晴れては又かゝるさま、繪も及ばじ。坂あり。下るにつれてやゝ遠く見えゆくぞいぶかしき。河あり。櫻川と呼ぶ。常陸の國にありときゝしは此川にこそあらめ。此わたりに櫻の木ありやと里人にとふに、只しらずとなんいふ。

つれもなき賤の男の子よ古へは
ありきとだにも語りつげなん

時うつり世去りぬれば、名高き名所もつひに消えうせぬめり。はかなきはひとり人の身の上のみかは。

秋の水たゞさら〳〵と流れけり

昔のはなのかげもやどさで

橋を渡れば、川にそひて長き堤あり、年は十五六にもなりけん、一人の若者が馬に荷をかつけて靜に歩みゆく。追ひつきてくさ〴〵の話するに、彼方もいと興ありげに打語らふ。見そなはせ旅人よ。むかひに見ゆるは北條といふ里になん。いと近く見ゆるものから、彼所まではまだ一里あまりもありぬべし。此わたりにはこゝを北條の長道路とぞいひ傳ふるとて、人もなげに聲高く謠ふ。

片山かげの夕まぐれ　里は見ゆれど道遠し
まつらん人もある物を　急げわが駒いそげ駒

いかに男子よ。この川を櫻川と云へるは、もし櫻にてもありけんや。されば旅人。きゝ給へ。こゝを去ること十餘里の水上にあたりて、一むらの櫻あり。皆老木にして、大なるは人の抱へ得べくもあらず。

枝さび幹苔むしたり。そが木蔭を流れくればぞ櫻川とは呼ぶなる。あな嬉しや。さては古への名所もありけるよ。

其昔花の雫の流れそめて
さくら川とはなりにけらしも

北條といへるは、鄙にめづらしきまで盛なる所にて、蠶の業も進みつらん、數多の少女が糸くる音す。

たをやめがかふこの糸をくり返し
うたふもあはれ志のびねにして

機おる家もありけり。

秋風の身にしむ頃を志づはたの
梭のおと聞ゆこゝにかしこに

我もうたひ、馬子もうたひてゆく程に、はや山近くなりにけり。

馬子はこれより別るとて、右なる細き道に馬を進めぬ。山に登り給はゞかゝる宿にとまり給へなど、いとまめやかなり。うつせみの世は情こそ嬉しけれ。二足三足ゆきたる頃、彼の行く方を見やれば、彼方もかへりみ、十足二十足また見やれば、彼方にもまた我を呼ぶ。

世の中はいづれか旅にあらざらん
物なつかしきあきのゆふぐれ

麓より望めば、筑波町は山の半腹にありて、頂は雲に隱れつ。

神たちのおりて遊ぶてふ白雲は
今こそかゝれをつくはの山

やう〳〵にして馬子の教へし宿につきぬ。江戸屋と云へるもなつかし。

明日はつとめて山に登らばやと、早くふしどに入りぬ。夜なか頃になりてはら〳〵と雨のふりくる音するに、驚きて窓の戸をおしあくれば、こは雨にはあらで、風の梢をわたる聲、水の岩間を流るゝ音、はた露の軒端に滴だるなりけり。天青くすみて明月高く懸り、折々に糸竹のしらべさへ聞ゆなるは、誰が子ぞ此月にうかれてまだえいねでかあるらん。

とこしへに鎮りいます天地の
かみのこゝろとすめる月かな

我里をのぞめば遠し月かげを
あふげば近しつきの都かも

白玉のまろび〳〵て岩にふり
鳴る音さやかにみづぞ流るゝ

夢さめし旅寢の床は靜にて
まどに月ありのきにあめあり

人の世にしらぶる笛か月の宮に
かきなす琴か聲のすみわたる

夜あけぬれば、案内者を雇ひて山にのぼる。

山伏の貝の音さこゆ八重雲の
おりたつ峯のいたゞきにして

みなの川水清し。

みなの川水上いづこ見わぐれば
高天が原に雲たちわたる

山上には八百萬神を安置し奉り、かつ古代の名跡を摸するもの多し。今は悉く記さず。

こし方をかへり見すれば白雲の
したになりゆく四方のやま〳〵
そゝり立つ巖の上にうづくまりて
おもむろに見る關の八州
神かけて如何なる人に戀すとか
こゝろこめても結びおきけん
白雲はうちふる袖にかゝるなり
神代おぼゆる天のうきはし

神の出でて遊びますといふ御幸が原に至りては都の空を眺むべく、關東一目と稱ふる岩石の上に立ちては足もすくむべくなん。緣を結ぶといふ躑躅の枝には、鄙の少女が結びつけし白紙もさはに、天の浮橋を渡りては、飄々として我身の何所に立てるかを忘れぬ。斯くて男峯女峯二柱を始め、八百萬の神々を拜み巡りて、宿に歸りしは午後一時にてぞありける。

約せし事あれば、せん方なくて此日これより相馬へは歸りぬ。道々よみける歌ども二つ三つ。

千ぐさ吹く秋の野末を歸り來れば
おくりむかふる虫のこゑ〳〵
妹は鋤脊は鍬もちてかへりゆく
秋の野末はやもくれにけり
くれてゆく千草の花の露の上に
こよひの月はいまいでんとす

松かげ集

井關照子

折にふれて

よわき子をもちてぞ思ふわが爲に
　かくやは親もこゝろいためし
かしらをば冷させながらねたる子の
　やせしよこがほ見れば悲しも
泣かれては幾度ふでをとゞめけん
　たゞいさゝかの文をかくにも
ほめらるゝ我子よしとにあらねども
　おやのこゝろは嬉しかりけり
ちる花のひとつ〳〵に手をさへて

あたら地にはふれじとぞ思ふ
菜種さくはたの中みち右に折れて
　ゆく子のあとをおふ蝴蝶かな
夕づく夜こゝろのなびくやなぎ原
　なびくかたにと風もふくらむ
姫ぎみの花見のくるまゆきすぎて
　虚無僧ひとりが尺八ふて來る垣
乞ひ申すうちつけながら唯ひと枝
　きみが垣根の山ぶきのはな
人は目もとめじを野路のはこべ草
　さくべき時にはなさきにけり
わが山のいはのかけみち春ふけて

はな無き谷にあさかせぞふく
舟よせて誰が折りけんきのふ見し
いそ山かげのなでしこのはな
老僧のいのりはやみて天のうみ
みなぎりおつる夕だちのあめ
相模の海ゆふしほ高くみちくなり
いまかふくらん秋のはつかせ
天の川かはなみいかにさわぐらん
くもゐの宮のあきのはつかせ
かくれ笠きつゝやゆかんあるかひの
なき身まばゆし秋の夜のつき
神のます天のはらよりふるゆきは

おちても地のひかりなりけり
吹かじとてとまる木葉もあらざらん
はらはゞはらへ木がらしの風
まゐはなる夜神樂さむし水とりの
加茂の河原のふゆの夜のつき
星と呼ぶみ空の國に人すまば
またこの世をもかくや見るらん
糸くると向ふおうながやせ見えて
ほそくなりゆくともし火の影
わたつみの逆まく波も手にとれば
しづくはおなじ花のうへの露
熱田の宮に詣でて

神さびし杉のしたみちゆくほどは
　神とともなるこゝちこそすれ
　岡山にて
にぎはしき大路ながらもおのづから
　ねなかびたるや田舍なるらむ
　豐太閤
天の下わが手ひとつにぎりても
　みちぬは人のねかびなりけん

かしこき御かげ

橘糸重子

行啓ちかくなるまゝに、學校の内外さま〴〵しつらひなしたり。わが音樂學校ありて、始めてのいでましなり。いかで其日の空よく晴れよ。風もなぎよなど祈る。今日ともなりにけり。まだきおきいでぬれば、雨の音しめやかなり。あやにくの天氣よ、さらばちまたの塵しづむるほどに降りて、とく晴れよなど思ひつゝゆく。忍ぶが岡は花の梢すこし盛すぎたれど、猶雨にえんなる色をそへたり。年頃なれし所なれど、今日は又更になつかしき心地して、そこゝ見ありく。奏樂堂の中ほどに、屏風二双ひきめぐらして、御坐しつらひたり。其もとに赤き白きいろ〳〵の花多く飾りたるが、今日の

嬉しさをやさゝやく、吹き入る風にゆらめきあへり。やがて御前に奏せらるべきピャノよキオリンよ、心あらばおのが胸にみちたる喜びをうちいでて、嬉しき音をも打そへよ。

いでましは二時の頃なり。御車はどもなうといふに、人々御むかへす。門の櫻かせにちるは、嬉しさに舞ふらんと見えて、落ちては庭に玉しきたるやうなり。いでましの大みよそひいと輕きにも、重きみいつのほどいよ〳〵仰がれてたふとし。供奉の人々のうすきこきこゝろ〳〵の衣の色、みる目もいとあやなり。花の香かをりみちて白き窓かけおほひし室にしばしいこはせ給ふ。

かしこきみかげ今こそ迎ふれの唱歌にて、御坐にいでさせ給ひぬ。きこしめすべき樂は九番あり。其中の一つに我も數へられたる、世に生れいでしかひはありけりと思ふ物から、あまりに拙きわざこそ

いとも苦しけれ。いかなりけん。いと御前けぢかきに、あやなくも闇路にまどふ心地のみしたるよ。つぎ〳〵奏しもてゆくに。そともは雨しめやかに、室のうちは花の香しめりて、ソナタ、コンセルトなどの大いなるハルモニー波だちたり。そびらに羽おへる小き神そこゝに舞ふらんと覺えて、心のうちいひしらずのどやかになりぬ。げに心に憂へあらん人も、只今はまぎれぬべき御前のさまなり。還御の頃、雨は晴れぬ。御みおくりしはて、人々うれしさ包みあへず、御座のあたり、御便殿のあたり、そゞろにさゞめきありく間を、しばし靜なる室に入りて、ふとところ放たぬなき母の寫眞とりいでつ。あはれ今日のこの嬉しさを、まのあたりわかたんすべなきこそ悲しけれと、つく〴〵と思ひいりたる窓のもとの樅の梢、風にゆらめきて露はら〳〵とこぼれぬ。

御座のあたりに飾りしにほひよき花一束、けふの紀念にとこひ得つ。此花は限あればやがて色あせぬべし。されど心々にあふれし今日の嬉しさよ。いつの世にか消ゆべきなど思ふほど、あたりほのくらくなりぬ。夕べの歌うたひつれて近き森に急ぐ鳥の聲も、樂しげにきゝなされて家路に向ひぬ。（明治三十二年四月廿一日）

花つみ

（輕井澤日記の一節）

あすは歸りなんとする夕べ、都なる幼き姪のつとにせんと花つみにゆく。昨日見おきし色よき花おほく咲き亂れたる所にきぬ。見渡せばはてなき廣野のはては、五百重山たちかさなりて、うしろに見えし淺間はいたゞき灰色の雲に隱れ、麓のみぞ少し見ゆる。いづこにか水の音なひ幽かに響きて、吹くとしもなき風にはら〳〵とちるは、

尾花が袖につゝみあへぬ何の涙ぞ。庭の敎よそにすとは見れど、色よく咲し撫子いと哀なり。われもかうはいとさびし。此夕暮をいかにせましと、小さき花の一ところにあつまれるやうなり。女郎花、同じ女のたぐひと思ふに限なくあはれ深し。草隱れに名もなき小さき花こそ悲しけれ。いかなる宿世なりけんと、其さゝやかなる限をあつめぬ。かなたに黃なるさ百合一つ見出したる、いと嬉し。此花束の女王の君にせんと近よれば、しげみをぬひて流れゆく水のほとりに今一つさけり。あはれゆく水と何をか語る。さ百合は、此さびしきくれにしばしとゞまり給へといへど、水はいたく思ひせまりて、いづこまでもと急ぎてゆく。たゞずみをる程に、うすきかげ水にくだけて細き夕月光そひぬ。ま晝は日の光におぢてかたねぶりせる月見草、今こそとよそほひいでつ。心ゆく此けしきよ。我心をいづこまでと

かさそふ。いざさらば此花野よ。命あらば又こん年。いざさらば月よ。あすよりは塵多く處せき都のすまひにて。

古きピアノ

人げなき奏樂堂のうちは、やう〳〵ほのくらく、夕暮の色みち渡りぬ。今ひきやめつるソナタの波、いまだ耳にたゞよふ心地して、しばしたゝんともせぬわが傍に、たそや立てるかげあり。色あせたる青き衣の破れたるをまとひて、やせにやせし面わ、此世のものとしも覺えぬに、白き髪亂れかゝれるが、しぼみたる花束を手にしつゝ歩みよりて、いかに我を何とか見給ふ、我はもと外國に生れいでしを、遠く此國にうつされて、幾年か經にけん。思へば數多き我友のあるは大君のうたげのむしろにさぶらひ、あるは其名世にとゞろく

一世の樂人の朝夕の友と爲り、あるは廣き世にかへりみるものだになきみなし子のなぐさめ人となれるなど、樣々なる中に、われはこゝにありて、人々の心のまゝに嬉しきふしをもうきふしをも語らひ、あるは何の會くれの會などいふ折は、新しき天才を幾度か世にひきあはせけん。さる程に今はやう〳〵おいくちて心ばかりは昔にかはらねど、語らはん聲もうらがれはてゝは、したしみし人も疎くなりゆくこそはかなけれ。去年の春新らしきものゝこゝにすゑられしより、今はたかへり見る人だになく、會などの折々は片隅に隱されつゝ、いたづらに昔の春をこふるのみにて、過にし我心づくしはとふ人もなし。されどみづからだに淺ましと思ふほどにかくうらぶれはてゝは、新らしきにうつる人心をあながちに恨みもはてず。さるを今猶むかし忘れずかたらひ人となし給ふ事の嬉しさに、かくは

おどろかしまつるなりと、といきと共に語らふ樣の何となく心にしみて、誰としも覺えぬ君かな、誰にかますらんといふ程に、さびしき笑をもらしつゝ、かたへのピアノの中にかげは消えぬ。

故翁追悼會記

師翁うせ給ひて早く十とせになりぬ。六月廿五日、竹柏園の今のあるじの君、其み祭つかうまつり給はんとす。つとめて起出ぬれば、雲厚く重なりて今か降出でんとする樣なり。いかで今日一日はと思ひつゝ谷中なる御墓に詣づ。御名ゑりたる石をめぐりて幾もとの榊年ふりたり。石の鳥居くろかねの垣は、さきには木にてありしを、たび新らしうしつらひ給へるなり。少し離れてたちたる五重の塔いたゞき霧に隱れて、杉の下露いと繁し。そこゝには落葉かき集

めてやき捨たる跡あり。あはれ此煙細く白く立ちのぼる末にしも、宵々にすむらん月を、いかにか眺めますらん。もてこし花さゝげつゝ御前にぬかづけば、いづこよりか白き蝶一つまひ出でたり。苦の下に靜に眠りますあたりよりやぬけいでし。いかなる夢か見ます。語れかしとはかなくも其行方うちまもられぬ。こゝの御祭は九時の頃よりなれど、さはる事あれば其由つげまつりて歸りぬ。

晝前よりは少し風さへ添ひて、雨まことにこぼれ出たり。今日のまとゐに天も同じ思をやよする。いでさはいかばかりなりともふれかし君を忍ぶ人々の眞心、など雨風に妨げらるべきなど思ふ。晝すぎてより忍が岡の梅川樓に至りぬ。けふの會にあづかる人たち、早く來ゐ給ひて、こなたへ〳〵と樓上にあないし給へり。東久世伯與平伯をはじめ、學の道歌の道に名ある人々、何の舍の君何の會の君たち

うつし世にま見えしも、まみえまつらぬも、君を惜み君を忍ぶひとつ心に來集ひて、廣き廣間にあまりぬる程なり。さきつ年一年の御祭、五年の御祭ありし時にも、かくこそありしか。こはやがて翁の御德の深きによる事と、栁の木のもと朝夕に立ならす我等は、殊にいひしらず嬉し。さるにても若し世にまさば、今年は七十路にもあまり給ふなり。同じくは喜字の御祝けふのやうに賑はゝしくつかうまつらんものを。さらば其折にはかの柱により給ひて、いかに長閑に物語し給ふらんをと、あかず口惜く誰も思ふ。正面の床には玄めぬ引きめぐらして、清らなる白木の八足に御たまやをおきまつりたり其片へに昔の御姿、刀自の君のと並びいまして、何か語り給ふやうなり。さやかなる篳篥の音に、しめやかなる笙の調べ打そひて、我等が思を訴ふるやうなる時、開扉なし奉る。今ぞ御魂代と我等とは

隔てなくなりて親しくこゝを見そなはす。種々の物奉り、しぬび辭奏しなどして、あるじの君まづ玉串さゝげ給ふ。幼き君たちは何事ともえろしめさず、人に抱かれ給ひて同じくぬかづき給ふ。此小さき手して奉り給ふは、殊に嬉しと御心やとめ給ふらん。この世には祖父君とも呼びまさゞりしかど、生ひたち給はん末までも、いづこの空よりか守りまさんとゆかしう思ひやられて、そゞろに涙ぐまるゝぞ、人の見る目もいとやさしきや。

文臺の上にはつぶひたる人々のを始め、國々よりおこせられし懷紙短冊、うつ高く積み重ねたり。そを岡ぬしの披講あり。一つ〳〵何とかきこしめすらん。昌綱ぬしのは、

久方の天つみ空のいづこにか
けふのこの日を見そなはすらん

師の君のは、

天にいます吾父のみは聞しめさん

わがうたふ歌しらべひくゝとも

人々のもあはれなるがおほかれど、こゝにはもらしつ。石樽ぬしは竹柏會委員の惣代として、み前に出で、去年より新たに此會を起し月に日に榮えゆく事どもこまかに聞え給ふ。福羽子爵のは井原ぬし代りて讀み給ひぬ。今より四十年の昔、近江の湖の舟の上にて故翁にゆくりなく逢ひ給ひしより、はかなくなり給ひつるまでのまじはりの程、殘す方もなし。小出の君のは、かく賑はしきまとゐの嬉しきにつけても、いとゞなき君の忍ばるゝ由をのたまひぬ。依田の君のは不破ぬし代りて讀み上げらる。歌の道にいさをありしこと、勅撰集のあとをつぐべき由おほやけに書を上り給ひし事など、漢文に

てかき給へり。

某のぬしの手向けられし尺八は、音いとよくすみたり。かゝる折には絃なきがしめやかに似つかはしきなりとぞ。曲は月夜の鹿とかや折ふし雨も少し靜まりて、やさしき音廣間にみちたり。薩摩琶琵はいと悲壯なるを、曲は北白川宮臺灣入といふなり。竹の園生の御身をもて、遂にかの所に空しくなり給ふといふわたり、殊に靜になりぬ。

彼方の床には、翁の遺稿遺墨あまた並べたり。事につけ物にふれて御俤を思ひ出づる折多かれど、年月へぬればさしあたりたる其時のやうにはあらで、いとはいなきを、殘し給ひし水莖の跡は、さながら其世の事を目の前に語り給ふ御聲のやうなり。こゝに人たち多くつどひて、これはあれはなど指ざし、あるは手にとりなどしてゆか

しがる。此中に、今の師の君の生れ出で給ひし折に、そを我母に知らせ給ひし御文あり。其御喜びの程まのあたり見ゆる心地して、言の葉の道傳へんとはかなくも吾命さへ祈らるゝかな、とあるを見るにも、今の師の君のかく家の風ふき傳へませるを、いかに御心安う嬉しとおぼしめすらんなど語り合ふ。源氏物語土佐日記などの俚言解を物し給ひし折は、いつも御手づから其板下までもかき給ひにきかし。こゝにも多く並べられたるが風にひるがへりたる、これを見ませ何事もかく自らつとめ給ひし御いたづきの程を思へかしと、一ひら〳〵に聲をなすやうなり。都にうつり給ひて程なく人々と寫し給ひしと見ゆる寫眞あり。自らの幼なかりし程の事は打忘れて、師の君もかく小さくましゝ折もありけんなど、人たち打まもる。こなたにはさま〴〵の繪に歌かきたる掛物あまたかけつらねたり。其中

にあひ似たるやうなる竹の繪に歌かきたる二つ三つあり。こは翁の常に繪を好み給ひてかきましゝうち、殊にくれ竹のむなし心をめでましゝ故なりけり。

井上博士の演說は、故翁と共に大學の編輯所にありし事、翁の性質の天眞爛熳なりし事、足代翁の學風を傳へ給ひし事、師恩を深く思ひ給ひし事などいとつばらかなり。御名をのみ聞きしりたる人々もかくこまかに常の御有樣御心ばせを聞き、御姿はうつしゑにて見まゐらせ、猶其かき給ひしものを手にとりて、この世かの世のへだてはありとも、ちかしくなりぬる心地すべし。

本居の君の祭文は感いと深く、西刀自竹屋ぬしなどはそゞろに泪ぐみゐ給ひき。かくて式はてゝ盃めぐらす頃より、人々少し打くつろぎつゝ、こゝに彼所に樣々の物語賑はへり。椽にたちて見おろせば

外は雨はれがたになりて風あらゝかにふき、秋ならぬに木葉ちりかひたり。はるけき方は猶雨いたくやそゝぐ。見渡さるゝ森も多くの屋根も一つに黑み渡りぬ。彼くろき雲やがて又此方に來るらんかなといふ程に、庭に小さき犬のけたゝましう吠えたるに驚かされぬ。これに思ひ出でぬるは、二十年ばかりも前つ方にやありけん。下谷にありける頃、ある夕べ飼ひおける犬の、物にや驚きし、いといたく啼きしを、我母の出でてそこゝと見ありきしに、思ひかけず翁の未だ幼くましゝ師の君を伴なひて來ましゝになん有ける。今都につき給ひしを、我家居見あたらでこうじ給ひし由つげ給ひぬ。都に數多ある敎子の中に、まづ我もとを訪ひ給ひしをいと嬉しき事と、常にいひ出でたるが、今は母もなくなりて久しうなりぬるを、犬の聲にゆくりなく思ひいでられしもいとあやし。火ともす頃人々かへ

る。師の君昌綱君を始め、大村ぬし吉野ぬし、入口にたちて人々を送りますに送られて我も歸る。入相の鐘森の木々にひゞき渡れり。此鐘翁の今はの夕べにもかくや響きしなど思ひつゞけて家にいたりぬ。歸りきて燈火のもとにかく一日の事を書き記すに、かうやうのものかきつる事なければ、いと〳〵苦しきにつけて、我幼かりし程、よく勉めよと敎へ給ひしを、たゞ遊びくらしゝ事、今更のやうに思ひ出られて罪いと深し。思へば其咎にて、かくもたど〳〵しき筆のあと、いとも〳〵やさしけれど、我父も母も翁の敎子にて、殊には母あらば必ずこを物せんものと、其ちなみによりて、おぼ束なくもおふけなくもかいしるしぬ。あはれ今一度しかり給ふ御聲きくよしもがな。

（明治三十三年六月廿五日）

水のゆくへ

木末のうそぶき靜になりて
草葉のさゝやき消えゆく夕べ
しげみをぬひて流るゝ水に
うつれる星かげ三つ四つ二つ
やどれる光はよどむと見れど
流れて〳〵たえせぬ水
あはれいかにか思ひせまりて
いづこのはてに急ぎゆくらむ
あはれいづこのはてに

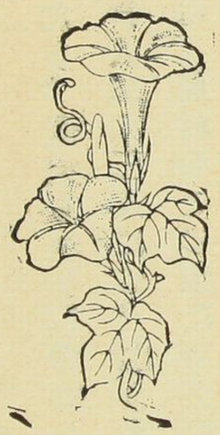
ある時

みちわたりたる物の音も
いつしかたえし窓のうち
さびしき室に今こそと
むかふピアノよゑばしわが
つたなき技をゆるせかし
名ごりの光かたぶきて
あたりをぐらくなりにけり
やみをさぐりてゑらぶれば
あたりのいとも靜けきに
ひぐきあひたるわがしらべ
いよ〳〵しるき拙なさよ
さらばピアノよ明日しらぬ

いのちなれどももしあらば
ふたゝび我をゆるせかし
さらばよピアノいざさらば

ちひさき花

ぬば玉のやみ夜の暗にうづもれて
　思ふまに〳〵泣くよしもがな
わが命きえぬかぎりはこのむねの
　此苦しびのつきずやあるらむ
心なくてすぎなんものを人なみに
　おもひあるこそ苦しかりけれ
草がくれつゝましげにも咲出でし
　ちひさき花をかざしにはせん
人しれぬ露にかたぶくさま見れば
　おなじすくせの花もありけり
つちかひし母君まさでこのあきは
　ちひさくなりぬ庭のしらぎく



よるの雨

（以下三章遠江日記のうち）

山崎こゝね子

ふさぎたる爐のあたり、燈火ちかうして語りゐたるまとゐはてぬ。歸りゆくは頭しろき人二人三人にて、亡き父君が手習の友達なりし人々なり。我父君は、此村のこの家にうまれましき。早う都にいでて、二十年ばかり前に、一度かへり給ひしより後は、絶えずいひいで給ひつゝも、え訪ひ給はず。うせ給ひて三年になりぬ。我等が叔父君叔母君は、みなこゝにすみ給へば、一度は見まほしう思ひわたりつるに、今年その思ひかなひて、天龍川の川上なる、この中部村に出で立ちぬ。道のり日數ふるほどにはあらねど、山深く川近きところなり待ち迎へたる人々のよろこび、思ひしよりも深く、かはる〳〵訪ひ

來ては、父君の昔を語りきかする、父君と同じ年なりといへるも、七つ八つのこのかみと云へるも、皆すてやかに見ゆるを、いと羨ましう思ふ。今宵も昔語りにふけぬ。はら〳〵と降る雨寂しう、初秋の風身にしむ夜頃なり。昔よりありきと今きゝしせとの柿の實の、まだ早うてはた〳〵と落つるも物悲しう、枕につきても目さえてねられず。つく〴〵ときゝ入りたりし雨の音にまじりて、あやしの聲きこゆ。そゞろ身の毛たつやうにて、都の母君こひしうなりぬ。ふすまのかなたに、幼子のむつがりいでしを、すかし給ふは叔母君、うしろの藪に泣く子食はむと鳥のなくぞといひ給へば、泣き聲はたとやみて、耳をすますやうなり。また二聲ばかりあやしの聲きこゆそよ〳〵といひ給ふ聲して、やがてしづかになりぬ。なき父君も、いく年の昔のかゝる秋の夜、祖母君のふところにちぶさ探り給ひけ

むよ。あやしの聲は少し遠ざかりて、猶しばしきこえたりき。

河　原

二日ばかり雨にこもりて、小さき友二人得たり。片言まじりのまり歌をおもしろうきゝて、鶴香箱など折りてやりつるより親しくなりたるが、今日は河原にとて誘ひにきたり。いざとて立ちいでつれどせとの畑の道、まひるの日わつし。小さき傘に身をひそめつゝ走り過ぎて、藪かげに入りつ。手ひきつれて、危ふげに下りゆく子のわとにつきて、坂は下りたれど、廣きまさご路にてりかへす日の、目をいるにおぢてためらふに、子らは帶ときてといふ。いふまゝにしてやれば、早かけいづる二つの小さき影は、燒けたる砂の上に、とぶ鳥の影のやうに見ゆ。やがて水際にいたり、さてふりむきつゝゑみまけたる顔、小さく見えぬ。こゝは藪の中よりさしいでたる大木のもとにて、枝しげく、涼しきかげをなしたり。今年の洪水は恐ろしかりしといへる、其名ごりなるべし。つみあげし石かけのくづれに、根を洗はれし草萩あはれに咲きたり。川の方を見れば、背の色くろき子あまた群れゐたるに、我友も砂山つくりつ水に入りつして遊びゐたり。危しと思へど聲とゞかねば、あつき砂の上をたどりゆきぬ。二階の窓にぬるう吹きたる風も、冷き水にさまされて思ひしよりも苦しからず。しばしは池つくる手つだひしたり。砂の底は石多し。うつくしき色したるを珍らしがれば、白きしまのめぐれるは親きり石、赤き色したるは拾ふまじき石といふを、何故ぞといへば、友の名いひて、病みたる母に赤き石見せたれば、其母死にきと、たど〳〵しう物がたる。また池つくるほど、空はあやしう曇りぬ。いざゆか

むと立ちあがれどきかず。むかひの山に黑き雲むら〳〵と下りたれば、いざ〳〵とうながせど猶きかず。また水の中に入りたちたる時俄に風ひや〻かに吹きて、神の音ひく〻きこえぬ。驚きたちたる子は、や〻さめたる砂の上を、まろぶやうにかけいでたるに、なる神は猶つゞけざまにはためきたれば、追ひかけらる〻やうに思ふべし衣も横さまにはふりて、藪の中にかけあがる。神すこしなりやみたる畑の道にて、やう〳〵われはおひつきぬ。ほ〻づきの色づきたるに、立とまりつるほど、はら〳〵とこぼれいでたれば、三人して家にかけ入りつる、やがて雨ははげしう降りいでたり。

川舟

舟いまいでむといふに、來つゞひてかにかく別をしむ村の媼たちに

送られて、河原にゆく。二十日あまり友とし見つるせとの白萩、や〻時すぎて、こまかき花のまなくちる、垣ねの百合のつれなさ、我ゐる程を遂にさかざりき。いたゞきに二つ三つよりあへる蕾のまだ青うかたげなるも、はかなき別なりや。藪かげの家の子ら、人多く通る音にかけいでて、あとにつきて來ぬ。思はぬ人に送らる〻をかしさよ。舟は思ひしよりも小さかりき。ひと月の前には、家を流し山を崩したる水にまかせてゆくべき事と思ふに心細し。のりあひ多く、白き黑きさま〴〵の蝙蝠傘は、船べりの外までかさなりあへり叔父君も都にゆき給ふべく、道づれ四人ばかりのりたれば、身うごきもいでくまじうなりぬ。ふと見れば彼方の藪かげより一群の人來るに、これものるにやと見てあれば、舟の人、郡長の君おはしたりとてゐずまひ正しうす。黑き羽織を同じやうに着たる村人の先に

立ちたる、髯多き洋服の君、人々に頭かるうさげて船にのる。送り來たるは、ひざまづかぬばかりに禮をなす中に、舟はいでぬ。別の言、舟と岸ととゞかずなりて、岸の人の顏小さくなりゆくほどいと早し。聲をあげてしばし追ひこし子らも、忽ち見えずなりぬ。舟はいま瀨にのりていとゝく、山も堤もあとに〳〵走る。すくせありて親しみたりし處と、さすがにかへり見らるゝに、涙ぐみつゝ岸に立ちゐたる人の顏、おもかげに見ゆ。前もうしろも知らぬ景色になりゆきて、山やう〳〵せまりぬ。岸をなせる巖、そばだちたるあり、つきいでたるありて、せかれたる水は、渦となり波とさわげば、舟はゆら〳〵とゆれて、底なき底に沈みゆく心地す。叔父君と郡長の君とはかねて知りあへるごちにや、頻に語りゐ給へり。村の政事、何とかやの鑛毒の事には、のりあひの老人たち耳かたぶけてゐたる、

中にことに皺多き顏したる翁、己に語りきかさるゝやうに聞き入りたりしに、さとあがりたる波のくだけて肩にかゝりたれば、驚きたちたる樣、あまりにをかしうて、舟の人皆えあらで笑ひつゝ詮の目もこゝにあつまりたる程こそあれ、こたびはなほ大きなる浪高うあがりて、舟の半はぬれにけり。人の上ならずと誰も〳〵立ち騷ぎてぞよみ渡る。肩ぬらしたる翁、舟べりに傘かたげて、かくてこそ安らなれ、ぬるゝ事あらむやとほこり顏に見まはす。人々は早うさまざ〳〵の物たてかけて、其かげに居たり。翁、若き人の智惠のはやさとつく〳〵いひて、空を仰ぎ居たるさまいとをかし。やがて西の渡といふにつきて、郡長の君と別る。いはほ立ち重りたる高き〳〵山の上に、家居二つ三つ小さく見えて、道通ふらむ、日傘二つそれかとばかり見え隱れす。又こぎいでぬ。浪の騷ぎはいよ〳〵恐ろしう

間なくひまなく舟べりによせて、人々も同じやうに騒ぐ。舟子いと苦しげなり。浪をふせぎ岩をさけつゝ、汗もしとゞにてこぐ。かゝる瀬いくつも過ぎぬ。流もいく度か折れぬ。山やう〳〵ひらき、水やゝ穏かになりて、岸の景色も、松わをき處草やはらかき處と、静かにおもしろう變りゆく。折々は河原ひろう畑平かに見えたる、心地すが〳〵しう胸やすらかになりぬ。ほと息つきたる舟の中、話聲にぎはしうおこる。帯に矢立さしたる旅わきうどと見えたる女は道づれもなきやうなり。かゝる旅する人の旅物語きかまほしきを、聲ひくう傍の女と物がたるは何の上ならむ。手織じまの女、菅笠の男、それ〴〵に村の祭、稲のみのり、まゆのよしわしを聲だかに語れば、をかしき翁は彼方にも此方にも口さしいだして、物知り顔なる猶をかし。水いよ〳〵廣う人の家近き横山といふに舟よす。二人

三人おりぬ。舟に殘る人、陸をゆく人、別の詞ねもごろなり。浪の音またくたえて擢のおとのみ高く漕ぎゆくほど、二俣といふ町につきて、我舟の旅終りぬ。乘合の大方はこゝに降りて、さらば、さらば、まさきくませとばかりは例の翁もねもごろにいひて、わかれ〳〵になりつ。人少くなりつる舟は、やゝ斜になりし日影をうけて末とほじろき水の上に、小さくなりゆきぬ。擢の音かすかにひゞきて。

なつの夜

市中のせまきすまひの、よろづにつけていぶせき中に、殊にたへがたう思はるゝは夏の頃なり。やう〳〵まちえたる夜まで暑く、風もなく、月はあれど、一本の若葉ちひさき庭をおほひ隠して、もりく

る光もなき、いとわびし。蚊さへうるさくせむれば、市にいでてゞろありきす。誰も同じ心なるらむ、町々いと賑はし。待ち設けたる商人は、樣々に折にあひて涼しげなる物など賣る。殊にすぎがてなるは、草花ひさぐ店の前なり。うばら撫子など、色かたちをかしきが、あやしき燈火の下に、折々そゝがるゝ水を露とおきて、匂ひあへるいとあはれなり。みながら庭に移し植ゑまほしけれど、例のせまさ思へばせむすべなう、二種三種もとめて歸る。光なき庭に置けば、夜の錦とかや、色のあやめも見えねど、つとめてはいかばかり美しく、青葉の外に色なき庭のながめ添ふらむとたのもしくて、露ならぬ心を花の上にとゞめおき、枕につきぬ。其夜の夢に河原撫子おほき故郷の川邊をさまよひたるもをかし。

苗賣

羽織ぬぎて、窓押しあけて見れば、今朝の庭たづみあとなくなりて乾きたる土に照る日あつし。杉垣のもとに一むら植し菜種、殘る色まれに、大方は實になりつ。隣の櫻あをく繁りて、とざしたる窓暗う日をさへたり。空は綠こく晴れたるに、山のやうなる雲の、白くかさなりあへるも、夏になりぬるけしきなり。あたりには人聲絶えて、あまり靜かなるにねぶたくなりぬ。縫かけの袖とりおぐれば、針はたゆたひがちにて、あやしの業や、折々は衣のかた消えて山見え川あらはるゝよ。折しも遠く夢の國より響くかと思はれて、眠たげになまけたる聲の近づくは、苗賣なりけり。千なりへうたん、瓜糸瓜など、其つるのやうに長々しうよびてゆく。昨日あたりよりぞ

來そめたる。長くさびしき春を慰さめし菜種のさかり過ぎぬ。此後のながめには、何よからむ。かの垣のあたりには、紫苑もよし、朝顔もなど思へど、秋またで家居かへんといひ騒ぐほどなれば、よそにのみきゝながす口をしさ。菊をつちかひし年ありき。市中の蔭おほき庭なりければ、やがて枯れぬ。家かはましを千駄木のあたりと、父君のたはぶれにのたまひつる、一昨年の事にかありけむなど思ひめぐらす程、なはなが〳〵しう、おもむろに、遠くなりゆく聲は耳に入りながら、ふたゝび衣の縞きえて、こたびは千草の野邊にやならむとする時、ゆくりなく驚かして、聲たかくかねふりたてゝよびゆくは、何うる男子ならむ。聞き定むるほどもなく、忽ちゆきすぎぬ。又もとの靜けさにかへりぬるに、とほくより又聞えくる苗うりの聲、これは少し若き聲して、ふしおもしろう草の名つゞけたるが、ふとやみぬるは、人や呼ぶらむ。あはれ誰が園の秋の錦と咲きさかゆらむよ。そのおしろいの苗、朝顔の苗、はた、えぞ菊の苗。

名なしぐさ

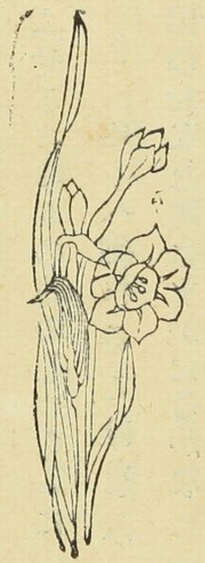
折にふれて

あはれなる小草の花よはるごとに
　あはれと見れど名を知らずして
人すまぬいはりのかけひ水かれて
　やせ〳〵さける花あやめかな
花の中に畑たちのぼりとり鳴きて
　うめさく村の夜はあけにけり
春かぜにやなぎなびきて田舍みち

あかき日傘のつゞくころかな
夕日さすむらの酒屋のつばめの巣
おやまつ雛のおしゐひてなく
櫻がりをりえし枝はとなりなる
わしなへの子の家づとにせん
小さなる藁屋のめぐりはる〳〵と
菜のはなつゞく村はづれかな
宮居われて鳩なく森のくらき道
つばき一もとはなさきにけり
まなびやの歸さの道を山に入りて
はなを折る友たきゞひろふわれ
うなゐらに折やつされてうばら垣

葉がちになりぬさきはてぬまに
友もなきみ山のおくのさゆりばな
おもふ心わらば何おもふらむ
折れふせるさゆりの花のしがらみに
ゆくへ細れるこけしみづかな
朝戸出のおなじ寒さをかたるかな
まなびの窓のうづみ火のもと
しばらくは岡べも松も人も馬も
わかくそめたる夕づく日かな
ゆきすぎぬ又ゆきすぎぬさ夜ふけて
母まつかどの小ぐるまのおと
とこ闇のひとやのうちにつく息よ

世や恨むらむ身やうらむらむ
亡き父をおもひて
ちゝ君のふみよむみ聲きこえしは
むかしの秋のねざめなりけり



磯菜集

大磯會同人

伊藤梅子

大磯百首の中に

鳴立澤にて

いにしへの秋の哀は知らねども
いまはたさびし夕ぐれの雨

駒止橋

ものゝふの駒止橋をとめくれば
むかしおぼえてくつわ虫なく

高麗園

ひまだ見ぬ高麗もろこしの山川も

おもかげうかぶ梅のはなぞの

高麗神社

神垣に袖ひるがへすはふり子の
かざしの花に花ちりみだる

花水川

今も猶その名匂ひてさゝやけき
小川にのこるはなみづの里

輕井澤百首の中に　末松生子

我庭に泉あり亭を泉源亭と
名づく

わきいづる岩間の清水結びあげて
こゝろもきよし山かげのいほ

樓の名を觀自在樓といふ

うちむかふ淺間の高ねあたご山
こゝろのまゝに見え渡る哉

離山

離山ひとりはなれて立てりけり
雲もかすみも風にはらひて

夏の頃輕井澤にありて

ほと〳〵と叩く水雞の聲はして
よのの音づれを聞かぬいほかな

五月雨はあとなく晴れて見渡しの
四方のむら山みどりしたゞる

折にふれて　西升子

里川を中にへだてゝとなりどち
　かたりあひつゝすゞむ頃かな
隔てなくおふしたつれど撫子の
　おなじ色にはにほはざりけり
宵々の涼みの友も訪はずなりて
　のきばにさむし鈴むしのこゑ
悲しとも面白しともながめけり
　友なき山のあきの夜のつき
天地のむなしき中に吹きおこる
　風の力のつよくもあるかな

竹屋雅子

幼兒のまゝごとあそびする中に

まらうどがほにをる小犬かな
むすび文結びつけたる萩がえを
　小舍人わらはさゝげつゝゆく
幾年もとざしゝまゝの一つやに
　あやしく見ゆるともし火の影
さきたるは舟まつ人やつみつらん
　つぼみがちなる岸のしらぎく
せばけれど草花うゝる園もあり
　足ることと知りて我世すごさん

板倉止子

日の本に生れし身こそ嬉しけれ
　昨日も今日もはなにくらしつ

若葉さす神の御前にをろがめば
　こゝろさへにも涼しかりけり
雪をれも嵐も知らぬわかたけは
　たゞなよ〳〵と生ひ立にけり

大磯にありける頃　板倉藤子

浪の音を遙にきゝてゆふづきの
　かげふみつゝも歸る夜半かな
はてもなき波路てらして果もなき
　みそらにすめる月のすゞしさ
波の上にたゞよふ月の影見れば
　そゞろみやこの人ぞこひしき

高木富子

英國に留學せる二人の子を思ひて

わたつみの上には道のあらなくに
　おもひいくたびゆき歸るらむ

大磯にありける頃

春の色はあとも殘らぬ庭の面に
　いまだきこゆるうぐひすの聲
今宵また螢がりにとさそはれて
　子らと共にも門をいでにけり

箱根にものして　芦田操子

箱根山むかしの關はなけれども
　暑さは今もとほさゞりけり

嵐山にて

大堰川はや瀬さしくだす筏士の
　をがさのうへにちる紅葉かな
旅の歌の中に
村雨のそらをながめてふる里を
　とひつ問はるゝ旅やどりかな
　　島村米子

折にふれて
雨はれて雲間をいづる月みれば
　ゑがほに向ふこゝちこそすれ
山路こえ青田過ゆく汽車のうちは
　てる日ざかりも涼しかりけり
いかさまにかはりかしけん月花に
　おもひ浮ぶるふるさとのには

しばらくは花にまかせん事繁き
　うき世のわざも家のつとめも
月みつゝいかなる夢か語るらん
　ふけゆく庭にのこるひとかげ
　　小幡八重子

子
をさなぢち語る詞もなか〳〵に
　親恥かしき世にこそありけれ
折にふれて
　　大澤國子

から猫の綱手にゆらぐ玉すだれ
　かゝげて軒のはなを見るかな
さま〴〵に形をかへてふる雪も

つもればおなじ白たへにして
いとけなき振分髪のむかしにも
かはらぬものは心なりけり

印東益子

朝かぜにたもとふかせてわね妹
すみれつみゆく春の野邊かな

つく〳〵とそのかみ忍ぶ曉の
まくらにかなし山ほとゝぎす

あやにくにつゞく時雨をかこつ哉
知るひともなき旅のやどりに

河邊とし子

山かげの人もかよはぬ草むらに
まじる小萩のはなさきにけり

むら時雨はれゆく窓を明て見れば
ぬれてにほへるはつ紅葉かな

いそ山の松のゆふ風ふきたえて
波のおとのみ寒き夜半かな

二葉三葉

竹柏會同人

原釜雜詠の中に　　飯淵藤三郎

浪けぶる岩ほの上に一人たちて
　天よりくだるふねを見るかな

思ふ事ありとはなしに暮れかゝる
　ゆふべの海をまもりつるかな

病院にありける頃

なぐさめつ慰められて名も知らぬ
　となりの人となれそめにけり

折にふれて

しづかなる夕べの空は雨になりて
　かぞふるばかり萩がはなちる

霜がれの葉蔭ながらにさきにけり
　わかく小さきあさがほのはな

つくりてし罪はとがめず法の師の
　言葉やさしくいましめたまふ

百の寺ひとつになして世をすくふ
　のりの佛をわれのぞむかな

鐘の音ながくひゞきて山でらの
　いてふの大木ゆふ日さすなり

祐乘坊釓郎

とこしへの命ともがな世の中の

なるらん果のはてまでも見む
つくづく去年の戀しかりけり

この春は獨つむ野のつくつくし

しのびねに虫ぞなくなる立よりて
我きくとしも思はざるらむ

とにかくに思ひ亂れし果はまた
うらみし人ぞこひしかりける

朝つゆのはかなき命いたづらに
たまひし神のうらめしき哉

原田嘉朝

かたぶきし日影は花に殘りけり
とふ人もあらん暮れて門させ

濱松のうへをすぎゆく舟の帆に
にしふきそめて秋は來にけり

明治三十二年の秋北京なる
背の君に文まゐらすとて紅
葉をふんじこめて　服部繁子

山里のもみぢは今ぞさかりなる
見せばや君におち葉なれども

同じ年の暮に
君まさで春くるとしも知られねど
年のくるゝは惜くぞありける

北京のかた騷がしく聞えける時

おきて思ひふしてぞ思ふ世中に

二人なき君にことなかるべく
北京救援の報を聞きて
今ぞ知る露の命のたへけるは
ふたゝびわはんちぎりなりけり　富田俊子

折にふれて
我田みなうゑはてし夜の手枕に
うれしき雨のおとをきくかな

はらへども拂へども又ちりにけり
かぞふるほどの庭木なれども　小原賴之

おそろしくはた面白く見る人の
てゝろにみゆる海のおも哉

獄

ひかれゆく母に負はれて幼子の
ひとやの門をゑみて入るかな　金井莊

折にふれて
花の上に宿れる露のおちつもり
よしのゝ川とながれそめけん

花の枝かざすわらはの跡おひて
小犬もはしるさとのなかみち

けがれたる塵を掩ひてふる雪は
あすこん年のみち清むらし　笠原幡多雄

住みなれしわが故郷のつくは山

今もをり〳〵夢にみゆる哉
かゞみもちかふべきしろを一つきの
酒にかへても年をむかへつ

川喜多近直

鶯のたによりいづるうぶ聲に
はるのうまれし心地こそすれ
あすは見ぬ道ゆきぶりの花なれど
ちらばちれとは思はざりけり
久方のあまつ少女がそでふれて
ぬぐひやすらん月のさやけさ

片山柳子

同じ道をあしたにゆきて夕べ歸り

日々にかはらぬ我つとめかな
春と秋と二たびのみの里まつり
あすまた君の舞ひすがた見ん
橋の下にあそぶ乞食の子らふたり
かれらがための園生なるらむ

横山碩

友とせし机もうとくなりにけり
世わたる業にいとまなくして
花に醉ひ酒にゑひはた人に醉ひて
はなの七日をあそびくらしつ
野に遊ぶ童むかへにこし母が
紙鳶の糸まくはるのゆふぐれ

少女らが謠ひし歌やまねぶらん
うゑはてし小田に蛙なくなり

雨にさき雨にちりしく山茶花の
花のさかりは見るひともなし

館　忠資

述懷百首の中に

天地をゆするばかりの神風も
なびく小草は仆さざりけり

世の中の人に知られぬ身の罪も
とがむるものは心なりけり

丹下時子

山田ぬしに

雪ふかき十勝の野邊も何ならじ
神のみひかり絶ゆる世あらねば

バラードぬしを訪ひける夜

西東ひかりかはらぬ月のまへに
いにしへ今をかたる夜半かな

村岡典嗣

秋の山ぶみ

鳥がなくあづま八國のあき風に
ふかれてたてりをつくはの山

つれ〳〵の麓のみちに折りし草を
尾上にすてゝものをしぞ思ふ

夕されば武藏上野ふたくにの
ともし火浮ぶ大利根のみづ

山に入りていまだ一里ならず草靴とけて
むすぶ木かげのま清水のおと

此川のながれてそゝぐ里のうちに
見ぬ戀びとのすむやあらずや　村山元子

折にふれて
竹垣のひまよりにほふ梅みれば
主人さへこそゆかしかりけれ

七くさの數にはもれしを草さへ
みなそれぐに花さきにけり

めづらしきふしはなくとも呉竹の
なほき心をこゝろとはせむ　井原豐作

青雲をよそに見なして富士のねの
こゝろだかくぞ世を渡らまし

むらぎもの心にとひて耻ぢざらば
身のくるしびは何かいとはん　大河内桂子

山姫のにしきの袖にくらぶれば
人のよそひはかぎりありけり

父君のみ寺まうでのかへりみち
ゆふべかなしく鈴むしのなく

木枯のさそひのこしゝ二葉三葉
時雨にぬれて散りはてにけり　奥村岸子

都を離れて紀の國に移り住まんと
しけるをり竹柏會の人々別の宴を

稲毛の海邊に催ほされける時

かりそめの別とおもへど三熊野は
うみやま遠しいつか逢ひみん

別れてはうとくなるてふ言の葉を
いつはりごとゝなすよしもがな

那智山のたきのしら糸くりかへし
みやこの友をこひやわたらむ

年頃看護しまゐらせし陸奥伯の
みまかり給ひし時　大村やよ子

身にかへてみとりまつりしかひもなき
今日のゆめこそ悲しかりけれ

野遊

春の野の霞のうちにくらしけり
知らぬ人ともことばかはして

折にふれて　栗田土雄

やぶ椿ちるや小川のみづぐるま
はなも一ひらひとめぐりせり

ますらをが痛手ながらに戰ひし
ぬま田のおもにはちす花さく

村びとが親とし慕ふ村をさの
病いえずして秋くれんとす

かへり來れば寂しさ告ぐる面もちに
手がひの犬のわれにまつはる

姫君のみそばさがりて老の手に

三人のまでをなほそだてつゝ
身におはぬ望はもたじ小さなる
草のいほりにわが世すぐさん
下野高原の里に物しける時　山崎房吉

きぬ川のかは幅せばく狹くなりて
紅葉いよ〳〵こくそめてけり

夕花

おそる〳〵花の供人申しけり
入相になりぬ馬やひかんと
折にふれて
賤の男が息をやすめておく鍬に

ありのかよひ路又かはりけり
共に來し蝶にわかれてわれひとり
きしのべにまつわたし舟かな　山田清定

虫ばみてつひには枯れぬ鉢植の
うばらの蕾花もさきあへず
大岩のもとにひれふしいのるわが
心をあらふおきつしらなみ
いかづちのとゞろき渡るま夜中に
ヨハネがつげし文をよむかな
高等學校の時習寮にありける頃
友はみないね靜まりてともし火の

ほかげをぐらし神にいのらむ
折にふれて　松寺久雄

古里のゆめを今宵も見つるかな
やまひの床のねぐるしくして

しめ〳〵とそゝぐ時雨の悲しきに
身のゆく末をおもひ入るかな

世の中は野山いそやま小まつ山
名もなき山の多くもあるかな　松浦嶋子

此村にいさを殘してみまかりし
庄屋のかどのうめさきにけり

里の子がたをらんとして叱られし

大家のにはのはな散りにけり　相澤朮

はれくもる人の心に似もやらで
くもよりうへに月はすみけり

なきしきる野邊のきゞすは若草の
つまやこふらむ子や思ふらむ

何となくむかへば袖ぞぬれにける
月はいかなるゆかりなるらん　赤堀信成

道のべに買ふ人もなき風車
たゞ夕かぜにうちめぐりつゝ

先師の十年祭に懷舊といふ事を

なき魂よ心やすかれいぎたなき
　　世の歌人もいまさめんとす　　新井幸太郎

　　折にふれて

縁日の客足たえて虫うりの
　　むしのね高く夜はふけにけり

なつかしく嬉しかりけり贈りこし
　　いもとの手紙ふるさとの柿

かげ暗き橋のきたなる舟の中
　　ともしび見えて乳のみ子の泣く　　荒井萬子

雪の上に小さき跡をとゞめつゝ
　　いとけなき子のまなびやにゆく

空の色くれなゐに匂ふしのゝめに
　　つゆふかみ草花ひらきけり

卒塔婆のまろびたるを見て　　淺井鐵子

われもまた露の命のきえはてゝ
　　かゝる卒塔婆にならんとすらん

折にふれて

故郷にかへるはしため一年の
　　なごりさすがにをしまるゝ哉

京都にものしける時　　里井柳枝子

嵐山もみぢの一葉ふみに入れて
　　かへる其日を告げてやるかな

折にふれて
さりともと手をさしのべて見つる哉
あなたの岸のひめ百合のはな
南京にありける頃明の大祖の陵に詣でて　佐々木春雄子

四百餘州なびけし君のみさゝぎを
いまはたとふは嵐なりけり
日本にかへらんとしける時彼國
人送別の宴を秦淮の河上に張り
ける夜
雨はれてみ空のつきは清けれど
わかれにくもる我こゝろかな

折にふれて　木下利玄
わが父に迎へられしは夢にして
くらきみなとに舟はてにけり
あらかりし風は收まり雨はやみて
いその松ばら月ぞきらめく
をさなぞち鬼あそびせし產土の
繪馬堂くづれ草おひにけり
道のべに敷かるゝ石もみ佛の
像彫れる石もある世なりけり
見渡しの殊によかりし山の上は
外國びとの家ぞたちける　島田隆子

山畑の麥の穗だちをふく風に
　あせのうばらの花の香ぞする
我背子が植て歸りしさ苗田の
　わたりなるらん水雞なくなり

森雅子

去年のまゝ手をだに入れぬ菊なれど
　おのがさかりは忘れざりけり
いくつ寐ば春はくるぞと幼兒の
　昨日もとひつ今日もとふ哉

鈴木榮子

つれなさにつひには馴れて世の人を
　かゝるものとも思ひけるかな

夕づつの空にきらめく夕べ〳〵
　くるはしきまで物ぞかなしき

佐々木雪子

竹柏會の日春風を
こむ春も又こむ春も春風の
　のどけき園に共にあそばむ
　また野邊を
幼兒を芝生のうへにあそばせて
　毛糸あみをれば雲雀なくなり
なき父君の十年祭の日
小さなる手を合せつゝ拜む子の
　ゆく末とはく守りまさなむ

梛のほつ枝

竹柏會同人

第一竹柏會に春風を　東久世通禧

梛の葉のひまもれ出づる朝風や
歌のはやしの春を告ぐらむ

第二竹柏會に野遊を　萬里小路通房

花かげに遊ぶけふこそ樂しけれ
おなじ道ふむ友とつどひて
竹柏會の人々と共に横須賀に物

しける時　奥平昌恭

古しへのますらたけをや今いづら
稲葉なみよるかまくらの里

土井利剛

折にふれて
さびしさに窓の戸あけて只一人
ともまつ虫のこゑをきく哉

佐々木弘綱翁の十年祭の日言
の葉を返す鳥こそあはれなれ
我うたふ歌きゝしらぬ世にと
いへる翁の鸚鵡の詠を思ひて

末松謙澄

みな人の心に今日やひゞくらむ

ゆきにし君がうたひにし歌
折にふれて　飯淵彦市郎

こゝろざし語りあふべき友もがな
あきの夕べにとひとはれつゝ　飯淵幸平

みちのくの千賀の鹽釜もしほたく
あきの夕べを人かげもなし　筏馨

沖つ浪さかまきよする岩かどに
ゆふ日をあびて鷲のかゞなく　市村章

おのが身の果をも知らで火取虫

こがれよるこそ哀なりけれ　飯田春敎

舟くだす吉野の川のはやき瀨は
いはも流るゝこゝちこそすれ　印東富貴子

うつしゑにまみゆる事の多ければ
故翁の十年祭に
十年へしとはおぼえざりけり　一川虎子

鶯のおとづれきゝしあしたより
折にふれて
春のこゝろぞうごきそめつる　伊藤貞子

うゑはてゝ休らふ賤が笠の上に

またもふりきぬ五月雨のあめ　池田愛子

我身にもあらばとぞ思ふ愛らしき
ちひさきおとゝちひさき妹　池谷久子

ゆく春のなごりの風にさそはれて
のこれる花もちりはてにけり　石川照子

幼子のいまねいりたる窓のとに
ゆめおどろかす小夜あられ哉

なき祖母の愛し給ひし鳩の庭に
つぜふを見て　飯淵孝子

なき人をなしとも知らで鳩のむれ
おなじところに餌や求むらむ　市田豊子

折にふれて
岡のべを今ゆきすぎし旅びとは
かすみに消て雲雀なくなり　岩本ふじ子

雪中歳暮
ふるゆきは道もなきまで積れるを
いかにきえゆく月日なるらむ　伊東安子

旅の歌
故郷のひゝなまつりやいかならん
ゆくてに匂ふ姫もゝのはな　伊藤田鶴子

走りゆく車のまどにほの〴〵と
あけゆく空の富士を見るかな　波多野英一

折にふれて
根にかへる森の夕風ふきわれて
木葉と共にちるからすかな　長谷部浩

妻も子も親はらからも打つどひ
語るやいつの夕べなるらむ　馬場民八

野遊のかへさなるらん乳母の背に
花たばもちてねぶるをさな子　長谷川隆成

浪の上も春はきぬらし水底の
やなぎに霞むおぼろよの月　萩原正城

汐風にかたなびきせる濱松の
えだおもしろし雪のあけぼの　春山長吉

うつろひし菊のま垣に霜みえて
庭のけしきも冬めきにけり　長谷川美材

時雨ふる夕べの野路をとぼ〴〵と
めしひのかたゐ子にひかれゆく　八太光子

鶯の聲をのこしてかたをかの
松に消えゆく夕づく夜かな　長谷川柳子

上野山ゆふべの鐘に人ちりて
つきしづかなり花の下みち　八太やよ子

いつしかも汐干の舟はこぎ去りて
浪にほのめく三日月のかげ　林榮子

枝かはす木々の梢のふゆがれに
ときはの松も色ぞさびしき　新田義尊

笹栗も椎もこぼれてやまざとの
糧ゆたかなるあきのくれ哉　丹羽元亨

わたし守棹さす袖にこぼれけり
きしのゐぐひの青やぎの露　西村章子

夕立のあと川やなぎ露おちて
下ゆくながれ秋のこゑあり　新田華子

花かげをゆきて歸りて菅の根の
ながき春日もくれはてにけり　西尾まき子

賤の男が藁うつ音もくれはてゝ
つきかげ白し小山田のさと　錦織富貴子

たらちねの厚き恵のたもとにも
うき世の風は凌ぎかねつゝ　堀内千園

あはれにも我方さしてよりくなり
うつ手になるゝ池のをし鳥　本多直

ほろ〳〵と散るもみぢ葉の色見えて
あかつき月夜かげさやかなり　栃内吉致

思ふどち心はる野にあそぶ日は
うき世はなれし心地こそすれ　徳富久子

旅枕ひゞく時雨のふるさとも
いまや夢路のわとしのぶらむ　遠山定子

花かをり蝴蝶まひ遊ぶ春の日の
けふの一日を野邊に暮さむ　遠山直子

さびしさは野にも山にもみちぬらん
草にも木にも露ぞおきける　小野田元熙

興津にて

たへがたき暑さも知らず清見潟
清きなぎさをゆき返りつゝ　小津長幸

折にふれて
音ばかりきくも涼しき夏かはの
ながれもみえてすめる月かな　荻原宗義

ゆらゝと穂波ゆらぎて千町田の
わさ田おくて田秋の風ふく　小原泰助

學ばんと心ばかりはやれども
病がちなる身をいかにせん　小笠原政治

おほかたの人は都にかへりにし
濱邊のやどに秋さめのふる　荻田小磯子

ゆくりなく君にまみゆと見し夢は
さめてもさめぬ心地こそすれ　渡邊須磨子

おのがじし心々の世なれども
花にはそむく人なかりけり　渡邊節子

友の奥つきに詣でて
好みたる白百合の花たむくれば
おぼろにみゆる友の面かげ　川田爲則

折にふれて

ま萩原にはへる野邊の露ふめば
　玉のひゞきあり鈴虫のこゑ　　片岡時綱

うら山に繁る夏くさ拂ひおかん
　なれぬ旅人みちまどはまし　　河合和嘉

大磯にありける頃

夕なぎの波靜かなる磯にいでて
　十六夜の月をまち渡るかな　　金杉泰介

折にふれて
心より心にわたす橋もあらば
　おもひの淵に身をば沈めじ　　加藤雛子

夢の中にあるかひなしと思ふ身を
　なほうらやめる人もありけり　　川田孝子

夕しほは今かみつらんさしのぼる
　月よりうへに千鳥なくなり

田舍に住める身は竹柏會にも
つらなりがたきに其日しも空
くもりたれば　　加茂登鶴子

うちつどひ遊びますらん今日の日を
　雨ふるなゆめわれゆかずとも

春の歌の中に
若駒のひづめのかぜに花ちりて　　高木尙介

みづ野のみ牧はる暮れんとす
　折にふれて　武田櫻桃

とふ人は思ひたえにし柴の戸を
　よな〳〵たゝく山おろしのかぜ　高田顯允

うすみどり流けぶりて浮草の
　うへにも見ゆる春のいろ哉　辰馬義昌

たゞ一人渡りし人のあとみえて
　わさ霜さむしさとの板ばし　竹山靜子

むさし野の昔ながらにかげ寒し

ひろきみやこの冬の夜の月　田中たを子

雨雲はいつの程にか晴れつらん
　ひんがしの空に星ぞきらめく　高木浪子

辭書の古びたるを見て

愚かしき身をもとがめずあまた年
　われをたすけし我師なりけり　丹下歌子

夏の歌の中に

朝な〳〵おきいでてめづる撫子は
　わが幼子のこゝちこそすれ

明治三十三年の冬清國に赴きけるに
北京皇城内の荒れたるを見て

民草はふみあらされて九重の　坪谷水哉
庭にはびこる八重むぐら哉

折にふれて　津島松溪
もろともに秋の哀を知れとてか
つゆけき野邊に虫のなくらん

かへりこし我ふる里の軒のまつ　土田道一
かはらぬ色ぞうれしかりける

旅の歌の中に　都筑高藏
よき宿とおもひながらも旅衣
心とけては寐られざりけり

折にふれて　頭本春子
うなゐらが乘りすておきし竹馬の
たふれながらに雪ぞつもれる

かけそめしをすの隙もる朝風に　坪野柳子
きぬ縫ふそでも涼しかりけり

すむ魚もおのが春とや思ふらむ　土屋五十子
きしに匂へりふぢなみのはな

みづえさす樫の古葉のはら〳〵と　根岸武香
ふるや小雨もなつめきにけり

わが宿は野べ近ければ朝な〳〵　　根岸直子
たちいでて折る八千鉢のはな　　根岸公子

はきよせし庭の片へのもみぢ葉は
ゆきのみ山となりにける哉　　中村健一郎

高臺寺に萩を見て
時めきし其いにしへやいかならん
いまもにほへり秋はぎの花　　中澤弘光

夢
思にもうかばぬ道も見つるかな
ゆめや心のほかをゆくらむ

折にふれて
いさみつゝ別れし友よさ夜風の
みにしむ窓にふみやよむらむ　　中村重治　　中澤鶴三

都べの花よとくさけ花さかば
ふるさとの母きまさんといふ　　長沼成美

こがひする少女の姿やつれたり
わがまゆつくるひまやなからむ　　中村文子

寡婦の心を
何事も知らでほゝゑむ幼子の
こゝろにしばしなる由もがな

折にふれて　南條梅子

夢のごとあだにすごし丶年月を
　忍ぶもつらし夜半の寢覺に　南條竹子

秋の野の眞萩はをらじ手折りなば
　を鹿やいかにわびしと思はむ　中島石子

たそがれの道のまよひにみつる哉
　賤が垣ほのゆふがほのはな　中島峯子

忍より外にもらさぬうきことも
　ふでにかたりてなぐさむる哉

家にまつ乳兒をや思ふ賤の女が
　稲かりをへていそぎ行く見ゆ　棟方百世子　上野貞利

ゆく末をまだき知らする夢もなし
　すぎしことのみ常にみえつ丶　梅森月皎

長閑なる頃しもさきて見る人の
　こゝろもちらぬ山ざくら哉　井上公二

人のすまぬ島はあれども天の下
　神のいまさぬ島なかりけり

神路山としへし杉のしたかげは　乘竹ろく子
うき世の塵もつもらざりけり
汽車にて熟田を過ける時　奥平昌國
かしこぞときくも尊とし老杉の
木だちのなかの神の大みや
歐洲に物しける時印度洋にて　大橋乙羽
我ひとり物をしぞ思ふ雲もあらぬ
大海ばらの月のまへにして
旅の歌の中に　大野泰

旅衣ひもゆふぐれのあきかぜは
身にしみ〴〵と悲しかりけり　大平直綱
馬子の唄東風にたぐひて聞ゆなり
馬の鈴菜のさきつゞく野に　大木永信
寄山祝
天つ日のふかき惠はたかさごの
山の端さへもてらしける哉　大石元郷
兼好法師
日ぐらしの聲かすかなる柴の戸に
かきしふみこそ世に聞えけれ
折にふれて　大西義彦

み熊野や杣びとかよふ七こえの
　峯をつらねてたつかすみ哉　大塚伸子

水の面は跡しなければ白ゆきの
　舟にのみふる心地こそすれ　大橋時子

故翁の十年祭に
をしへ草繁き惠を忍ぶれば
　十年の今日もそでぞ露けき　大竹伊勢子

折にふれて
かの見ゆる岡のあなたや寺ならむ
　松よりひゞくいりあひの鐘　大久保音羽子

故翁の追悼會に

君まさで既に十年はすぎつれど
　み靈は天にうたひいますらし　久米善平

旅
古里にみなれし月をともとして
　千里のたびをひとりゆくかな　日下靜子

折にふれて
ゆりこぼしかつゆりする名て蓮葉の
　露もてあそぶいけのゆふ風　久保花子

二つなき寶となれる富士の根に
　いとゞひかりをそふる雪かな　矢田猪平

鷺の山たかねの月はむかしにて
　人のこゝろのくもりゆく哉　山岸光亨

幼兒のかしらなでつゝおい人の
　むかしを語るうづみ火のもと　山口義子

雲霧にすがたかはりて見なれたる
　軒端の山もめづらしきかな　山本芳子

朝づく日未だにほはぬ花の枝に
　ねぶる蝴蝶は夢かあらぬか　松浦佳雄

產土の森の小山をさかひにて
　かたへ晴れゆく夕立のくも
洗禮をうけゝる夜思ひ
　つゞけゝる　松井友子

かぎりなき大海原にこぎいでて
　わが思ふ國にいつかいたらむ
折にふれて　馬島錠子

あらしふく山の下道くだりくれば
　色なき枝にからすなくなり　前田八千代子

池水にうつる藤なみはるかぜに
　そこのかげさへ動きける哉

佐倉にものする道にて　藤島正健

あふ人もまれなる野路の霜枯に
いづこともなきいりあひの鐘

秋風　藤井りゑ子

時めきし花の吉野もわきかせの
ふけば悲しきところなりけり

故師翁の御墓に詣でて　小松恒

かぞふれば幾年ならんおくつきを
めぐれる榊かげふりにけり

松影映水　小町谷杉園

影たかき汀のまつの八千とせを
君にと寄する池のさゞなみ

折にふれて　小林源一郎

咲匂ふ梅の木の間に見ゆるかな
はるなほ白きゆきのとは山

鯉淵暉吉

雲うづむ軒端の山をながめつゝ
いぶせく過す五月雨のころ

琴陵瑞枝子

ぬば玉の夜半のねざめの物思
うれしき事は少なかりけり

琴陵八千代子

秋ふかみ庭のあさぢふ霜みえて
きゆるが如き蟲のねぞする

後の世のまさしくわらば後の世は
　いかなるかたに生れいづらん　　小杉蝶子

一筋に道をたどりて今日もまた
　おもはぬ野邊の花をみし哉　　海老名宮子

ちりのこる一木の花を惜しむまに
　春さへ暮れてゆかんとすらむ　　江副米子

木枯のかぜ荒らましき椎がもと
　おつる實拾ふうなゐ子もなし　　江副静子

野分はげしき日
瓦おち垣根たふるゝ音すごし　　寺野章子

この世はいかにならんとすらむ
折にふれて　　寺野順子

母君によびさまされて此あした
嬉しくきゝつ初ほとゝぎす　　安藤直方

きゞすなく聲の中より老らむらん
かすみに眠るをちの山もと　　秋元洒汀

背負ひたる薪はおもし家とほし
日くれなんとして時雨ふる也

烏瓜いろあからみて賤が屋の　朝日重光
かどの竹がきあきふけにけり　有賀晴子

ふみ箱に櫻一枝をりそへて
つかひに急ぐめのわらは哉　秋葉清子

ゆけど〳〵くぬぎの林ならばやし
ながめかはらぬ山かげの道　秋元照子

裏かはの汀のあしの葉がくれに
雨そぼふりて水鷄なくなり

時鳥きゝしなごりにありあけの
月のゆくへもながめつる哉　安藤長子

朝鮮京城に在りける頃

驢馬なきて砧ひゞきて安洞の
やどりさびしき秋の夜の雨　佐藤宗次

畠より歸るとて

手綱とる手もきるばかりふく風に
ふかれてかへる野路の夕ぐれ　齋藤惠治

紅葉

立田山みねのゆふ虹するきえて
殘るは木々の紅葉なりけり　佐野定郷

思ふ事ありて　佐野比呂美

さしのぼる朝日の光まばゆきに
をぐさの露はきえはてぬべし　酒井愛子

折にふれて

幼子とそひねの夢をむすぶまに
はやかたぶきぬ夏の夜の月

亡女瑞子を青山に葬りける夕べ　坂井園子

葬り終へてかへる車のうへもなほ
家にまつかと急がるゝかな

折にふれて　澤豐子

鶯の聲なつかしみをすまけば

春さめけぶりうめの花ちる　佐藤朝惠子

病める人よろぼひいでし庭の面に
いまさかりなり白菊のはな　佐藤多仁子

あまりにも秋の一夜の長ければ
千々のおもひぞ胸にゆきかふ　佐原貞子

春くれど雪なほのこる山でらの
杉生の奥にうぐひすのなく　齋藤民子

こよろぎの磯わは早くあけそめて

浪まにはそしありあけのつき　酒井壽美子

煤はらふ庭にちりゆく古ごよみ
月日もかくぞちりつくしける　佐藤順子

もろ共に眺めしまゝのかげなれど
月はむかしを語らざりけり　佐々木瀧子

風ふかば消えなん露の身をおきて
きみが千年を猶いのるかな　坂井鶴龜子

野邊にあらば終には霜にかれぬべし

折りてかへらん白ぎくのはな　北次龜

立別れ遠くいにし友いづこにて
たれと今宵の月を見るらん　木村宜子

しげりあふ若葉がくれの花うつぎ
さやかに見えて夜は明にけり　菊地糸子

さくら花さくと見るまに移ろひぬ
のどけき春をなにいそぐらむ　柚木久義

大空にすみ渡りたる月みれば

心さへこそきよくなりけれ　湯淺八重子

山ふかみ我庵ありとたれか知る
友とながむる月ならずして

雪ふかきあした我つかうまつる
須賀の御社に詣で侍りて　宮崎内喜

ふりつもる雪ふみわけて詣づれば
いやすが〳〵し須賀のみやしろ

折にふれて　三浦常子

うぐひすは今日もなくなり我園の
竹のしげみやすみよかるらむ

大かたの心にはるをまちながら
さすがにをしき年のくれ哉　三宅貞子

手にあまる羽子板もちていもうとの
年かずほどをはこりかにつく　水橋康子

かりそめの一日〳〵と思ふまに
今日一日ともなれる年かな　南大濱

師の君と共に小菅の梅見にゆきて
のこりなく梅は見はてぬ歸さには　島野常治

かの山もとに小とりがりせむ
折にふれて　嶋田純一

色かへぬ竹のみさをは白雪の
埋むるにこそ顯はれにけれ

清國のさわぎはげしき頃
故荒尾精先生を思ひて　白岩艶子

かゝらんとおぼし知りにし世の様を
こけの下にや見そなはすらむ

折にふれて　柴生田田鶴子

まちわびて獨ながむる窓のとは
おぼろ月夜になりにける哉

枝といふ枝をしをりし木枯の
力よわりて日は暮れんとす　島崎松子

垣ごしにみゆるとなりの山茶花に
小鳥さへづる秋のくれかな　島崎いさ子

霜枯の千草しぼろに折れふして
松のみ高きをかごえのみち　島田文子

ゆく舟は霞のうちにいりにけり
かはそひやなぎ風になびきて　清水麿子

秋のつきすむもすまぬも大空の　森朗路
くものの心にまかせたるらし　森和平

みがたまに菫つばなをつみいれて
うち野に遊ぶみやこ人のとも　森田妙子

秋ふけて人目かれたる山ざとは
今日も雲のみゆきかよひけり
廣島なる病院にて外國の負傷兵を
看護しける折　森山光子

いたづきに苦しめる人の夢の中に
折々よぶやたが名なるらむ　森策子

紅葉

うちめぐる紅葉の奥も紅葉にて
にしきはてなきとがの尾の山　森田花子

折にふれて

たくみにもかけ橋わたすさゝがにの
糸にとまれるつゆの白たま　瀬脇壽雄

千駄谷村に別墅を占めける時

わがいほは大内山のきたのかた
池のほとりの松のしたかげ

社頭花　清家茂信

ちれば又ささつぐありて瑞垣の
花のさかりも久しかりけり

折にふれて　關根喜睦

若きとき植ゑにし松は色ましぬ
ひとしからぬは我身なりけり

關井庄吉

何事もゆめとさえゆく老の身に
かなしきことぞ忘れかねつる

瀬川久可子

幼子は晝寢しはてゝ靜かにも
ふみよむほどぞ夏なかりける

物學びすと都にありける頃　關井ぬひ子

昨日わつく今日また寒し父君の
老ませる身にさはらずもがな

深山瀧　杉下豐

耳もとに瀧の響はきこゆれど
そことも見えず雲深くして

折にふれて　鈴木光子

すておきし庭のすみなるさし柳
わすれし頃にもえいでにけり

鈴木安子

木葉みなさそひしものを猶あかで

枝までしなる木がらしの風　杉江松子

只ひとり見んがをしさに櫻ばな
あたら枝をも折りてける哉

盛岡に移らんとて父母にわかれけ
るとき　鈴木勝子

潔よくさらばといひて別れたる
心にも似ぬわがなみだかな

折にふれて　萬里小路直房（以下鏡浦會々員）

雪晴れしあしたに見ればはゝそ原
冬こそ花のはやしなりけれ　角田佳一

春風にふきさそはれてそゝろにも
旅にいでたくなりにける哉　小原謙治

紅に桃さくやどのひなまつり
さもにぎはしき笑ひごゑかな

子の病みける時　古谷若松

おのれまづのみ試みて病める子に
くすりすゝむる親ごころかな

折にふれて　山口松治郎

夜毎ゆく我師の門にいつとなく
馴れて迎ふる犬の子あはれ

小原正子

いたづきはいかにかあるらむいえまさば

共にといひし花さきにけり　吉田信子

かし家の札もやぶれしあばらやの
庭にはをしき梅のひともと　角田千代子

しづかなる浦のあしたよ舟浮べ
一日あそばんかの島のあたり　谷龜巖（以下斯花會々員）

水ぐるま音たえはてし里がはに
かはづの聲のながれゆく哉　谷口千波

つみとりし花のひと束手にもちて
うなゐねぶれり何夢むらむ　關藤枝

大鷲のつかれてとまる峯の松を
枝ながらふく夕あらしかな　龜野源量

玉川のつゝみの道のみぎひだり
虫の音すなり夏ふけぬらし　飯島茂經（以下春風吟社々員）

旅の宿に獨きく夜のしぐれこそ
ものゝわびしき限なりけれ　宮澤信三

何事かかたりあひつゝ賤の女の

さ苗とるなり籠を畦におきて
長野のわがたに移り住みける頃　山本繁子

いつしかも鄙の手振に身は馴れて
見よく住よくなりにける哉　前川とみ子

折にふれて
桃櫻えだをかはして山かげの
おうなが家も春めきにけり　金井道子

春はなほ松の一木も目だちしを
みどりになりぬ葉山しげ山　樹谷淳孝（以下青芝會々員）

里川の岸のゐぐひは朽ちはて丶
まばらにさけり黄菊白ぎく　德峯了豐

山のはにいでし三日月はやおちて
五尺の庭はたゞ虫のこゑ　渡邊久圓

たはれたる戀にはあらず何となく
なつかしき人たゞひとりあり　竹柴俊泰

うすものゝ翅を負ひて中空を
舞ひてもみたき月の夜半かな　竹岡八重子

をり〳〵は少し晴間の見えながら
　　またふりつゞく春のあめ哉　　藤田眞子

なつかしき夢よりさめて窓を押せば
　　白萩のうへに月なほのこる　　佐藤共之（以下橘會々員）

露おもるわさ田の穂波ふきよせて
　　秋とはしるき風のおとかな　　齋藤辰五郎

ゆき通ふ人もとだえて秋かぜの
　　やどりとなりぬ野邊の荻原　　井本澄江

夕霧はあとなく晴れて千町田に
　　ひかりみちたる秋の夜の月　　木村さい子

月夜よし夜よしといひて見もしらぬ
　　伏屋のおぢと夜たゞ語りぬ　　倉田隆性

しづが屋の心やすさは照る月の
　　光をきよみ火をもともさず　　栗原丈司

風にきえし閨の燈火そのまゝに
　　さしいる月にうちむかふかな　　飯塚量

霜むすぶまがきの菊の花の香に
つきかげ寒しありあけの庭　平川とり子

朝風にはるゝさ霧のたえまより
かつ〳〵見ゆる遠の一むら　木山きみ子

ちかからば庭にうつさん女郎花
ひとりたてるは寂しかるべし　綿貫元一郎

野分せし田のものかゞしたふれても
おのがところを守り顔なる　草刈良伊二

箱庭のたけみじかなる木々も猶
ときを知りがほに紅葉してけり　石井貞々

奥ふかく探りつゝ見ればもみぢ葉の
ふもとの色はまだしかりけり　大野さだ子

立田姫いとなかるらん野に山に
紅葉がさねのきぬくばるとて　小泉太一郎

道のべの梢もみぢぬふるさとの
はしの立枝もそめ出ぬらん　田邊ふさ子

立田姫かへる山路にふるあめや
　やがても明日の時雨なるらん　森安次郎

なつかしき稲荷の社をざさ川
　わがやどちかしふる里の道　志村忠次郎

きて見れば都の夢はわともなし
　わがふる里はあれにあれつゝ　松澤乘吉

かへりぬと聞きて訪ひくる里人の
　顔さへ今はわすれはてけり　金子とし子

春秋のながめのみかは更にまた
　まじらひひろき文の庭かな　高木靜然

日の本のやまと島根に根ざしつゝ
　よそにはさかぬ山さくら花　佐野左吉

まさごぢの更たる月に見渡せば
　眠るがごとし沖のしまやま　淺井定治

君が代はかまどの烟ひらけゆく
　野邊に山邊にたちまさる哉　須天大吉

玉だれのをすふきあぐる夕風の
　さむきや雨の近きなるらん　森　きん子

み佛もぬれそぼちてやおはすらん
　のきかたぶきしふる寺の雨　山口空外

あら岩にせかるゝみれば瀧つ瀬の
　水もうき世にすめるなりけり　吉田庄次郎

あさ霧に舟はかくれて舟うたの
　聲のみくだる刀根の川づら　梶木雄吉

瓦ぶきこゝにかしこに立そひて
　わがふるさとは昔にも似ず　富山正

わが植ゑし庭の若松かげふりて
　杖つくばかりおいにける哉　萩原宜通

冬がれしせとの梢にあかき花
　さけりと見ゆるからす瓜かな　水谷長治

枯野はらかたぶく月に風さえて
　かげものすごし松のむら立　森田忠政

古寺のむねにきざめる龍の背に
なれても鴉のあそぶなる哉　本田丁典

み社をおほふ松が枝苔むしぬ
とはき神代の二葉なるらむ　市川竹麿

禍津日の八十禍ごとにあひて後
人はまことの神を知るらむ　和田三友

天地のものゝひゞきは靜まりて
夜半靜かにもつもる雪かな　安藤安

白雪のきよきこゝろを心にて
ちりの此世にあるよしもがな　川井易知

ふる雪の深さ淺さによべふきし
あらしのあとも見ゆる庭かな　沼野吉乙

人心かはりもてゆく世のなかに
ひとりかはらぬ雪のいろ哉　岩村操子

いなり山あけの鳥居の注連の上に
たれか掛けゝん雪の白ゆふ　小泉かの子

豐年の秋のをさめはことはて丶
　雪しづかなりをやま田の里

設樂御幸子（以下竹柏會員追加）

我山は五百重の山の上なれば
　月のみやこも近く見えけり

前田美子

ちひさなる望をすて丶中々に
　廣くなりたる胸のうちかな

菅原たま子

秋風のつらき心もよそに見て
　やさしくなびく女郎花かな

水のおと

佐々木信綱

小花君と共に地獄谷のほとりに
夏をすごしける時

天地のかくろへごとを我むねに
　さゝやくごとき水のおと哉

西ぬしのなりどころにて歌のま
とゐしける時波を

人の世のさかえおとろへよそにして
　浪は千年のひゞきなりけり

飯淵君清水君と仙臺に在ける時

秋風を
秋風にふきおくられて明方の
並木のかげを我ひとり行く
石樽君と清澄山にのぼりて
山高きみ寺のうちにある程は
われもしばしの佛なりけり
井原君の陸軍測圖手となりて
清國に赴きける時
筆とるも劍をとるも國のため
つくす心にふたつあらめや
楠緒子ぬしのもとにて糸重子ぬし
のピアノを聽く月あかき夜なりき

ぴあのひく君の玉手に神ありて
きみの調べの空にひゞくらん
雪ふれる夜人々つどひけるに
山田君を思ひて
雪ふかき北の海邊にひとまきの
ばいぶるもちて行きし人はも
病をつくろふとて年ひさしく
安房の海邊にある弟を思ひて
ひろき世に只二人なるはらからの
はなれ〳〵にとしを經にけり
父君の一年祭の日
ふしながら見まし〻去年の花うばら

今年もさきぬ折りてたむけむ
父母君の靈祭しける夜
夏の夜の月かげ涼しちゝはゝの
いますかたにもかくや照るらむ

竹柏園集第一編終

竹柏園編纂書目

日本歌學全書　全十二卷
續日本歌學全書　全十二卷
歌學全書は萬葉集八代集を始め四十部の書に標註を加へしもの頁數五千百頁續歌學全書は元祿以降の家集歌論の書百四十七部を校訂せしもの頁數六千三百頁に亘れり

歌のしをり　全壹卷
少年歌話　全壹卷
歌のしをりは言の葉の道ふみわくるうひ山ぶみの楽にせるもの少年歌話は歌に關せる雜話を掲ぐ

わすれぐさ　全壹卷
落葉集　全壹卷
わすれ草はすぐれし才を持ながらいまだ二十年にも滿たで世を去りし島田愛子の遺稿落葉集は夫におくれ子におくれし不幸なる關井林子の日記自傳等を集めし書なり

標註二十一代集　全三卷

おもひぐさ　全壹卷

竹柏園集第二編　全壹卷

標註二十一代集はさきに歌學全書に載せつる八代集の註を書き改め十三代集を加へしもの思ひ草は竹柏園主人の家集の第一集なり竹柏園集第二編は第一編の体裁に等しく竹柏會々員の歌文を集めしもの何れも本年のうちに世に公にすべし

歌文に志ある人の竹柏會の旨趣を贊成して會員たらん事を望まるゝ人は神田區小川町竹柏會にいひおこせ給へ會則を送るべし

竹柏會會員に告ぐ此第一編はいとゝみに撰びをへしにてすべての會員の作を掲ぐる事を得ざりしはいとあかぬ限になむ第二編にはもらさず撰び出べければ四月の末迄に詠草をおこせられよ

明治三十四年二月七日印刷
明治三十四年二月十日發行

編者　佐々木信綱
發行者　東京日本橋區本町三丁目八番地　大橋新太郎
印刷者　東京本郷區丸山福山町六番地　水谷景長
印刷所　東京小石川區久堅町百〇八番地　合資會社博進社工場

竹柏園集　定價金三拾五錢

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

不許複製

◉博文館發兌袖珍本書目

文學士大町桂月君著

第六版

美文
韻文

黃菊白菊

全壹冊洋裝
袖珍上製美本
紙數四百十餘頁

正價金貳拾五錢　郵稅六錢

桂月先生の文は、蠻貊を動かすこと已に久し。悲慨の聲を發しては、秋風の老松に激するが如く。哀痛の音を吐きては、孤猿の幽澗に叫ぶが如く。句々血を吐き、字々珠を綴る。麗くして沈甯、優にして豪宕、洵に是れ一代の才筆、文壇の珍品、一讀すれば人の思を清くし感情を純潔ならしむ。美文と韻文とを學ぶ者の模範となすに足る。譚書家の燈下、この絶好可憐の册子なかるべからず

文學士土井晚翠君著

第三版

天地有情

全壹冊洋裝
正價金貳拾五錢
郵稅四錢

峨々の山、洋々の水、以て晩翠君の詩を評すべし。此集君が今日迄の吟哦を錄して、こゝに美麗の册子を成す。明治詩壇の新光輝たるに背かず。請ふ愛讀を賜へ。

新體詩中別に一旗幟を樹立するもの、詞華爛熳誠に

塩井文學士
武島文學士大町文學士合作

第拾四版

美文
韻文

花紅葉

全壹冊洋裝
上製四百廿餘頁
正價金參拾錢
郵稅六錢

春花秋葉は天の文、人間亦文辭なかるべけんや。鹽井雨江、武島羽衣、大町桂月三文學士の文名、夙に江湖に騷ぐ。其の錦心繡腸、吐いて美文となり、發して韻文となれるもの、凡そ數十篇、集つて此册子に在り。才華爛發、紙上珠を聯れ、地に擲たば金石の聲を發せんとす。洵に花紅葉を一時に看るの心地すべく、明治文壇の奇觀たるも、言を俟たず。天下文を好むの士、願くは一本を備へて讀誦に資せられんことを

大和田建樹君著

第九版

散文
韻文

雪月花

全壹冊洋裝
上製六百五十頁
正價金參拾五錢
郵稅六錢

其文は、清楚婉麗、趣味掬すべく其歌は優雅流滑、奇想天外より來りて、句々風を生じ、言々花を降らすものは、大和田先生の筆と爲す。此編收むるところ近作貳百篇蓋し落寞振はざる今日文學界中の旗鼓たるものは此書を描きて他に又た何かある

紫山川崎三郎君著

古人今人、孰是孰非 風雲月露、大珠小珠 小文章

全壹冊洋裝
袖珍金文字入
紙數三百廿餘頁
正價 金貳拾五錢 郵稅四錢

健筆を以て知られたる川崎紫山君の小品を集めたるものにて、古人今人、孰是孰非、風雲月露、大珠小珠の四編に分ち人物論あり政治論あり隨筆漫錄あり文學談あり、讀來讀去、快味の津々たる者あるべし。

大和田建樹君著

三版 散文韻文 深山櫻

全壹冊洋裝
袖珍金字入
正價金四拾錢
郵稅六錢

著者大和田先生の文學に深く、措辭に妙なるは世既に定評あり。今此書は、先生の散文韻文貳百貳拾餘篇を輯めたる者、一たび繙かば櫻の山に分入るが如く、手を放つ能はざるの妙ある可し。

文學士大町桂月君著

大絃小絃

全壹冊洋裝袖珍
紙數四百頁
正價金三拾錢
郵稅金六錢

水田榮雄君著

北京籠城

全壹冊洋裝袖珍
紙數三百餘頁
正價金貳拾五錢
郵稅金四錢

江見水蔭君著

突貫

全壹冊洋裝袖珍
紙數四百餘頁
正價三拾錢
郵稅金六錢

尾上新兵衞君著

戰塵

全壹冊洋裝袖珍
紙數三百餘頁
正價金三拾錢
郵稅金六錢

江見水蔭君著

戀

全壹冊洋裝袖珍
紙數四百餘頁
正價金三拾錢
郵稅金六錢

江見水蔭君著

星

全壹冊洋裝袖珍
紙數六百八十頁
正價金五拾錢
郵稅金八錢

嚴谷漣山人君著

笑

全壹冊洋裝袖珍
紙數五百五十頁
正價金四拾錢
郵稅金八錢

●福　鶯亭金升君著
巖谷漣山人君著
全壹冊洋裝袖珍
紙數三百餘頁
正價金三拾錢
郵稅金四錢

●女波男波
大橋乙羽君著
全壹冊洋裝袖珍
紙數四百餘頁
正價金四拾五錢
郵稅金八錢

●初子集
文學士笹川種郎君著
全壹冊洋裝袖珍
紙數四百餘頁
正價金四拾錢
郵稅金八錢

●雨絲風片
國府犀東君著
全壹冊洋裝袖珍
紙數四百餘頁
正價金貳拾五錢
郵稅金四錢

●龍吹鶴語
文學士高山林次郎君著
全壹冊洋裝袖珍
紙數三百餘頁
正價金貳拾五錢
郵稅金四錢

●時代管見
齊藤綠雨君著
全壹冊洋裝袖珍
紙數五百餘頁
正價金三拾錢
郵稅金六錢

●あられ酒
全壹冊洋裝袖珍
紙數四百餘頁
正價金貳拾五錢
郵稅金六錢